018174-000-2

特18-897

正信念仏偈勸則

粟津　義圭／述

M29. 2

ABF-1286

勸則序

史云。解書者不註書。註書者不解書。蓋非註解之難。能之難也善哉斯冊。能解其書。能說其書。讀者亦能得其意者。則摻斧伐柯。取則不遠。勸則之名在于斯乎。爲能讀能說者。圭公摩其頂矣。

寛政辛亥之春二月

平安德圓幻住理空譔

明治三十九年

生子18
897

第五篇 正信念佛偈勸則

粟津義圭辨述
佐々木翠村評註

○正信偈の來由

○正月二日

貞應三年を改めて元仁元年、是歳の正月、一説に同月十五日より筆を染め給ふと云ふ

抑此の正信偈六十行、百二十句は御本書の第二行の卷に顯されて。祖師聖人御年五十二歳、常陸國稻田の御菴室にまし〳〵。正月二日より御筆を染られ、御流を汲む末の世の御門下、近くは御座の同行へ御形見に下された。御安心の龜鑑にてある「文字心之畫」ともいひ、又「凡そもの書くことは。人の神靈のあらはるゝ處なれは、ならあとの形見、彼の世のをもかげには。書きをく筆のあとのみぞ、まことの驗しにては侍れ」と。古人もいひし如く、此正信偈一部始終が。御開山聖人の御信心の精爽を書あらはし給ひたものなれは、五百有餘年の星霜を隔てゝ。遥か末の代に生れたれとも、正信偈に向へは。祖師上人に向ひ奉るも同前、文義を聴聞すれは。直

○正信偈造由

○天親菩薩梵に婆藪槃豆菩薩と云ふ譯して世親或は天親と云ふ

○薩婆多有部宗小乘二十部の内に一切諸法實有を立つる宗

○論淨土論願生偈又

の御物語を祇今承ると同じ道理ぢや、『且この正信偈を御造なされた思召は何といへば、此偈の前書に「夫菩薩歸レ佛如孝子之歸二父母一忠臣之歸二君后一、動靜非レ已出沒必由、知レ恩報レ德。理宜二先啓一、又所願不レ輕、若如來不レ加二威神一將何以達、乞レ加二神力一所以仰告、以上爾者歸二大聖眞言一、閱二大祖解釋一、信知二佛恩深遠一、作二正信念佛偈一曰」と遊はされた。『夫菩薩歸レ佛』とある御文は。曇鸞大師の論註に顯し給ひて、夫七高僧の第二祖天親菩薩、佛滅後九百年に當りて。北天竺に現れ出させられ、初めは薩婆多有部宗に於て御出家を遂られ、小乘の論師にてあたれとも。後に大乘に轉向なされ、凡そ大小乘に亘りて。千部の論を造らせられたが、御自身の未來のおちつき處の的を。極樂世界と御定めなされて、三世十方に佛は多けれとも、側目をふらずに頼み歸せられたは阿彌陀如來一佛、其御安心を論の最初の偈頌に顯はされ。「世尊我一心歸二命盡十方無碍光如來一願レ生二安樂國一」とある、世尊と指し給ふは釋迦牟尼如來のこと、弟子天親が心根

は往生論と云ふ

をしろしめされよ、今我西方の盡十方無碍光如來を頼み奉りて安樂世界に往生仕ると。御身の御安心を大聖世尊へ仰せ上られた御ことばぢや、何故阿彌陀如來を頼むて。極樂參りし給ふことを。釋迦牟尼如來へ御告なさるゝことをと云ふに、そこを曇鸞大師の御ことはりなされて、去れはこそ菩薩の佛を敬ひ給ふことは、ちやうど孝行な子か親を大事にかけ、忠節をはげむ臣下か。我主君を敬ふ如くぢや、孝行な子は我身體も我物ぢやとは思はす、全體父母の血脉を分て資ふた此體ぢやと合點して。一生涯隨分我身に疵をつけぬやうにと。大切に守るが孝子の實情。「我ながら我もなつかしなき人の。わきてのこせる形見と思へは」。『諸越の曾子と云ふ人は、易簀に弟子をよび。余か手を啓け余が足を啓け、どこにも疵はなひか。父母にもらふた此身體を。一生涯大事にかけて守をした間は。さて〳〵氣づかひに有りたが、今死てしまへは。もう其世話を免るゝそと申されたとある。『學正子春と云ふ人は、ちよつと蹶ひて足に疵がつひたれは。何箇月もそ

○古歌讀人不詳

○曾子死前のこと

○學正子春

のこと
○班宣疵に泣く

れを苦にして氣やみをしたと云ふ事があり。貫班宣と云ふ者が。八つの歳手に些疵をつけて。殊の外泣たに由りて、そればしのことを何の泣ことがあるぞと。傍から云ふれは、疵が痛ふて泣ではなひが親の産つけた體に疵をつけたが何より悲ひと、十歳にもたらぬ幼兒の。成人も及はぬ孝行の志、聞く人ごとに感じ入たとある、是から思ふに。菩薩の御領解がみな此通、御座の同行は。猶更のこと

○若信云云
御本書信卷の文

「若行若信無レ有二一事一非二阿彌陀如來淸淨願心之所一同向成就一」と御意なされれは、心の底には御慈悲を信して我往生を疑はす、口にはうれしや南無阿彌陀佛、七十八十の老人が。杖にすがりて參り下向、又左なくても度世活計に際のなひ身が、みごと五欲の家を出で。此御座までも參り、御恩がありがたひ御慈悲がたふとひと。喜ふやうに成りたは、さら〳〵我物ではなひ、心に念ずるも口に稱ふるも體に御報謝を營ひも、みな彼尊の御養育から。斯る目出たひ身の上へになし得て下されたものをと思ひめぐらしては、彌ましに他力の御恩を喜はねはな

○五欲
財欲
色欲
食欲
名欲
睡眠欲

らぬ「動靜非レ已出沒必由」。我身ながら我物と思はぬはとの孝行の志からは、父母存命の內は。氣まゝな擧動はせぬ。「出則告入則告」と。只今はとれへ參りて來まする。某處とこから只今歸りましたと。往くにも還るにも親に告ける、それが動靜非レ已と云ふもの。動靜と云ふは動は何でも體を動かし身をはたらかすこと、靜と云ふは內にじつとして居ときのこと是を喩へて見るに。口に名號を稱へ參り下向の御報謝を營むは動の字の意にあたり、表にそれと見せず。內心に深く他力の信心を決定した處は靜の字の意、身をはたらひて御報謝を營むも。心の內に信心を領解て居るも。非レ已とはゆめ〳〵我才覺ではなひ、皆彼尊からの御手まはしぢや、次に「如二忠臣歸一二君後一」とは。君につかへる臣下は。我身を主人に寶て置たものぢやに由て。是亦身もちが氣まゝに成らぬ、主の用を勤める時は云ふに及はす。常平生でからが。或は外へ行ふと思へは。主人に暇を乞ふて出る外から內へもとる時は只今歸りましたと主人へ言す、出るも入るも我儘に

○出則云云
論語にあり

はせぬ如く。『出沒必由』と。信を得ての喜ひを朋同行に傳ふるは。餘所へゆく樣なもの、自身の往生を決定して喜ふは。内へ戻た時にたとへられた出るも入るも主人に告るは臣下の習ひ、人を誘めるも我身の喜ふも。皆私の力ではなひ、如來大悲の御めぐみの顯れぢやに由て。『知レ恩報レ德理宜ニ先啓ニ。』他力の御蔭なれはこそ。若はなりましたれと。身の喜ひを言し上げ。ます〳〵御恩をたふとぶが。信心をえたる同行の心得にてある、今祖師上人は殊更天親菩薩の思食に倣はせられ、我身も信を決定し。此信心を後の世の衆生に說て遺すやうになりたは。曾て以て私の力ではなひ、皆阿彌陀如來の他力回向の御蔭ぞとの思召しから。正信偈を造りて此世に貽し給ふことを。先つ一番に阿彌陀如來へ御告なさるゝ御心で。『理宜ニ先啓ニ』と仰せられた、又『所願不レ輕、若如來不レ加ニ威神ニ何以達、乞レ加ニ神力ニ所以仰告』。本天親菩薩の思召しが。三部經の意に由て。淨土論を造らせられ、彌陀他力のたふとひ事をのべて。『普共ニ諸衆生ト往ニ生安樂國ニ。』あまね

○銘文に我依修多羅を釋して我は

天親論主のわれとなのり給へる御ことばはよるといふ乃至いまの三部の經典は大乘修多羅なり

○六時禮讚光明寺善導大師の作、六時とは日沒、初夜、中夜、後夜、平旦、日中、

くもろ〳〵の迷の衆生を導びきて。西方淨土の往生を遂げたひと思召めす大きな御望みなれは、此旨を釋尊へうつたへ給ひ。今此論を造りまして。末の世に貽したふ存しまする間た、碍なく後の世に傳り。本願不思議の法の弘まりまする樣に、如來の御力をそへさせ給へと思召す心から。『世尊我一心』と。如來を呼び奉りて御告げなされた、御開山は猶更、末の世の惡人凡夫の爲めに。在家往生の御宗旨を御開きなされ。安心の鑑として貽し給ふ正信偈、殊に念佛行者の規則、阿彌陀經、六時禮讚をも勤むべき筥なれとも、末代下根のものは。稱名念佛さへ懈怠になりたがる、剰て御經をよみ禮讚を唱へるなどのつとめことは。在家の身分ではなりにくからふと思召し、御流を汲む後の代の御門下の爲めに、此正信偈を造らせられ。是を貽し置くはどに、在家止住の者は。朝夕御前に於てこれを誦ふれは御報謝の勤にもなり、指當りて。銘々が極樂參りの因緣がしれるぞと。我等を的に貽し下さるゝ此偈文、夫はどの大事のことを。阿彌陀如來へ。御沙汰

○彌勒三會龍華三會、卽ち初會度二會度三會度なり

なしには成らぬほどに、いよ〳〵如來の神力を加へ給ひて。正信念佛の法、他力眞宗の御安心、彌勒三會の曉までも弘まり給ひ、無邊の生死海をつくさせ給へかしと思召す御念願を。懇に阿彌陀如來へ仰せ上らるゝ意にてある、寶「爾者歸二大聖眞言一閱二大祖解釋一、信二知佛恩深遠一作二正信念佛偈一曰」とは、凡そ此正信偈初め四十八句は。大經の意に依せられて。如來の金言を御傳へなさるゝほどに、そこを「歸二大聖眞言一」と仰せられ、「閱二大祖解釋一」とは。「印度西天之論家」より。「唯可信斯高僧說」に至る迄は。

○閱の字解

三國の七高僧御相承の旨を述させられた、時にこの閱すると云ふ字は。左傳に「閱二車馬一」とありて。平生何ごともなひ時は。弓鉄炮鎗偃月刀の兵器武具の類も。みな庫にをさめて置く、すはや軍と云ふ時は。武具馬具の類を取り出して。吟味する、去れは七高僧の論釋數多ひ中、平生は兎も角も。今は我等が惡業の敵を。本願力を以てはろぼし給ひ、入彼涅槃城の。極樂の都へ凱歌をあげて還る。大切の時ぢやに由て、七高僧の御釋を。篤と御吟味なされて。隨自、隨他、要門、弘願の分を正して。七高僧の御勸化の骨髓肝要の處をよりによりて。遺し置て下さるゝを「閱二大祖解釋一」と仰せられた、經論釋の御指南に依て。彌々如來廣大の御恩の遠ひこと入しひこと厚ひこと深ひことを。篤と御領解遊はされて。御報謝の爲に、この正信偈を作るぞと御斷りなされた、

正信念佛偈

○題號解釋

この題號が御開山聖人御一代、御勸化の要て。自餘の淨土宗の安心と。大きに相違して。各別秀でゝ御勸化なさるゝ、一流の御安心が此正信念佛、正信と云ふは此力御回向の信心をいたる姿で、凡夫の信心は卽今どのやうに磋ひても。解行不同の邪雜人といはれて。領解もさま〳〵に異り、心得もいろ〳〵に違ふて。何はと口に念佛申しても。往くさきの參り處は方便化土、果報がいろ〳〵に分れてある、先つ觀經の當分でいへは。上品上生から下品下生まで。九品の差別があり、是れを大經でいへは。邊地七寶の

○和讃に曰く自力の心をむねとして不思議の佛智をたのまねば胎宮にむまれて五百歳三寶の慈悲にはなれたり

○一心云云 二河譬の中の文

○汝一心云云 これも二河譬の文なり

○正者云云

宮殿、菩薩處胎經でいへは。西方の懈慢國、守護國界經で申せは。疑城と有りて、疑心自力の者の寄合ひ處ぢやと說て置せられた、祖師上人深くこれを嫌せられ。切角往生しても。邊地懈慢、疑城胎宮、五百歳中蓮華の中に孕れて。不レ見三寶一の尤をうけて、眞の佛のなひ堂へ參りたと云ふ比況座頭の日高に著たやうな擔梅て供佛利生の事業はなし、むさ〳〵と徒らに月日を送らねはなふぬ、寧もならは如來淸淨本願の。眞實報土の果報を得させたひと思召されて、諸々の雜行雜修自力疑心のひがむた根性を改めさせ。「一心投正直進」と。身も心も如來に任せ。願力不思議で往生一定と。性根をすへて、わきひら見ずに彼尊を賴め。「汝一心正念直來」と喚かけて下さるゝはどに。凡夫の猾狡ひ料簡は捐てしまふて。唯不思議の願力ぞと。深く信じて。餘所見をせぬ心底になれと敎へ下さるゝが。正信念佛の御勸化、是を存覺上人の御釋なされて。「正者對レ傍對レ邪對レ雜」と仰せられた、同し念佛申して極樂を願ふ宗旨も數數あれとも、みな傍信邪信雜信の

正信偈大意又此釋を引用す

類、傍信と云ふは。喩へは賈豎が店を出すに。正の商は呉服物で。片店に兩替もすると云ふやうなもので、正の宗旨は何宗と立て置て。兼て珠數つまぐり。念佛申して後生極樂を願ふやうな信心は。傍信と云ふもの、又念佛宗を正にして居れとも。元祖法然上人の習て仰せられぬことを。中古からあみ出して、五重相傳などゝ云ふて。安心に傳受ごとをこしらへ、其初めに我れ萬行を捨てゝといひ出すは、どうやら雜行を捨たやうに聞ゆれとも、言に云ふたばかりで。今生の福を祈る爲めには。門内に辨天の社をかまへ稻荷の祠を設け、庫裏へ入て見れは。正月の砌りには。年德棚をつり注連をかざり、常から大黑、蛭子の像をならべ火をともし玄酒をそなへて祭りなどする爲體、何にしても厭離穢土欣求淨土の安心を正にすゝめる寺々の。住持の心底の程が理會がゆかぬ、猶其うへ二世安樂の爲めと勸めかけて。念佛を祈禱の代りにするやうな族は、あつたら栴檀香木を消炭にして。二束三文に賣たも同前ぢや、又或は亡者を弔に他宗の引導をけなりが

○住持僧のこと、三寶を住持するに由る

○選擇集に曰く（除二上觀經等往生淨土經一已外於二大小乘顯密諸經一受持讀誦悉名二讀誦雜行一下略）○陀羅尼此に總持と云ふ呪のこと也

つて。家に故實のなひ事を。新規にこしらへたり、左右かと思へは錢まふけの爲めに。産て死したものは。尋常の法事では浮ぬと云ふて、水施餓鬼流灌頂などゝ云こせぬことをして。愚痴無智の尼媼を誘しすかすは、念佛をたふとひ事とは思ひながら。心底が邪ぢやに由て、みな邪信と云ふもの、且法然上人選擇集の第二章に。念佛の行者は三經の外には。即令阿彌陀の神呪陀羅尼にもせよ、それを取りませて唱ふるなれば。皆雜行ぢやと仰せられた御いましめは棚へ揚て、法事勤行に陀羅尼を誦へたり、阿彌陀如來の外に觀音を念し、地藏菩薩を頼みなどして。一向取手方角もなひ爲體は、みな是れか雜心と云ふものぢや、然るに御開山上人は其やうな須しひことを御嫌ひなされて。雜行も雜修もさつはりとなげすてゝ、奥底なふ一念に阿彌陀如來を頼み奉り。御助一定の覺悟になれと。手みぢかに教へ下さるゝが。正信念佛の御化導にてある、實さて此正信の二字を。離釋と云ふて。一字づゝはなしで催促に及はゝ、先つ正の字は。正月の正の字で

○正信の離釋○正の字義

たゝいしと訓せて、まんろくなことぢや何でも傾ふき斜めはまんろくなとはいはれぬ、後世者もそれで。念佛申しながら。領解のまんろくになひが多ひ、或は邪見にかたふひて。悪人攝取の本願ぢやに由て。罪造りても苦しふなひ、勿論如來の御恩も凡夫のことなれは。喜はひても大事なひと、此樣に膚緩してかゝるは。領解のかたふひて居のわるひのぢや、悪ひことゝ知てたしなひで見ても。悪も止られす。後から起り、喜びたひとは思へとも。煩惱に隔てられて。心喜はぬことのさても淺間しやと愧ぢ入りて、やがて御慈悲に立ちかへるは。直にそれが他力の正信、まんろくな領解ぢや、或は又一日に一萬の二萬のと日課をさつかり。念佛を精に入れるは殊勝なれとも、一と聲々々を極樂參りの因と同向するは。領解が自力にかたふひて。是れもまんろくになひのぢや、物のかたふひて正になひは居處が悪ひからぢや、家を立るにも先つ地形を均し水をもり、其上石をすゑ柱立をする、地形が陸になければ。切角立ても立いがみがする。今此念佛も其

○文類正信偈とは文類聚鈔の中の念佛正信偈なり

と同しことで。領解の居どころが大事ぢや、夫ゆへ文類正信偈には。「深藉本願一興眞宗」と仰せられて、我等が領解の居どころは。如來の御本願を藉にせよと御意なされた、若凡夫の心を下敷にして。領解の柱立をする

○樹心云云文類聚鈔の文

と、或は自力に傾ひたり。又は邪見に歪たり、兎角まんろくな信心がをちつかれぬ程に。「樹二心弘誓佛地一」目さす處は本願不思議、をちつき處は如來の御慈悲、御慈悲の上に心をすゑたれは。若る惡人を御助下さるゝ、難有や往生治定と安堵して邪見にも斜まず。自力にも偏らす、居のよひ正な領解、そこを正信念佛とは御すゝめなされた、眞さて信の字は。即ち平

○信の字義

生の御勸化、聖人一流の肝要、他力同向の信心のこと、「本願には是を開き

○本願云云寶章四帖第一通の文取要

て。至心信樂欲生の三信と御誓ひなされたれとも、たゞこれ彌陀を頼むところの行者歸命の一心なり」と。道如上人は御示なされて、宿善開發して雜行をすて自力の煩ひを離れて。後生御助候へと。如來に歸命し奉る一念の信心が肝要ぢや、總て何の道でも。信を肝要とする中に別して「佛法大

○五十一段十信十住十行十廻向十地等覺

海信爲二能入一」と有て。佛法では取分け信心が肝要、去るほとに五十一段の菩薩の階位を立つるにも、先つ初めを十信心と云ふて信心に十種の義を御示なされて、信心が入口で肝要の事とは究りたれとも、しかし今の正信

○十信信、念、精進、慧、念、不退、回向、護法、戒、願

と仰せられた信心は。聖道諸宗にすゝめらるゝ信心とは出處が格別ぢやに由て、名は同しことても意は大きふ違ふ、一代諸教の信心は修する行者の自力の信、去るに由りて信心にも淺深厚薄。あさひふかひのさま〳〵の差別がある、夫れて御傳文にもすなはち「智慧各別なるかゆへに。信亦各別なり」と御意なされた、是は定散諸機各別の自力の信、行者の器量たけに發す、まこと今御開山の御すゝめの信心は。凡夫自力の信心ではなひ、如來御回向の他力の信、此信心を領解したれは。恐れなから拜み奉らるゝ七高僧の御信心も、御開山の御信心も、御相承の善知識方たは申すに及はす末々の御門下、在家止住の面々が。心の底に往生治定と安堵した其信心もひとしふしてかはる處あるへからす唯一つなり、道理こそ如來大悲の御た

○御傳鈔信心諍論の段の文

○あまの原云云　これは安部仲麿かの歌のこと　吳竹集に曰く唐土明州と云ふ處の海邊にて彼國のひまのはなむけしける時よめるなり云云

ましひか。御開山の御胸の中にも宿らせられ。亦何もの心の底にも入りみちて下された、「あまの原ふりさけ見れは春日なる三笠の山にいでし月かも。」安部仲丸が唐へ渡り秘書晁鑑とて。唐朝の官人になり、なが〳〵彼邦に逗留して。故郷日本をなつかしふ思はれたが、或夜濱邊に出て。雲なき月をながめ、東の方に望むて。我ははる〳〵異國の土地に來りて何を見ても見なれぬこと、何を聞ても聞なれぬことばかりぢやか、但見しりたものは天上の月ばかり、此にながむる那月が。やがて故郷日本の奈良の里、三笠山に光かゝや〳〵月にて有ふものをと。深く感慨を催して上まれた歌ぢや。何さま唐と日本と道を隔たること三千里、處かはれは品かはると。見ること聞くことか日本とは大ちがひなれとも、空にすむ月ばかりは。唐も皇和もかはらぬ、去れは本願の所被は十方衆生。出家在家、男子女人、智者愚者、善人悪人のかはりは有れとも、かはらぬものは御同向の信心ばかり、そこを御傳文に。「三槐九棘のみちをたゝしくする家にも。たゝちに四十八

○御傳文

願の月をもてあそふ」と御意なされて。貴人高位の歴々も。匹夫下賤の下々も。萬貫持の長者も。其日すぎの貧乏人も。處をいへは京田舎、江戸長崎、唐天竺と。山川萬里を隔たれとも、七高僧の御安心も。聖人善知識の御領解も、各々我等が歎ひも。時や處はかはれとも、往生治定あら嬉しやの。信心の月のながめにかはりはなひ、「漢書に「信以傳ㇾ信疑以傳ㇾ疑」」と云ふ言かあて。人に話をするに我心に有ることかなひことかと。貳の足をふむて申すことは。聞く者も亦疑ふておちつかぬ、足實地を踐が如く。自身に決定していへは。聽く人も亦信を取て疑はぬ、對のもたす機で。此の信が向へ徹するのちや、易に「豚魚有ㇾ信」と云ふた、これは人の信が畜類鳥類鱗蟲までに徹すると云ふことぢや、實たとへは南都の猿澤の池、亦は八幡の放生池など、其外名ある寺院處々に魚を助けてはなつ池があるが、不思議なもので。海川にすむ鱗蟲は。人の足手影を見ると。磯磯に居たも沖の深池へ逃かくれる、夫はどに人をこはがる魚なれとも、放生池の魚は

信行兩座の段の文

○漢書信疑のこと

○放生池魚の喩

○寶章に曰く　如來の誓願を信じて一念の疑心なきときは如何に地獄へ落ちんと思ふとも彌陀如來の攝取の光明に攝めとられ參らせたられん身は我はからひにて地獄へも落ちずして極樂へ參る

かりは。人の履聲をきゝと。口を開きて人に向ふ、是れはどうなれば。魚の心に何のわきまへはなけれとも、一旦放生して。いつまでも此魚を助けてやると。思ひこむで放ちた人の信が、もの知らぬ魚の心に徹したものぢやに由て、人怖がりて逃け潛れる魚が。人を見ると喜んで。餌をくれるかと。口をあいて向ふ、今も亦そのごとく十方三世の諸佛如來の御手をはなれて、三惡道の深みへ〳〵と。逃てまはる迷ひの我等を。『若不レ生者不レ取ニ正覺一。』我と同し阿彌陀のさとりを。是非與へずには置ぬぞと。思召しつめられて、本願御成就なされた阿彌陀如來の信が。我等衆生が精神にこたへさせられたれば、不思議や多生曠劫御慈悲に背て。逃まはりたる身知らすの徒ものが、今は御助け候へと彼尊へ向ひさても難有や南無阿彌陀佛と、口を開ひて御助の御恩を喜ぶ身の上とはなりたた、願念佛偈、さて此念佛に付きて。念の字もし意念と云ふ時は。心に思ふことを念と云ふ、又唐人が『念ニ阿房宮賦一』なと云ふ時は。口に唱へることぢや、それで法然上人

べき身なるが故なり

○念佛偈の釋

○選擇集に曰く聲卽是念、念卽是聲其意明矣云云本願章の下見るべし

○御一代聞書に曰く思ひ中にあれば色外に顯はるゝとあり、されば信をいたる體は、すなはち南無阿彌陀佛なりと心得れば口も心も一つなり

は。念稱是一と御定めなされて。心に念するも口に稱ゑるも一つことぢや何なれは『戲言出レ思』と云ふて。あだ口に云ふことでも。心に思はぬことはいはぬ、御助の御恩ありがたやと心に思へは。必す口に南無阿彌陀佛とうかび出る、去るに由て念佛と云ふは。心に御慈悲を思ふも念佛、口に名號を稱るも念佛、口も心も俱に一つの南無阿彌陀佛ぢや、併しこの念佛は本阿彌陀如來の口稱を本願と御習ひなされ、さしも五劫永劫の永の年月を送らせられ、御思案工夫遊はされて。此の稱ゑやすく持やすひ六字の號を案じ出し給ひ、腰ぬけの居計と。腰膝ぬけて身の自由も叶はぬやうな老人、又は癇つかれた病人などの、たつた一聲で。極樂參りの御約束の。相濟やうになし下されたが。阿彌陀如來の念佛往生の本願、易行の至極ぢや、そこを本願に『乃至十念』と御ちかひなされた、願時にこの『乃至十念』の念佛を。御開山の御心から觀れは往生の業にする念佛ではなひ、夜のあけたは日の出ぬ前、往生の定るは口に未だ念佛申さぬ先、至心信樂の

○乃至十念のこと

一念、行者の胸に浮びあらはるゝ時。「即得往生住不退轉」と、今日迄は彼尊に後をむけて逃さはりた我等が、此ひひて如來に向ひ。助給へと一念心にうかび出る、それを相圖に「若不生者不取正覺」。其場で直に御助のすむだ身の上、御助がすむだからは。其後口にうかひ顯はるゝ乃至十念の稱名は、さしつめ御恩報謝の念佛ぢやと御傳へなさるゝが。祖師上人一流の御安心ぢや。實時に此念佛に即て。上人の愚禿鈔に。「定心念佛、散心念佛」と云ふ。二種の念佛を御立なされた、世間の人が、念佛申せども。多くこの定散自力の心にといまりて。實の正信念佛の喜びをうる人は鮮ひ、いやゝそりや他宗の人こそ。左右も有ふけれ、此らはなかゝ其やうなうろたへた領解ではなひと思はれふが、御宗旨の御流汲で。天晴の信者ぢやと。人にも知らるゝはどの者が、ゐては此定心散心の仲間へ入て居る、實先つ定心と云ふは。善導大師の御意なされた「息慮凝心」慮をやめ。心を凝すと云ふのぢや、それはどうぞといへは。夫朝夕彼尊の御前へ出て

○定心念佛散心念佛のこと

○定心念佛のこと

御禮申さふと思へは、もやゝといろゝの事が思はれて。有無に心がかちつかぬに由て、何とぞ此さはがしひ心をしづめ、一返唱ふる稱名も。眞實底から難有思ふて稱ゐたひものぢや、夫れでこそ實の信心なれ。正味の念佛なれと思ふて妄念を止ふゝとかゝりて居るのはそれがやがて定心の念佛と云もの、自力のたい中ぢや。「不曰白乎皂而不磨」「不曰堅乎磨而不磷」樂子は三年みがひても白ふはならぬ、妄念を止めふとかゝりても。泥型人の水なぶり、さはれはさはるはど濁て來て、いつまでも心の澄了ると云ふことはなひ、然るに及はぬ已が計をさせて。妄念をやめて眞實ありがたひ、ひんぬきの念佛申さふと。折敷て大豆よる樣に仕かけるか。夫定心の念佛、御開山の大御きらひぢや、今正信の念佛と仰せらるゝはそこではなひ、祖師上人の「往生は何事もゝ如來に任せたれはこそ他力にては候へ、さまゝに計ひあふておはしまさんは、おかしく候」と御意なされ、他流の先德は「わさとやめんとすれは妄念いよゝをこる、

○不曰白乎云々論語陽化第十七に出づ

○往生云々末燈鈔諸佛等同と云事の下に出づ

○散心念佛のこと

をこらはをこれとうちすてゝ。念佛申すが手にて候」と示され、惠心僧都は。「妄念の中より申し出つる念佛は濁りにそまぬ蓮の如く。決定往生疑なし」と御勸化を遺された、唯機の方をうちすてゝ。不思議の願力ぞと信ずるばかり、娑婆逗留五年十年の間、妄念妄執はいかほど起ふとも、夫は凡夫の曲力及はぬその中から斯るものを御助一定。ありかたや南無阿彌陀佛と。稱名喜ぶ領解に成りたを。正信念佛とは御意なされた、實さて次に散心の念佛と云ふは。善導大師の「滅惡修善」と御釋なされて、世間に念佛申す人の心が。みな功德たのみ、一遍唱ふるも滅罪生善、現當二世の爲めと思ふて稱ふることぢや、夫れが即ち散心の念佛と云ふもの、當流の御勸化を聽聞して。我は其氣を離れたと思へども、よう僉議しはして見た時。やつはり其氣が大根に止ぬものぢや、病の床に臥し。妻子の看病にあひ。病中も法義三昧、御慈悲を喜ひ〳〵。念佛申し〳〵息引き取りたらば。まことに臨終正念目出たふ往生をとゞるで有ふが、思ひの外な頓死頓病、道あ

○是れ念佛を賴みにする心あるゆへ頓死頓病などにて思ひがけなふ死ぬる時往生いかがと思ふ是口稱たのみの自力としるへし

○偈の字義

○偈陀　梵語なり新譯家には伽陀と云ふ孤起と譯す諷頌と云ひ頌と云ふ皆一なり

るきもッてうんと駄れてつゐそれ切りに死んだり、又は子丑の寐入りばなに死んたらは。往生はいかゞ有ふぞと、そこを心元なふ思ふなれは、やがて夫れが散心念佛の領解、自力の闇の晴ぬのぢや、今他力の念佛と云ふは思ひがけなふ偷兒にあふて、たつた一刀に斬ころされて。念佛一遍申さず阿彌陀如來の願力不思議て。平生一念の時、御助は一定なれは。頓病頓死は云ふに及はず、たッた今此身が思ひがけなふ鎗でつかれて死でも、息がきれると直に眞實報土へ參らせて下さるゝものを、頼母しや南無阿彌陀佛とゆめ〳〵本願を疑はす、稱名よろこぶ領解になりたを。正信の念佛とは仰せられた、實さて偈とは。具さには偈陀と云ふ、晉の語に譯して頌と云ふ、辭に出し節をつけて歌ふことぢや、曇鸞大師の論註に。「偈句數義」と仰せられて。或は五言或は七言等の。文字の數を定めて。謳ふ爲めにしたものぢや、時に偈は多含と云ふて。纔の言の中に、かず〳〵の義理がこもりてある、喩へていはゝ。一年十二箇月の大小を。一度々々に暦を開ひて

僉議するは大騒なに由て、三十一文字の歌によひたり、亦は發句などにして。夫さへ覺ゆれは。暦見るにも及はす。一年中の大小がしれる如く、惡人凡夫の極樂參りするはとの大事ぢやに由て、廣ふいへば釋尊一代の說教にもわたり、近くは淨土の三部經、さては天竺支那我朝の七高僧の論判釋義、廣く我等が極樂參りを御ねんごろに敎ゑ下されたれとも、末代下根の凡夫、殊更在家止住の面々、なか〳〵拜見もなるまひし、聽聞すると云ふても。大底際の入ることではなひ、然るに祖師上人、其廣博ことを。此正信偈百二十句に御つゝめなされ、在家止住の輩、御内佛で朝夕これを唱ゑて。御つとめ申せは、千六百三十五行、貳萬六千六百十二字の。三部經を讀誦して。御報謝申す道理にかなひ、七高僧の論判釋義も。何にも知らぬ愚痴の凡夫、正信偈さへ聽聞すれは。要の處がさら〳〵と聞へて、本願他力の御安心。つゐ心易ふ領解の出來るやうに、手みぢかに御勸化下されたか。今此正信念佛偈にて在す、

○歸敬體德のこと

歸命無量壽如來。南無不可思議光

這二句は歸敬の體德を讚せらるゝと云ふて、祖師上人この正信偈を御つくりなされ。世に貽し給ふも、太祖を初め末の代の御門下迄、御敬ひまふす的は阿彌陀如來の御恩德ぢや、其阿彌陀如來を阿彌陀と名付けたてまつる義は。此御壽命と光明との二つを。御成就なされたゆへのことぢや、夫れで阿彌陀經に。彼の佛を何阿彌陀と號け奉るなれは。其佛の御壽命、及び御蔭でかの淨土へ參る衆生迄が。彼尊と同し〳〵無量無邊阿僧祇刼の。長ひ壽命をたもつに依りて、それで阿彌陀と申し奉る、又この佛の光明が。十方無量の國々を照し給ひて。少しも碍がなひ。夫れて阿彌陀と云ふと。御演說なされたれは、光明と壽命との二つのことはりを。覺り究め給ふに由て。是れを一口に稱ゐたれは南無阿彌陀佛、其德を分けて呼ひ奉る時、「歸命無量壽如來南無不可思議光」と申し奉る、眞さて歸命と云ふは。能歸の信相を顯はされて、行者の方から。彼尊を御敬ひ申す姿を歸命と云ふ、こ

○阿彌陀經に曰く彼佛光明無量照二十方國一無レ所二障碍一是故號二阿彌陀一又舍利弗彼佛壽命及其人民無量無邊阿僧祇刼故名阿彌陀

○歸命と云ふこと

○論註上卷の御言葉、歸命釋の下に出づ

○歸命釋行卷に出づ

の歸命の中には。三業の敬と云ふて、心に信を得て御慈悲を喜ふも歸命、口に南無阿彌陀佛と稱るも歸命、身に禮拜恭敬して御うやまひ申すも歸命、併なから曇鸞大師の『禮拜唯是恭敬不二必歸命一、々々必禮拜、以レ是推歸命爲レ重』と御釋なされて。分て云ふ時は胸の中に深く信じてたふとふがまて、との歸命、樹木の根が蔓りてたしかなれは。枝葉はひとりでに茂へる、信心決定の根が深ければ、おのづから口に稱へもする、身に參り下向の御うやまひも出來るに由て。兎角歸命の信心が正ぢやと御示なされた、さて其歸命と云ふを祖師上人の御釋なされて。『本願招喚勅命』と仰せられた、招喚とは招は手をさしのべて人をまねくこと、喚は聲をはりあげて人をよぶこと、設は親が子をつれて他處へ去ところに、不圖其子かはぐれて。方角道筋は知らす。難儀してゐるを。親が方々を尋ね。其子が名を云ふて喚でまはる處、向ふにちらりと後影を見つけて。親は喜ひ聲をばかりに其子をよび、間が遠けれは聲がとゝくまひと思ふて。高き處へあがりて。臂をさし仰て手まねきをする、そこでやう〳〵其子が彼の手まねきを見つけ。親の喚ふ聲を聞しりて、さても嬉しやと。親の許へ走り寄るが如く、我等は嶮切流涙の迷子、三界六道の岐に。覺の方角を知らす迷ふてゐるを。『設我得レ佛十方衆生』と喚びかけて下され。『若不レ生者不レ取二正覺一』と願力不思議の臂をさしのべて。招きよせて下さるゝに由て、とうやらかうやら。今は淨土へ參りたひと思ふ氣が付て、一念發起して。御慈悲に縋る心に成りたが。眞實如來に歸命する姿にてある、然れは信するも念するも阿彌陀如來の御方便、彼尊の御まねき彼尊の御よひ聲にさそはれたものぢや、そこを『本願招喚勅命』と仰せられて、疑れ〳〵と喚せらるゝ。御聲の響が。行者の心にあらはれて。助け給への一念となる、寶喩へは幼ひ兒が。鏡に向ふて。我貌のうつるを見て。手まねきをすれは。鏡の影も手まねきをする、鏡の內から手まねきするのは。此方から手まねきする影のうつるのぢや、一念彌陀に歸命して。後生助給へと賴ひは。我か賴ひに似たれとも。

○寶章に曰く信する心も念する心も阿彌陀如來の御方便より起さしむるものなりと思ふべし

○鏡を見る喩

○山彦物の聲谷にひいくなり能因法師の歌に「天彦のこたふる山のはゝとぎす一聲なげば二聲ぞきく」なども同じ心なり

○銘文に曰く歸命はすなはち釋迦彌陀の二尊の勅命に隨ひ召にかなふと申すとなり云云

参れ來れと大悲の御手を指のべられ。我等を招ひて下さるゝ。彼尊の御念力の影うつりぢや、興又山の頂へ登りて。聲をあげて喚べば。向ふの谷に酬る聲がきこゆる、是れが「よべば報ふるやまびこの聲」と云ふて。向ふの谷合にこたふる聲は、やはり此方から呼た聲の響。「正覺大音響流十方」と。阿彌陀如來、正覺御成就の時より。参れ〳〵と喚かけ給ふ其御聲が。我等が煩惱妄執の谷底に響わたりて。南無阿彌陀佛〳〵と。信心のこたまの聲にあらはれ出るのぢや、夫ゆへ歸命を「本願招喚勅命」と御釋なされた、又の御言に「歸命とは仰せにしたがひ召にかなふと云ふこゝろなり」と御示なされて、仰せとは如來の仰せ。「阿彌陀如來の仰せられけるやうは末代の凡夫罪業の我等たちんもの。罪はいかほど深くとも我を頼まは必ず救ふべしと仰せられたり。」箇樣のありがたひ仰せのあるを。今迄は仰せに負て。此罪僧では此障りではと。往生に身を卑下して。兎や角と自力の計ひ、由なひ虚骨を折りて居たは。仰せに負たと云ふものぢや、興むかし夏

○阿彌陀如來云云 寶章の文

○渾子の譚

○寶卷 すきなり、さるの如きもの竹にて造る

○孟蘭盆經疏の文

に渾子と云ふ者が有りて。一生親の云ふことを用ひず、親が山へゆけといへは川へゆく。川へゆけといへは山へゆく。兎角親の心に背て居た、其後父が病中に思ふやう。翁か死で山へ葬りをれは好が、しかし左右云ふたらは亦川へ流しからふに由て、やはり川へ流せといはふ、左右云ふたらは定めて山へやりをらふと思ふて。渾子を枕もとへよひ、こりや豚兒よ。此度は乃翁も死ぬるで有ふ、死たらは死骸を寶卷にして川へ流せと云ふたれは渾子いかにも畏りたと云ふて居たが、心に思ふやう。是まで父の達者なうち。兎角に命ることを直に用ひず。山といへは川、々といへは山、一生父の心に負てばかり居たが。今は末後の一言、せめて是ばかりは命るとはりにせふと思ふて。息引とると早速寶卷にして川へ流してしまふた、とは〳〵一度も父の意にかなはなんだと云ふ事がある、興盂蘭盆經疏に「發心避越萬行、徒施。」方角を取りちがへて東を西と思ひ、一歩ふみだすと行けはゆくはと西の方へは遠さかる如く、今まで他力の方角を取りちがへ

てゐた間は。即命念佛申しても、參り下向の足手を運んでも、するほどのことが如來の思召しに違てゐた、ちやうどかの渾子が比て有た、然るに今御開山の御手ひきに値て。雜行雜修の心をすて。無手と一念如來を賴むて往生治定とふみだしたれは一念々々が如來の御意に契て。日々夜々に極樂往生の近づくを待ちうけて喜ふ身とはなし下された、〔圖〕さて召にかなふと仰せられたは。公義の御召し何町何村の某甲、御用の義あるに依て。明日何時に御役所へまかり出つへし、もし遲參に於ては越度たるべきものなりと云ふ召し狀がつひたれは、なか〳〵夜も眠られたものてはなひ。雨ても晴ても行ねはならぬ、此たびの淨土參りがそれぢや、我れと思ひ立て參るではなひ。「本願招喚勅命。」三部經の召狀がつひたに由て。妄念の風は吹ても。煩惱の雨はふりても。「雨ふらはふれ風吹かはふけ。」其中から御助一定の覺悟にならねはならぬ、

○召にかなふと云ふこと

○無量壽の

〔圖〕「生盤所レ重不レ如二一醉一。」凡そいきとし生るほとの者、命を惜まぬものはなひ。然れとも其命が心に任せぬもの、非想の八萬刼もつゐには無常をまぬかれす。刼てはかなひ人間の命は猶のことぢや、〔圖〕春秋齊の桓公が「寡人有二千歲之食一。無二百年之憂一」と嗟かれて。誰有ふぞ四百餘州の大名頭ら、富天子に比ふばかり。設ひ千万年榮耀を極めても。既になる氣づかひなく。食物は澤山に持ちたれとも、せめて百年生きて其食をくふ命かなひと申されたも。心に任せぬものは壽命ぢや、世間の上を見およぶに。今日襲ふて朝夕を送りかねるやうな者は。あゝ詮度した、早ふ死んてこの苦患がのがれたひと思ふものも適にはあれとも、萬事心に適て。何くらからぬ長者の身では。死にとむなひが道理ぢや、〔圖〕そこを見こむて寶藥の看板能書よむて見れは。先つ第一に腎精をまし。氣血をめくらし。體の艶を出し。髮の毛を黑くするなど、いろ〳〵好しふ書てある、いかな老人も眼鏡をかけ。篤と讀て見て。是は結構な藥ぢや、翁も寒中のむで見やうと。地黃が入てあれは。時分がらの大根を忌むて。其藥をのむも、とうぞ年より

解釋
○非想云云 非想天の壽命八萬刼なり
○齊桓公の嗟嘆
○寶藥能書の喻

○正像末和讃の文なり

とむなさ。長壽がしたさぢや、夫れほど如在なふ養性しても。命に限りがあれは。長命は叶はず、まさかに成りて。佛神に祈りたとても。神佛の御力にも及ばぬ、そこを阿彌陀如來法藏因位のひかし。第一番に衆生の願を御身に引受させられ、其死とむなふても叶はぬ命を。長を持ていつ〳〵迄も死する氣づかひのなひ身にしてやりたひと。「選擇五劫思惟して。光明壽命の誓願を。大悲の本とし給へり。」本願では第十三番目に。先づ御身の御壽命を願はせられ、第十五番目に眷屬長壽の御願とて。極樂へ參るほどの者も。如來と同しふ無量壽の覺を與ふぞと、くれ〳〵の御約束で有たが。其願已に御成就あて。南無阿彌陀佛とならせられたれは難レ有ぞ、娑婆の命は草頭の露、陽炎、朝電、水の泡、本が凡夫有漏の雜業から感じたる命なれば、長生したひとて心にもまかせず、又「命長げれは耻多し」ともいひ。「うきを見するは命なりけり」とも云ふて。長命で結句迷惑なこともあるはとに、其やうな願はしひ。生死無常の命は。約束次第と任せ置て、此無量

○うき憂也

壽の如來を頼み奉れは。歸命の一念に攝取の御利益をかふむり。追付淨土へ參るやいなや。彌陀同體のつきせぬ無量壽の果報をいさせ下さる、それゆへ彼尊を無量壽如來と申し奉る、實次に不可思議光とは。阿彌陀如來の光明の德を呼ひ奉りたもので、言にも及ばず。思案工夫にも落ぬことを。不思議とも不可思議とも云ふ、其不思議に付ては。枯木に花がさき。瓢單から駒の出るやうなことはかりを。不思議と思へとも、氣を付て見れは。世界の事がみな不思議ぢや、「染いたす人はなけれと春くれは。柳は綠花は紅」。其花にもさま〳〵か有りて。赤いもあり白いもあり、黃なもあり青もあり、青黃赤白それ〳〵に咲わけて。自然の色香を具たところ、なか〳〵人間わざに及ふことではなひ、是れを造化の自然と云ふ、これらは目前の不思議、さて諸經論にわたりて。五つの不思議と云ふ事がある中で。佛法不思議を第一とする、其佛法不思議の中では。彌陀の本願が不思議の極りぢやと。曇鸞大師の御意なし置れた、即ち御釋文に。「凡夫人有二煩惱成就一、

○不可思議光の釋

○古歌讃人不詳

○和讃に曰く、いつゝの不思議をとくなかに佛法不思議

にしくぞなき佛法不思議といふこと
とは彌陀の弘誓になつけたり

○驛亭の喩

得レ生二彼淨土一、三界繫業畢竟不レ牽、不レ斷二煩惱一得二涅槃分一、焉可二思議一」と御示なされた、是れが不思議の至極ぢや、凡夫と云ふは我等がこと、煩惱成就とは。煩惱惡業身にみち〳〵て、わるひことに取りのこしのなひこと、夫れが一念の信をひて。極樂參りする身になりたれば、「三界繫業畢竟不レ牽。」爾たとへは何國でも道中筋の驛亭共晩景に及べは家々から驛女が出て。旅人の手をとり袖を引て。此へ泊れ彼へ泊れと、ひきつりひつはる時、常宿のあるものは。某處何屋へゆ〳〵といへは。引たものも手を放す、何か我等生死流轉の長の旅、廿五有の驛坊を。昨日も今日も過れは、おそろしひは三界の繫業、中にもこわひ地獄、餓鬼、畜生の三惡道の否な宿から、とまれ〳〵と引つりひつばられた身が、ありがたひは一念歸命の信をひて。極樂が常宿と定りたれは、もう「三界繫業畢竟不レ牽。」六道輪廻の妄業、手出するものなく。淨土參りにいさゝか障りのなひ身となし下されたは、心も言も及はぬ不可思議光如來の御利益にてある、爾時に其如來へ

○廿五有
須彌四州、三惡趣、修羅、六欲天、梵天、色界四禪、無想、淨居天、四無色天これなり

○南無の辨

南無し歸命するとはいかにと云ふに、本この南無歸命は。支那天竺の語のちかひで。我朝の語に譯せは、どちらも助け給へと云ふこと、然れは歸命無量壽如來とあるも。南無不可思議光とあるも。近ふいへは阿彌陀ほとけ我を助け給へと。眞實に如來を賴むことぢや、夫に就て曇鸞大師の。「歸命必禮拜、々々不二必歸命一」と仰せられて、手に珠數かけぬものもなし。佛を拜まぬ者もなけれとも、眞實に如來を賴む人が希な、今は眞實に後生御助候へと、うちこひで御賴み申すを。南無とも歸命とも云ふ。善導大師二河の御たとへには「一心投正直進」と仰せられ。御文に「深〳〵如來に歸入する心をもつべし」と御意なされたが爰ぢや、爾昔し平家の公族、薩摩ノ守忠度は。法然上人へ深く御歸依申されたが。出陣の日、上人へ御いとまごひに參り申し上らるゝやう。私共一門運つきまして。明日都を落ちゆきまする、戰場にのぞみましては。何時戰死仕らふもしれませぬ、敵同士さり合ひ白刃の上にて相果ましても。未來の御助に相違は御座るまひやと。御

○平忠度の因緣

○法然上人の歌

○生田の森 攝州にあり

○最後 死すること なり忠度時に年四十一源平盛衰記に出づ

尋申されれば、其時上人の、「阿彌陀佛とうちこひつるき其まゝに、敵も味方も西へこそゆけ」と。御歌を遊はされた、此こゝろは武夫のならひ。互にきり合ひ戰ふは。まことに修羅道のありさまなれども、敵にもせよ味方にもせよ。心の底に一大事の後生御助と打ちこひて、如來を賴む決定心さへあらば。即命最期はいかゝあるとも、往生さら〳〵疑はなひぞとの御勸化で有りた、忠度ありがたく存じ。今生の見參は今日限り、追付淨土で御對面申し上ませふものをと。御暇申して出陣せられたが、按の如く翌日生田の森に於て。源氏の士、岡部六彌太をくみふせ。殆に刀に手をかけられしに、思もよらす郎等の爲めに。右の腕をうたれ。今は叶はすとて西に向ひ、しづかに光明遍照の文を唱へ。左の手を心にあて念佛數十遍、最期いさぎよく。頸をうたれ給ひたとある、夫御歌に「阿彌陀佛とうちこひ劍」とは。戰場の事なれば。刀を拔てなぐりなさけもなく。敵に切りかける處を。打ちこひと云ふに通せて。雜行すてゝわき目をふらす、無二無三に如

○領解文の一句なり

○一念一多證文に曰く一念は功德のきはまり一念に萬德ことゝゝく備はる萬の善みなおさまるなり

來を賴む心の。餘念なひ處を、うちこひと仰せられた、何れも極樂參りがしたけれは。打ちこまねはならぬ、那も賴み是も賴み。今生も後生もと云ふやうな。內股膏藥二半な事では。打ちこひだではなひ、浮世は夢ぢや幻ぢや。後生こそは大事なれと。現世祈りをさらりと止め、「今度の一大事の後生御助け候へ」と。一心一向わき目をふらず領解に成りたが。身も心も頸に打ちこひだ。金剛心の談にてある、此の領解になるを。天竺で南無といひ。支那で歸命と云ふ。我國の語に譯しては。助け給へと如來を賴みまする。一念の信心、この一念を佗力より發得しぬる後は生死の苦海をうしろになし、涅槃のかの岸にいたる條勿論なり、一念歸命の時、其座で命終らは。直に極樂參り、もし其時の命のびたらは。自然と多念に及ひ舌の根のまはる間だは、さても難有や南無阿彌陀佛、

法藏菩薩因位時、在世自在王佛所、觀見諸佛淨土、
因國土人天之善惡、建立無上殊勝願、超發希有大

○大無量壽經上卷の意就て見よ

○五十三佛錠光如來光遠如來乃至

弘誓

斯文の意は。阿彌陀佛のむかし。法藏比丘にて御座なされし時、御師匠世自在王如來の所に詣て給ひ。佛の加被力を乞せられ。二百一十億の諸佛の淨土を見そなはし給ふに、淨土にも優たと劣たとの差別があり、參る衆生の果報も亦千差万別にわかれて。一準ならぬありさまを御覽なされ、我國を建立したらは。「恢廓廣大超勝獨妙」の眞實報土、參る衆生にも一種眞妙の證を得させて。優劣の差別はあらせまひと誓はせられ。佗力攝生、南無阿彌陀佛の本願を思召し立れた、其法藏比丘因位のをこりを。今の御文に斷らせられた、即ち大經に「時有二國王一、聞二佛說法一、心懷二悅豫一、尋發二無上正眞道意一、棄レ國捐レ王、行作二沙門一、號曰二法藏一」と說かれて。乃往過去久遠無量不可思議無央數劫のむかし。錠光如來世に御出世あられてより。五十三佛世に續せられ、第五十四番目が。世自在王如來にてましく〳〵た、此時一の國王有りて。世自在王佛御說法の會座へ御參詣あられ、一座の御

處世如來、大經に出づ見るべし

○華嚴經海水の御喩

教化を聽聞し給ふうち。「心懷二悅豫一」と。この國王大に歡喜踊躍の御よろこびを得させられたとある、此御よろこびが普く十方衆生に流れわたらせられて。秖今在座の同行迄が。御助一定あらうれしやと。信心歡喜の歡にもとつきゐた、其源をたづぬれは。此國王の御悅ひ。法藏菩薩の御信心がやがて何れもの心の底に即今浮びあらはれさせられた、華嚴經に。「譬如二大海一、其水潛二流四天下地八十億小洲中一、有二穿鑿一。無レ不レ得レ水。佛智海水亦復如レ是」と御演說なされて。世界國土の地の底どこを穿ても。水の湧ぬ處はなひ、水の源を尋ねて見れは。大海の水が世界の地の底にみちく〳〵てある、ちやうと。今も其如く。無宿善のむかしは。どこに信心歡喜の歡の潤は見ねねとも、ひたすら善知識の御勸化を聽聞するは。大地の土をはりうがつか如く聽聞する度ごとに次第々々に歡ひの潤も顯はれ、信心の水を汲あけるやうになる。其源はかの法藏比丘世自在王如來の高座のもとで。「心懷二悅豫一」の御よろこびを顯はされ。「尋發二無上正眞道意一」の。彼尋の大

○無上菩提心　大經には無上正覺の心と云ふ何れも同しことなり

○大經に曰く　我當愍度脫一切二十方來生心悅淸淨已到我國快樂安穩

菩提心のまことの水が。我等が身うちにくゝらせられ。胸の中にみちくゝて下されたのが。今同行知識の催促にはり穿たれ、さても難レ有と。御恩喜ぶ身にはなりゑた、時に此國王。御說法終るや否や御悅びのあまり。卽ち無上菩提心を發し給ひて。那十方の迷の衆生を。我獨の精力で、ことゞく助け盡さすは置くまじと思召しきはめられた、道理こそ末代の凡夫、欲に惑ひ愚痴の心に覊されて。一大事の後生を何とも思はず、一寸先きは闇の夜の眞くらかり、往先に可怖ところのありとも知らず、一生の所作には妻にまとはれ子を愛し。我身が大事家が大事と。夢の浮世を實と思ひ、家にも離れず妻子も捐す。恩愛の奴と成りてあゞくの竟に三途の大河を。徒わたりせねはならぬ在家止住の凡夫、若るものを哀み給ひて。今この國王國をすて位をすて。御后にも王子にも。永の訣別を告けさせられ。彼幹御ひとりが。十方衆生近くは在座の我等になり代せられて。御出家を遂られた、そこを御經に「時有國王」と說せられた。實時に不審がある、今この大

○法藏菩薩の系統を出さゝることゝ

經に法藏因位の發願を說き給ふに付て。世自在王如來の事を御說なさるゝにも。乃往過去久遠無量不可思議無央數劫の往昔、錠光如來より。五十三佛の系圖をつらねて。若る由緒たゞしひ佛ぢやと。御師匠の如來の御系圖まで、ながくと御說なされた、然るに肝心阿彌陀如來の御出家の樣子を御說なさるゝに。何れの國の王とも。王の名を何と申したとも。國處の名さへ說き給はす。藪から棒のやうに。「時有國王」とはかり御說なされは。肝心主役者の因位の御出家を說き給ふには。何とやら麁相をしひではなひかと云ふに、去れは其法藏菩薩の御系圖をいはず。首から「時有國王」と御說なされたで。彌くありがたひ。實先年公義から諸大名へ。家々の系圖書を仰せ付けられたとき。各くゝ其家の系圖を書きて上られた、其にはいろくゝが有りて。源平藤橘。先祖は淸和天皇の末て。源氏と書たもあり、大織冠鎌足の胤で。藤原氏と書きたもあり、各くゝ系圖をかさりて書き出された、其中に西國のあるおは大名から。私先祖は江州上田村

○系圖を出さしめしこと

○公義　政府卽ち德川幕府のこと

ならん

の百姓にて御座候と書てだされたを。御役人中、大きに稱美であたと云ふことがある。『昔の劍今の菜刀。』先祖が歴々とても。末が衰へては益に立ぬ、然るに先祖は近江の國、上田村の百姓と書きて出されても。今日何十万石と云ふ國とり大名と成て。大勢の人を養るれは。そこが肝要のところぢや去れは大經に阿彌陀如來因位のむかし國王で御座なされたことを說き給ふに國も處も其御名も。入用なけれは說き給はす、肝心入用の處は。法藏菩薩の五刼永刼の御修行すむて。我等か往生を南無阿彌陀佛と定めて阿彌陀如來とならせられた處か。此大經の要。其肝要の處を說か爲めに。前をきの長物語を略なされて。『時有二國王一聞二佛說法一』と說かけ給ひた、『彌陀成佛のこのかたは。今に十刼をへたまへり。』衆生往生せすは我も正覺を取すと約束して。其正覺已に御成就なされ。現在西方の主となり給ひ。今この壇上に御姿を拜し奉れは。『衆生稱念必得二往生一。』さても難レ有やたふとやと。往生に疑ひはれて。御助の御恩を喜ぶばかりにてある、そこを今の偈

○安心決定鈔に曰く佛は正覺をなり給へるか未たなり給はさるかを分別すべし凡夫の往生を得へきか得へからさるを疑ふへからす

○寶章に曰く衆生往生せすは我れも正覺成らじと誓ひまし〳〵て云云

○因位時のこと

文に。『法藏菩薩因位時』と仰せられた、實因は果に對する辭で、たねと云ふこと。時と云ふは百姓のたね蒔時と同しことで。法藏菩薩我等衆生に信心の花を咲せ。無上佛果の證の米を得させたふ思召して。我等が煩惱妄執のけかれはてた心の中を苗代と定めさせられ。如來大悲の信心の因をまきつけて下された時ぢやと云ふこと、併し種を蒔たばかりでは益に立たぬ、旬を知りて苗をとり。田地へ植つけねはならぬ、夫れも植つけたばかりて草も取らず水も入れずに置ては。亦益に立たぬに由りて。長の夏中水を入れたり草を取りたり。大底骨を折らねは。秋に成りて米を取るやうにはならぬが。法藏比丘の其むかし。佗力信心の因を。衆生の胸の中へ蒔き付けては下されたれとも、つゐ夫なりに御すておきなされては。我等が無上涅槃の證の米を取り得るやうにはならぬに由て。兆載永刼の永々しひ間に。不生欲覺と煩惱惡業の草を刈り積功累德。菩根功德の水を入れ。難行苦行の御苦勞を極められたゆゑ。仕合せなは御座の我等。今は何の造作も入ら

○大經に曰く不レ生二欲覺瞋覺害

覺一不レ起二欲想瞋想害想一不レ著二色聲香味觸法一云云

○同經に曰く、無央數劫積レ功累レ德云云

○從因向果の事

○大經に曰く、唯然世尊、我發二無上正覺意一願佛爲レ我廣宣二經法一、我當下修行す、やす〳〵と淨土に生れて。此度無上涅槃の證の米を收めるやうにはなりた、爰を「法藏因彌々遠極樂果彌々深」と御意なされて。其本を尋ね其本を尋ね。何ほど僉議しても。御慈悲の初めは知れぬ、左右した古ひむかし〳〵からの廣大の御願ゆへに。迷ひの地の底に居る我等が。今は無上佛果の覺の天へ登るやうにはなりた、子が逸して心易ふ世をわたるは。先代に苦勞した親の蔭、今各々が苦勞入らす極樂參りの果報。ぬれ手で粟のつかみ取りをするは。法藏菩薩の其むかし。不可思議兆載永劫の長の間の御苦勞の御蔭が。今行者の身には顯はれた、實さて「入重玄門倒修凡事」と。久遠寶成の阿彌陀如來、假に法藏菩薩と名のらせられ。世自在王佛と云ふ御師匠の佛の所に於て。衆生濟度の大願を發し給ひ、唯願くは世尊廣く諸佛如來の淨土を建立し給ふ因緣を說き開かせ給へ、それを承りましてから迷の衆生を濟度仕る修行を致したふ存すると御願ひなされた、爾時世自在王佛の御意に。汝自ら當に知るべし御姿こそは法藏菩薩なれ。內證は久遠

攝取佛國淸淨莊嚴無量妙土、今下我於レ世速成二正覺一拔二諸生死勤苦之本一上

○規矩定木及び俗に云ふぶんまはし即ち曲れるを正し歪めるを直す手本のこと

○大經に曰く、譬如二大海一一人升量經二歷劫數一尙可窮レ底得二其妙寶一人有二至寶成の阿彌陀如來なれは。夫は强て御尋に及はす。御自分の力で。隨分しれることぢやと。御辭退なされた時、法藏菩薩の「斯義弘深 非二我境界一。」惡人凡夫をおりのまゝで助けまするほどの大願てと。私が境界では御座らぬ、自力には及ひませぬ。是非とも佛力を仰き奉りまするとと仰せられて。世自在王如來の佛力に縋せられたが。十方衆生、近くは御座の面々へ。佗力の規矩を顯はして。御見せなされたのぢや、是に於て世自在王如來。法藏比丘の爲めに、わざ〳〵御經を說かせられ。一つの喩をあらはして。法藏菩薩御本願の心を說きて御聽かせなされた、實譬へは人有て大海の水を汲はし。海底にある妙寶を取り得たひと思ひこむで。大願を發し。纔か一升斗を以て。大海の汐を汲あげ〳〵。竟にとう〳〵汲みはして。水底の寶を得るが如くぢや、汝の願が亦其如く。さて〳〵大願なのぞみ哉と仰せられた御言の下に、法藏比丘忽ち御決定なされて、さて〳〵嬉や。大海の水は夥しけれとも。其水には限りがあり。汲みはさふと思ふ心底には限りが

心一精進求道不レ止會當二尅果一何願不レ得

○衆生は無邊、無邊を限りありと云へるは喩は一分なるが故なり

○三昧　梵語此に調直定と譯す

なひ、十方衆生惡人凡夫は。所被さま〳〵多けれとも。其衆生には限りがあり、それを助けふと思ふ心には限りがなひ。我願ひ決定して滿足すへし

十方衆生の往生、我か掌の中に握りたぞと、いさみ〳〵で御喜ひなされた

此の御喩がありがたひは。大海の底の寶と云ふは外にはなひ。南無阿彌陀佛の名號のことぢや、法藏菩薩佛法。三昧海の海上に向かはせられ。雜行雜修のうは水を汲み干し。兆載永劫御苦勞なされ水底の妙寶とある、不思議の名號、南無阿彌陀佛の寶を取りあげて。十方衆生に御同向なされた、其證據驗が。今面々の身にあらはれて。彼尊に向ひ手を合せ。御恩たふとや南無阿彌陀佛と。御禮を言し上〳〵るやうには成りた、

○觀見諸佛以下の釋

○大經に曰く於レ是世自在王佛卽爲廣說二百一十億諸

「觀二見諸佛淨土因國土人天之善惡一」とは。法藏比丘世自在王如來へ向はせられ。我れ今十方の迷の衆生を助けて。大安樂を與へたふ存するに付て。先つ第一に十方衆生の置ところ。極樂世界を建立致したふ存ずる、願くは世尊我か爲に廣し諸佛の淨土を。我目の前に顯はして。おがませ給へと御

佛刹土天人之善惡國土之麤妙一應二其心願一悉現與レ之時彼比丘聞二佛所說嚴淨國土一皆悉觀見超二發無上殊勝之願一下

願ひなされた、於是乎世自在王如來、法藏比丘の願ひに應じて。二百一十億の諸佛如來の淨土を。鏡に向ふて見る如く。目の前へに現じ給ふ時、法藏比丘。十方諸佛の淨土を。一眸に觀わたし給ひて。選擇攝取なされ。「拾レ麁取レ妙」と。御氣に入ぬところを取りのけ。勝れたところばかりを規矩になされて。「超二諸佛刹一最爲レ勝」と。他方の淨土にこれすぐれて。比類なき極樂淨土を御建立遊ばされた。「諸佛各々飾二華藏一」とあれは。淨土を建立し給ふことは。諸佛如來いつれとも同しことなれとも、因位の願行いろ〳〵異があるに由て。其淨土へ參るにも。因がさま〳〵に分れた、維摩經の佛國品に。「直心卽是諸佛淨土。乃至直心衆生往二生其土一」と說かせられて。諸佛の中に此みはとけの淨土は。本御建立の因が。正直のまことを因とし。御建立なされたれは、其國へ參る衆生は。正直なものばかりが。修行して往生するとあるが。夫れでは我等は除ものぢや、何なれは已に「貪瞋邪僞好詐百端。」虛をつくがな詐を云ふがな。もゝすしり邪たことは蛇や

○貪瞋等散善義の語なり

○選擇集に曰く有下忍辱一爲二往生行一之上云云

○空也上人の因緣

○延喜帝醍醐天皇のことなり

蝎の如くぢやと比へ置せられた、其やうな根性では。今の淨土に顔出はならぬ。「又忍辱卽諸佛淨土。」人がどのやうな無理無體なことをいひかけ。卽命は泥鞋て頭の上を踏でも。夫れを忍へて何とも思はす。一念の瞋恚を發さぬやうな。忍辱の修行を本だてとして。感得し給ふ淨土へは。忍辱の衆生はかりが往生するとある、是か難事ものぢや、興昔し空也上人は延喜帝第二の王子にてましく〳〵たか。深く世間の無常を覺らせられ。遁世の御身となり給ひ。忍波羅密の修行をなされて御座りた、ある時五條の橋の上を通り給ふに惡もの共か寄て。此上人はどんなことでも腹たて給はぬとある、去らは試に腹たてさせて見よとて、なくりなさけもなふ。橋の上からつき墮したはとに、大きに御身に疵がつひて。赤の血汐に染み給ひたれとも。上人聊腹立て給はず左支右吾。よろぼひ出させられ。而も機嫌ようにこくとして。菴室へ御歸りなされた、弟子衆それを見て。是は何として御怪我をなされました。而も御機嫌よひ御顔色。かたくし心得させぬと。

○忍辱六度行の隨一なり

何れも驚き入られたれは、其時上人の去れは我最前五條の橋を過りたれは若もの共が寄て。思ひがけなふ橋の上から突をとした。不思議に卽死もせなんだが。其時かの無體をする者共を。さても好むて惡事をする根性不便なことやとは思ふたれとも、さらく〳〵其者を憎ひとは思はす少しも腹は立、なんだ、我今日始めて忍辱の修行成就したことを身に覺へた、夫故喜ふと應給ひたとある、今日の我等は吸てみることもなるまひ。今日は御命日ぢや。親の逮夜ぢや。腥ひもの敢ぬばかりが精進ではなひ、どのやうな事が有ふと。今日は一日腹を立てまひぞと。愼ひて見ても。其尾から何そ我胸に合ぬことを云ふて來か。氣に入らぬことを持ちかけると、まう御明日も親の逮夜も打ちわすれて。目に蔗をいれ。張臂して堪忍ならぬと。從來の短氣がをこりて來る、若しかた凡夫の性得ては。諸佛の淨土へ顔出しはならぬはどに。「一切佛土皆嚴淨。凡夫亂想恐難生。」何の淨土でも。惡人凡夫は及ひたへたことぢや、興法藏菩薩そこを哀み思召して。この惡人女人の

○彌陀建願

の趣意

○欲比等般舟讃の語也

○藪入の喩

○展轉云々

爲めばかりに。超世希有の本願をおこし給ひて。諸佛の淨土にこゑすぐれた。超勝獨妙の御國を御成就なし下された、愛を善導大師の。「欲レ比二十方諸佛國一。極樂安身實是精」と御意なされた、極樂淨土が諸佛の國より勝れたすぐれぬの沙汰は暫く置て、何より難レ有は極樂安身、彌陀の淨土へ參れは。我等か尻がすはる心が安堵く、道理こそ彌陀本國四十八願、御座の我佗が本の家、本の故郷と云ふは極樂淨土、「やぶいりや晝も火燒に枕哉。」主どり奉公してゐる身は。年中主人につかはれて、いつか一日逸することはならぬが、正月のやぶ入に。親の家へ環りた時ばかりは樂のきはまり、晝も火燒に枕をかたふけ足ふみのばし。臥なりとも起なりとも心まかせ。誰に氣がねも入らず、やれ〳〵親の家へ戻りたは逸なものぢやと云ふのこゝろ、併ら奉公してゐる身では。二三日の歸寧で。又追付主の家へ還ねばならぬと思へは。尻に鍬はさむだ樣で、どこやら安堵はならぬが。在座の我等、彌陀慈父の御手をはなれ。三界六道の迷の奉公、「展轉五道憂畏勤苦」

大經の文なり五道は六道の中修羅を人天に攝む

○加被力を添へて貰ふこと今は世自在王佛法藏比丘の爲めに諸佛淨土を現し給へること也

○觀見の御釋

さて〳〵久しふ給功をなしたが、此たびやう〳〵迷の稔があひて。六道輪回の奉公はもはや今生かぎり、何時でも往生を遂たらは、ありがたや父子相見へて常喜にあらず、阿彌陀如來と久々で父子の對面、其時こそやれやれうれしやと覺の脚を展して、ゆくすへ永ひ本の安堵をさせて下たさるゝその昔し法藏比丘、御師匠世自在王佛のみもとに詣て給ひ佛力の加被を仰ぎ、二百一十億の諸佛の淨土を御覽なされて。選擇攝取し給ひ、我等衆生の爲めに世に類なき超世希有の本願を御たて遊はされたを、祖師聖人經說を受けて。今の偈文を結はせられ、本願大悲のたふとひ御ことはりを我等に御示し下された文の中に觀見とあるは、眼見を觀と云ふて目で見ることと即ち二百一十億の諸佛の淨土を一眸に見わたし給ひたと云ふこと、見は惠見といふて心で見ること、心で見ると云ふは。法藏菩薩の證の御智惠を以て篤と御思按なされたと云ふことぢや、其御思按工夫は余のことではなひ亂想の凡夫と云ふて。我も他も。胸の中を尋て見れは安念妄執、如來の御

前に手を合せてゐる間たも難し有と思ふ心はおこらひて、兎や角と心は四方にちり亂れて須臾もおちつく暇はなひか、那如くの凡夫を對に心をみかひて參れ。功德を因にして往生をとけよと督ふてからが。所詮それは叶はぬことゝ思召しきはめられ、淨土參りの因は我方にこしらへて。惡人凡夫に手わたしゝて。十方衆生の大勢を。我願力の肩にかけて參らさふと。思ひ付せられた處を。「覩見諸佛淨土因」の一句て顯はされた、實且「國土人天之善惡」とは。かの諸佛の淨土を廣ふ見わたし給ふに、其佛國幷ひに其國の衆生の果報に優劣さま〳〵に分れた、夫は其筈ぢや。已に報土と云ふにも。自受用他受用の異があて。自受用はすぐれて他受用は劣る、又變化土は勝れ方便土は劣ると云ふの類ひぢや、「因千差果亦萬別」と。迦才の釋せられた如く。此方の修行の器量だけに諸佛の淨土は。果報がまち〳〵に別れてある、處て法藏菩薩本願を發し給ひ、我淨土を建立してあらは。一因一果、因も一つ果報も一つ、誰れが參りても彌陀同體無上涅槃の覺をは。

○國土人天之善惡の御釋

○迦才の釋とは淨土論の文なり

一味平等に得さそふぞと思召し。しつきの出來させられた處を。「國土人天之善惡」の一句に御しらせなされた、夫れで曇鸞大師は。「遠通四海內皆兄弟、同一念佛無二別道一故」と御意なされて。實喩へは兄弟處を阻てゝ兄は都に住てゐる、弟は田舍の片山家に居なりに成人て。一年中山かせぎをして、はそ〳〵に暮してゐる、此二人を一處によせた時、案內しらぬ者がかの都の兄を見ては是れは京都の歷々、あれは田舍の土百姓、遙か種姓もかはりてあるものゝ樣に思へとも、やつはり夫れか同胞兄弟、京と田舍と育の違ふたばかりで。親の血脉を分けた骨肉にかはりはなひ、今阿彌陀如來の信心の御血脉も其如く、京もあり田舍もあり、江戸もあり長崎もあり、唐もあり天竺もあり、處かはれは品かはると。起居動止言語、何から角から皆かはりてあれとも、心の中の御助一定、御恩たふとや南無阿彌陀佛の領解一つは、みな彼尊から下された信心一味の御血脈、去るはとに四海の內みな兄弟てあるぞと御勸化なされた、爰を御和讃には。「安樂佛國に

○遠通等論註に出ず

○兄弟の喩

○歎異鈔に

曰く彌陀の本願には老少善惡のひとを選ばれず、たゞ信心を要すとしるべし

○建立無上等二句の釋

○建立と云ふこと

いたるには、無上寶珠の名號と、眞實信心ひとつにて、無別道故とときたまふ」と御意なされて、極樂參りの因は。他力御回向の南無阿彌陀佛、出家在家も男子女人も。南無阿彌陀佛の一つ因で。得させ下さるゝ淨土の果報なれは、好惡の差別、尊ひ卑ひの異があるとは思ふな、みな一味の大安樂、無上涅槃の覺の身とはなし下さるゝ、「建立無上殊勝願」、「超發希有大弘誓」とは。這二句は正しく法藏菩薩、我等が爲めに他力の本願を御たてなされたと云ふこと、夫れを建立と仰せられたは。世間で一ことはり在家の家庫などを立るを建立とはいはぬ、佛閣道場、堂塔伽藍を立つるには必す建立と云ふ、どうしたことなれは。先つ堂塔をたてるは。「令法久住」の爲めと云て。大切な佛の法を普く衆生に及し。其佛法をいつまても久しふ。此世に留ふ爲めぢや、夫れゆへ佛弟子は金銀を貯へることはならぬものなれとも、佛閣を營み堂塔を建立する爲めには。金銀を貯へること。佛も御ゆるしなされた、すれは佛閣を建立する身分は。心得が大事ぢや、隨

○彌陀建願の御思召

○第十七諸佛咨嗟之願と云ひ諸佛稱名之願諸佛稱揚之願、往相廻向之願と云ふ

○第十八願

分丹心を抽で。伏てあるものをゑいやつと引き起すやうに佛法を取立て正法を彌勒三會の曉までも及はさんと。大きな願を立てねはならぬことぢや夫ゆへ堂塔の普請を營ひは。全く佛法を取り立るのぢやと云ふこゝろで建立と云ふ、眞今法藏菩薩の御本願が。つゐ苟且の事ではなひ、恢廓廣大の極樂を建立し。十方衆生迷の凡夫を一人ものこさず迎へ取ふと。御志のまことを立られて此本願を起し給ふ。輕ひことではなひ。廣大深重のをもくしひ御本願と御しらせなされふ爲めに。建立の二字を置せられた。「無上殊勝願」とは。大經に「超發無上殊勝之願」と御說なされて。言は廣ふ四十八願にかゝれとも。別して第十七の本願のことになる、次の「超發希有大弘誓」とあるは。是は第十八願。十七と十八とは。信行の二つで。第十七願は南無阿彌陀佛の名號の行を誓はせられ、第十八願は至心信樂の信心を御ちかひなされた、此信と行との二つは。鳥の兩の翅の如く。鳥の翅が二つそろはねは空は飛べぬ、末代の惡人凡夫の身が。此たひ三界六道の

念佛往生之願、選擇本願、本願三心之願、至心信樂之願、往相信心之願と名く

○法華經持者の譚、元政の法華傳に出づ

○無上殊勝

迷を離れ、眞實報土の大虛へ羽をのさふと思へは。信行の兩の翅かなければ成ぬ。實昔し一人の出家があつて、つね〳〵法華經を讀誦せられたが、ある夜の夢に。我兩の脇から。俄かに羽がはえて。段々其羽がひろがり。右手左手おはかた一里四方はどにひろがりた、是れは奇怪なことぢやと思ふて、よく〳〵見れは。其羽に細な文字か一面に書てある、氣をとめて見れはこと〴〵く法華經の文字ぢや、是は不思議と思ふたが立處に夢がさめた、夢さめて後思はるゝは、さてもたふとひ夢を見たことかな。吾れ平生法華經を讀誦するゆへ。其功德が右左の翅となり、此たひ生死の海原を飛こへて覺の渚に到ると云ふの瑞夢でこそはあれと。夢判しをして、ます〳〵堅固に勤められたと云ふことがある、此僧は法華持經の人で有たゆへ。法華經が兩の翅となりて。覺のおは空へ昇られ、御座の我等は。如來御同向の他力の信行を。右左の翅となし下さるゝゆへ此たび生死の海上を越へて無上涅槃のさとりに到る身のうへとは成りにた、實「無上殊勝願」とは。無上

願と云ふこと

○度斷知證衆生無邊誓願度、煩惱無盡誓願斷、法門無盡誓願知、佛道無上誓願證

○隨其云云淨妙經の文なり

○不曰堅乎　論語の言葉なり

○超發希有

はこのうへなしと云ふこと、殊勝とはことにすぐるゝと訓で。凡そ度斷知證の四弘誓願は。一切諸佛の因位のなりたちから。通して發し給ふ御誓願これに由て平等の御慈悲を具させられ。十方法界の迷の衆生をあはれみ給ふは同しことなれとも。諸佛の御誓願は。惡人を救にて善人に仕立てから其うへて御濟度なされふとある御願ひ「植てみよ花のそだゝぬ里もなし。心からこそ身はいやしけれ。」曇た鏡もひたもの磨はあきらかになる。貪欲不淨の濁りた心も。修行すれは曇がはれる。「隨其心淨即佛土淨。」心さへ淸かにならは。我國へ迎へ取るぞと。御待受にはあづかれとも。「不曰堅乎磨而不磷」何ぱう打ても擊ても。我等が根性は淸淨にもならす。眞實にもならぬ。底下白地のあら凡夫そこを阿彌陀如來の哀ませられ。諸佛の御誓願とは流義をかへられ。此惡人を惡人ながら助けふとあるの御本願を建させられた。諸佛の本願まう此上はなひはどに。無上殊勝の願と云ふ。「超ニ發希有大弘誓ニ」とは。超はこへると云ふこと。諸佛の本願に飛ひこへ

と云ふ事

○大經に曰く無量億劫難レ値難レ見、猶靈瑞華時々乃出一

○難有と云ふ事

させられ。世間出世の因果の道理をのりこして。御建てなされた第十八願希有と云ふは。異譯の御經に『於二世間一希有』と御說きなされて。彌陀の本願は。外に例なし希な御願ひぢやと云ふこと。夫れゆへ大經には此本願を御說きなさるゝ釋尊。其日の御姿を御說きなされて。此世で希なものは優曇華。今日說き給ふ彌陀の本願も亦此の如く。無量億劫にも値がたく見がたしと御說きなされた。大論に『希有難有』とあて。希れ大切なことは希有。若るためしは外にはなひぞと云ふことで。希有難有とあるが。難有とは、ありがたひと云ふこと。去るほどに何のわきまへなひ者も。御慈悲の御恩を思ひつゞけては。難レ有恭ひと云ふくどきごとが口さきに出る。『世間の上でありがたひと云ふ語つかひは上々方より憑にあづかりた時つかふ言。一とはりでは恭なひと云ふが。どちらも心は同しことぢや。かたじけなひと云ふ字の音が恭。『々辱也』と訓じて。はづかしめると云ふこと。此間は御出にあづかりて辱ひ。何を下されて辱ひと云ふ。それに耻辱の辱

○五逆殺父害母、破和合僧、出佛身血、殺阿羅漢、破羯摩僧

○十惡殺生、偷盜、邪淫、兩舌、惡口、妄語、綺語、貪欲、瞋恚、邪見

の字を書て。はづかしめると云ふはどうなれは。先樣は御歷々。それに私風情を對になされて。御出にあつかり。亦は物をもらひするは。彼方の御身分を汗しますと云もの。私しゆへに辱めまするとは申すものぢやと云ふほどの意ぢや。今恭くも阿彌陀如來は眞實報土の御主。詎有ふぞ三世十方の諸佛如來の本師法王。もし彼尊の對になされふならば。歡喜地已上の歷々の大菩薩等。なか〳〵此やうな五逆十惡具諸不善の凡夫女人を。後目にも御かけ成れふものではなひに思ひもよらす。十方衆生の其中に。先つ一番に惡人女人と呼出して。極樂參りの正客と御あしらひ下され。『常來至此行人之處』と。三枚敷の蓬戸の小屋でも御いとひなく。南無阿彌陀佛の聲を尋ねて影向まし〳〵。我等が影身傍せられて。不斷守り下さるゝ。廣大な御恩德。我等ゆへ勿體なひ御位を汗しました御外聞わるひほど。彼尊に御辱を與へました。此御恩德は實に身を粉にしても報すべし。ありがたひとも恭なひとも云ふにいはれぬ御慈悲の御本願にて在ぞと云ことで。『希有

大弘誓」と御示なされた。

五刼思惟之攝受

斯御文は。大經に「具二足五刼一思惟攝取」とある。經說に依らせられて。阿彌陀如來法藏菩薩のむかし。他力の御本願を御立なされ。凡夫の計ひ入らす。如來の御力ばかりで。我等を佛になし下さるゝ。其大願をくり返しくり返し御工夫なされた其間に。假初なから五刼の永ひ年月を送らせられた御苦勞のほどを此の一句に顯はされた。「五刼と云ふは蓮如上人の御指南に依れは。大小刼の中では。小刼の方を御取りなされて。喩へは四十里四方の四角四面な石。それを一の天人が有て。三年に一度つゝ來りて。天の羽衣の袖を以て。かの石を撫る。其年數がつもりくして。とはくし石を撫つくしたを。一刼と云ふとある。然るに今は夫を一刼ならず二刼ならず。五刼が間かゝらせられた。喩へは三年五年と云ふにも。出入三年腰かけ五年が有りて。首尾が半年づゝかゝりても。三年五年とはいへとも。夫れは

○五刼の釋
○蓮如上人云云正信偈大意に出づ

丸に三年五年ではなひ。元朝から歲除まで。それを五つ累ねは丸五年とはいはぬが。今五刼とあるは。首尾はつまらねども。出入五刼腰かけ五刼と云ふではなひ。丸に五刼かゝらせられての御思按工夫で有たに由て。具足五刼と說せられた。「大器晚成」と云ふて大工が家を建つるにわづかな結構なれは。手間隙入らす成就すれとも。大な堂塔伽藍などを建立するには一年や半年では仕あげられぬ。聖人善人を助けふと思召す御願ひならは。若はど永ひ御思惟には及はねとも。必墮無間。打つても擊ても。生死の迷を離るゝことのならぬ我等を。此の度六道輪回に永の暇乞をさせ。「閉二塞諸惡道一、惡趣自然閉。」三界廿五有の迷ひの戸口には鎖をおろして下され。「通達善趣門」と。極樂參りの一方口。自力の目を閉て。往生の一途を彼尊に任せ。昨日も今日も南無阿彌陀佛と。御報謝の足を運はかり。息のきれた處で。證の目を開ひて見たれは。百寶莊嚴微妙不思議の。ひかり耀く具實報土。阿彌陀如來の御前て。彌陀同體の覺の身となし下さるゝ大事を御

○建築の喩

○閉塞云云大經の文なり

成就なさるゝ御思按ゆへ。五刼の居諸を送らせられた。眞如堂の如來の御歌に。「時すきて益なき法をすてよかし。五刼思惟は誰が爲にそも。」「如下人數二他寶一自無半錢分上」今日を暮しかねるやうな貧乏人が。近處の分限者の貨を算へ。那家の財産幾箇と知ても。知たばかりで。壹錢も其身の德にはならぬ如く。我等如き曾無一善の貪乏人が。諸宗のつとめ方を見て。心にいかばかり羨ふ思ふても。夫は隣の寶をかぞふる風情。一つも我身に益はなひほどに。雜行自力を離れよ。五刼思惟の御苦勞は。此あさましひ凡夫の爲めぢやぞ。往生の一段に思按も入らぬ工夫も入らぬ。入るほどの思按工夫は。五刼かゝりて我等が爲に御思按なされて下されたれは。今は但御苦勞の御慈悲を思ひつゞけて。さてもたふとや南無阿彌陀佛と。御助けの御恩を喜ぶばかりにてある眞思惟とは。凡そ思惟、觀察の二つは。佛道修行第一に入用なことで。先つ思惟工夫を凝し。其うへ三昧現前して。佛法の道理をさとることぢや。世間の上でも。このこと大事ぢやと思へは

○隣家の寶を數ふる喩

○思惟の釋

凡夫ながらも智惠甕の底をたゝひて。兎や角と思按工夫をめぐらすことぢやが。今目を閉て。ゆくすへの後生はど身に取ての大事はなひ。然るに其一大事のことは。棚へ揚て置て。箇とも思はす。假の世の夢幻。取るに足らぬ戯れことを。是こそ大事と性根に入れて。眉をひそめ頻をあつめ。「愛毒恐々無レ有二解時一」と。氣を痛め心を苦しめるが。在座の面々、我他が一生涯の分野。法藏菩薩若る愚な我等凡夫を哀ませられ。衆生の方に工夫せねはならぬ後世の一大事。未來地獄をのがれて極樂參りする大願ことを。我等に代りて永の年月を送らせられ。五刼が間御思按工夫なし下された。「夏の夜は寐ぬにあけぬといひおきし。人はものをや思はざりけり。」去りとは夜がみぢかふて朝ねぶたひと。夏の夜をかこつ人は。心に何も物をもひがなひから。何ぞや物をもひのある身は。宵から且まで。まんじりともせぬに由て短ひ夜も長ふ覺ゆる。わづか一夜か二夜ねられぬでさへ苦しひものぢやに。法藏菩薩の我等を不便と思召し下されての。御思按工夫の御も

○憂毒云云大經の語

○古歌

○歎異鈔に曰く彌陀の五劫思惟の願をよく〳〵案すれば、ひとへに親鸞一人がためなりけり

○決謀云云 前漢書に出づるの語

○楠公の兵略

の思ひが。苟且ながら五劫思惟。其御苦勞のほどを思ひしれ。爰を御開山は「五劫の思惟永劫の修行も。たゞ親鸞一人がためなり」と御よろこび成れた。如來の御慈悲御恩德を聞ても。馬の耳に風と。つい余所ごとに聞なす身では何とも思ふまひが。宿善あて不思議に信をゐ。往生一定の領解になりた身の上には。五劫の御思惟も永劫の御苦勞も。人の爲めではなひ。私一人が爲めにてありしものをと。身に引き受けて廣大の御恩を喜はねはならぬ時にこの帷の字「謀也」と訓じてはかりことゝ讀す。軍謀密策と云ふて師などに第一入用なことぢや。「決ニ謀于帷幄之中ニ顯ニ勝于千里之外ニ」とは。漢の高祖張良が智謀の優れたことを稱られた辭ぢや。翼此邦でも楠公がわづか手勢五千人で。千早が城にたてごもり。鎌倉の八十萬騎のおびたゝしひ敵を對にして。一つもよはみを見せなんだと云ふは名將のはかりこと。今も亦其如く。法藏菩薩十方法界の衆生御あいてに。八萬四千の煩惱の大敵を引き受けさせられ。是れが爲めに五劫思惟のはかりことをめ

○攝受の釋

○捨不云云 選擇集の語なり

○禮讚に曰く 觀ニ彼彌陀極樂界一、廣大寬平衆寶因、四十八願莊嚴起

くらし給ひてあれは。奇哉近く在座の面々ごとき强剛難化のわるもの共がいつの間にやら自力疑心の弓の弦をはづし。邪見の胃をぬいで。御助け候ふへと彼尊へ降參するやうになりたは。五劫思惟の謀をめくらされたる故にてある攝受とは。「捨ニ不淸淨行一、取ニ淸淨行一」と。諸善萬行の中より南無阿彌陀佛の一行をゑらひ取らせられたと云ふこと。凡そ法藏因位の御修行に由て。果位の萬德を莊り給ふも。約めてみれは六字の號。これを開けは廣大寬平の極樂世界。宮殿樓閣無盡の莊嚴。七寶珠林の蕚一つ。八功德池の水一滴まで。皆南無阿彌陀佛の六字の號より莊りあらはし給ふ。淨土の莊嚴ばかりではなひ。彼尊の御さとりも南無阿彌陀佛。參る我等が往生の正業。佛になる因も南無阿彌陀佛。しらぐ〵ししらけたる夜の月影に雪ふみわけて梅の花をるとと云ふたは。皆白いものぞろへ。我等が此度の淨土參りも。余のことまぜすたつた一つの南無阿彌陀佛。道理てそあれ本極樂は南無阿彌陀佛より莊りあらはし給ふ。其淨土へ參るには。雜行難修自

力心のまぜことをすてゝ。身も南無阿彌陀佛、心も南無阿彌陀佛にならねばならぬほどに。皆決定して南無阿彌陀佛の覺悟になれよとて。法藏因位の昔。彼尊の御身に引き受けられて。末世の我等へ。雜行すてゝ彌陀を頼む。一心專念の御手並を顯はされた。そこを『五刼思惟之攝受』と御勸化なされた。

○重誓の釋

重誓名聲聞十方

這一句は法藏比丘四十八願を立させられ。猶重ねて御念を入られ。再たび御誓ひを立られて。我等が往生の御約束を固め給ひた。『千金重然諾』と、もろこしの季布と云ふ男は。一言人に約束したことは。どのやうな事が有りても。其約束を違へなんだゆへ。世間から評判して。季夫が一言は千金の財よりも頼母しひと云ふた。尋常の人間でさへ。性根のきつひ者は云ふたことを違へぬ。まして今は三世十方の本師法王とならせらるゝ法藏菩薩。我等が往生の一段を。一たび御約束下されたからは。夫れで願てあ

○季布の信義

ることを。猶釘の裏を反し。初めの御約束をちがへ給はぬ堅ひ處を。操かへし三度まで御念を入れられての御誓ひ。其第三に『我至成佛道名聲超十方究竟靡所聞誓不成正覺』と我れ南無阿彌陀佛の覺を開てあらは其名を十方世界にひろめふぞ。若し滯りがあるならば。我は佛に成らぬぞとの御誓ひぢや。そこを『重誓名聲聞十方』と。今の偈頌に御むすびなされた。『名聲』と云ふは聲はこゑと云ふ字なれども。『聲亦名也』と云ふて。やはり御名のことぢや。法藏菩薩五刼思惟の御工夫から。此の稱ゑやすく持ちやすひ六字の嘉號を案じ出し給ひて御本願となされた。そこを御文に『それ五刼思惟の本願と云ふも。兆載永刼の修行と云ふも。たゞ我等一切衆生を。あなかちに助け給はんかための方便に。阿彌陀如來御身勞あて。南無阿彌陀佛と云ふ本願をたてまし〳〵て』と御勸化なされた。法照禪師は。『彌陀尊號甚分明。十方法界普流行』と示し給ひて。諸佛如來に各々名號はましませども。其中で阿彌陀如來の號ばかりは分明と水際が

○名聲の釋

○御文章五帖第八通なり

○法照禪師後善道と云はれし支那

の大德なり

○先德 考 未

○不可稱云云 正像末和讃なり

立て。御德が勝れてまします。道理こそあれ諸佛の號は一とはり佛の御德を顯はされて名のり給ふばかり。阿彌陀如來の六字の號は。此名號たゞ一つで。十方法界の衆生を。一も殘さず助け盡くさんと。勇猛の果敢ひ御願ひを發させられ。此名號御成就の爲に。わざ〳〵第十七の願を御立なされ其願已に御成就あて。十劫正覺の曉。始めて南無阿彌陀佛と御名のりなされた。夫ゆへ先德は所謂「我彌陀以レ名攝レ物」と示されて凡そ。衆生を濟度なさるゝは。何の佛も同しことゝ申しながら。「各別發願各化二衆生一。攝化隨緣不思議」なりと。種々の方便、種々の善巧ありて。手をかへ品をかへて。それ〳〵に有緣の衆生を導き給ふことなるか。此の阿彌陀如來に限りては。十方衆生を御助けなさるゝ御手だてが南無阿彌陀佛。この御名で我等を助け給ふはどに。「耳聞口誦 無邊聖德攬二入識心一。」よく〳〵耳かたふけて此の號を聽聞すれは難レ有や。「不可稱不可說不可思議の。功德は行者の身にみてり。」阿彌陀如來の色身正報法界身の御姿が。やがて行者の身

の內、心の底に入りみち給ふはどに。昔しは貧無一善の貧乏人が。今は身も南無阿彌陀佛、心も南無阿彌陀佛の長者となり。身にも心にも彼尊の功德が入りみちて下されたに由て。斯る取りなのなひ我等が。此身この儘なから。此度往生の本意を遂る。

○名卽法々異名のこと

鸞曇鸞大師の論註に。「名卽レ法々異レ名」との二つの謂を御ことはりなされた。「名異レ法」とは。莊子に「名實之賓」と云ふて。人の名でも子供の時は六三郎七之助。それが元服すると六兵衛七兵衛になる。さて追付法體した處で。入西の西入のと云ふ法名をつく。此樣に時々で名がかはる。何なれは本名は假ものでなひからぢや。人の名には局らぬ。鳥獸草木何によらす。名は後からのかりもの。去るはどに火と云て熱ふもなし。水と云ふて咽の渴も止ぬ。是等は「名異レ法」と云ふもので體と名とが分々ぢや。又「名卽レ法」とはたゞ〳〵には名と法と一體な物がある。

○曹操か古事

「寬むかし魏の曹操が軍に敗北して逃らるゝ時。時會五月のころ。山中で大勢の軍兵共、喉をかはかし。水を飲たがれとも。

○木瓜の喩

論註に曰く苦二轉筋一者以二木瓜一對レ火慰レ之則愈、復有レ人呼二木瓜名一亦愈、吾身得二其効一也

折節水がなふて。何れも難儀に及ぶ體を見て。曹操士卒に下知して申さるゝは。此の山を踰てあちらには梅林がある。其梅が存の外、酸梅ぢやほどに。追付其梅を取て。喉の渴を止よといはれたれは。士卒梅と云ふ名を聞くと齒がういて酸なり。忽ち口中が潤ふて。渴をしのひだと云ふことがある。是等は梅と云ふ名に自然と體の德が具はりてある。これが「名即レ法」と云ふもの。實是れに限らす論註に例を引かせられて。轉筋のした時。木瓜で撫れは忽ち愈る。若し木瓜のなひ時は。其痛ところを木瓜々々と云ふて摩れは。夫でも治るとある。又尨に嚙れたものが虎の骨で疵口をなでると立處に治る、虎の骨のなひ時は。虎來々々、虎か來、虎がくると云ふことを唱へて摩れは。其疵がなをるとある。「我身に其効をわたり」と靈鷲大師の仰せられて。木瓜の名の中に轉筋をなをす德を具へ、虎と云ふ言の中に犬に嚙れた疵をいやす德を具へた。是れ等は名と體とが一つぢや。夫ゆへ是を「名即レ法」と云ふたものぢやが。虎が我名て犬にかまれた疵を

愈さふと云ふ願も發すまひし。固より情なひ木瓜の名に。轉筋をなをす暫もあるまひけれとも。夫にさへ自然と名に體の德を具へた例もある、何に況んや今は阿彌陀如來。久遠無量不可思議無央數劫の在昔、彼尊の號で我等を御助けなされふと御約束なされ。報身如來の萬德が六字の内にみちゝ給ふはとに忝なや。南無阿彌陀佛と稱ふれは。相好圓滿の阿彌陀如來は直に行者の目の前に現はれ下さるゝ。そこを善導大師は「化佛菩薩尋レ聲至」と仰せられて。御經よむて居る處を尋ねもなされず。陀羅尼をくりて居る處へ來らせらるゝてもなし。其外種々の功德何なる勤めことをしても其人の許に顯はれ給ふではなひが。但雜行すてゝ一心一向。南無阿彌陀佛の聲する處へは。いつでも阿彌陀如來は御影向なさるゝ。當麻の謠に「よべばこそ來たるなり」とあるは。昔し中將姫、繼母の讒言に由て。雲雀山の奥へ棄られ給ひた、いたはしや雲の上にそだちし姫君の。わびしき柴の編戸の内にたゞ一人。ものさひしふ明し暮らされたが。本より有難ひ信者

○化佛等禮讃の文なり

○當麻中將姫の因緣

なれは。是を憂ことなとも思ひ給はす。何事も婆婆の習。いそぎ參りたさは極樂世界、頼に思ふは阿彌陀如來ばかりなりと。明けても暮れても南無阿彌陀佛〳〵と。稱名の聲は斷なんだ。然るに何國ともなく年紀六十餘と見ゆる。左も氣貴ひ一の尼公がっ毎日〳〵來られて。有難い後世の物語をして。中將姫の寂寞を慰めらるゝ。中將姫ある時尼公に尋ねらるゝやうは。そも御前はいかなる御方何國にか棲給ふぞ。何として此處を御存じ有て。毎日〳〵御出下さるゝことなと申されたれは。其時尼公の呼はこそ來れと應られた。中將姫取りあへす「遐邇のたつ木もしらぬ山中に。我は誰をか呼子鳥。」固より御名も存せねは。喚ませふ道理もなし、たゝ聲するものとては。南無阿彌陀佛の稱名はかり。それに呼との給ふは何にと申されれは。夫こそ我が名なれと。不思議や六十有餘の尼公と見ゐしは忽ち相好圓滿の阿彌陀如來の御姿とあらはれ給ひ。二城が嶽の嶺を遥に越させられ。光明ともろともに。四の雲間に入せられたとある。是を以て聽聞有ふ。南無

○二城が嶽當麻の西方にある山な

阿彌陀佛〳〵と。唯稱ふるとは云へとも如來は御耳をかたふけ給ひ。一聲々々に領焉せられ。號を稱ふる行者のもとへ直に御影向あそはされ我と惡業に牽れて。三惡道へ逃け走るものを。攝取の御手に引たてさせられ。我等が手を取て。此たひ極樂世界へつれて御歸りなさるゝか南無阿彌陀佛の號の德。其御利益を御成就の爲に。宿て名聲聞十方。我名の聞へぬ處がありは我正覺を取しと。かへす〳〵御念を入れられて御誓ひなされた、

普放無量無邊光。　無碍無對光炎王。
清淨歡喜智惠光。　不斷難思無稱光。
超日月光照塵刹。　一切群生蒙光照。

此六句の偈文は。上の南無不可思議光とある阿彌陀如來の光明の御利益を御經の意に出て十二光と開ひて御示なされた、時に阿彌陀如來の十二の光明といへは。御身の御光りか其數十二に限るやうなれとも。左右てはなひ已に觀經に八萬四千の光明と御說きなされた、是れも一切衆生の身に。各

○御經大經に曰く是故無量壽佛號無量光佛、無邊光

佛、無碍光佛、無對光佛、炎王光佛、清淨光佛、歡喜光佛、智惠光佛、不斷光佛、難思光佛、無稱光佛、超日月光佛、

○觀經、眞身觀復有八萬四千光等の文なり

○普放の釋

○夜中探物の喩

々八萬四千の煩惱がみち〳〵てあるを。此光明を以て。一つも殘さず對治なさるゝと云ふを知らせて。八萬四千と御說きなされた。其實は千の萬と云ふ數量のある光明ではなひに由て。阿彌陀經には。「彼佛光明無量照ニ十方國ニ」と御說きなされた。眞時に今普放とあるは。「普徧也。」十方世界をまんべに御照しなされて。御光りのゆきとゞかぬ處はなひと云ふことちや。便ち觀經に「光明遍照十方世界」と御演說ありて。阿彌陀如來の御身より放ち給ふ光明。遍く十方世界を照し給ひて。但念佛の衆生はかりを攝めと り給ふとある。眞喩へは夜分庫の內へ。何そ入用な物を取りにゆくには必ず燭を持て行ねはならぬ。燭の德て庫の中の道具殘らず見ゆれとも。その物は入用でなひ。唯目ざす處一色の物件を取てかへる如く。十方衆生とは喩へは庫の內の如く。光明の燭を以て。無明の黑闇を照し給ふゆへ。十方衆生の庫のすみ〳〵まで。光明のあかりは屆給へとも。其中で阿彌陀如來の。是をと目ざして攝め取り給ひ。極樂淨土へつれて還らせらるゝは。但

○十二光の釋

念佛の衆生ばかりにてある眞さて此の無量光無邊光等の十二の御名。これは阿彌陀如來の圓滿の果德を顯はされ。殊に光明無量の御願に酬へ給ひて不可思議の光明を御成就ありしことを御しらせなされた。是も楞嚴經の。勢至念佛圓通章に御說なされた說は。一光々々が一佛々々と現れさせられて。十二の如來相つき。十二刧を經て。衆生を利益遊ばされたとある。今は大經の上卷に。阿彌陀如來一佛の上に。十二光の御德を具へ給ふことを顯はされた。先つ一番に無量光とは。對は無量無邊の衆生なれとも。阿彌陀如來それ〳〵の衆生を一つも殘し給はず。光明を以て恤み育させられ。終には淨土へ迎へ取せらるゝと云ふ方から。如來の光明を無量光と名け奉る。諸佛の光明は照し給ふ境界に限りがあれとも。阿彌陀如來の光明は。周遍十方無量無邊不可思議無等界どこからどこ迄も。平等に御照しなさるゝ。其方からは無邊光と云ふ。外には山林河海煙霞雲霧の碍なく。內には貪瞋煩惱の心の底まて照し給ふに芥子はかりも障りをなすものゝなひ方か

○無量光

○無邊光

○無對光
○炎王光
○清淨光
○歡喜光
○智慧光

らは。無碍光と名つけ。諸佛も各々光明を具へ給へとも。彌陀の光明に肩を比ふる者のなひ方からは。無對光と名つけ奉る、偷兒の取りのこしは有れとも。火の燒さのこしはなひと云ふ。火ほど勢のつよひものはなひが。我等が身に具へた三毒三障無量の重罪。おそろしひ罪障も。大悲の光明で御てらし成るれは。火の物をやき盡すが如く。罪も報もみな燒さうしなふて下さるゝと云ふ方からは。炎王光と名付たてまつる。我等が貪欲不淨の煩惱の泥に汗れた心の底に。濁りにそまぬ蓮葉の如く。御助一定あらたふとやと。胸の中に他力信心の蓮華を開かせ下さるゝ方からは清淨光と名付け。瞋恚のほむら胸を焦して。あら腹だちやと思ふ中からも。さて〳〵淺猿やと。御慈悲に立ちかへりて。御恩を喜はせて下さるゝ方からは歡喜光と名づけ愚痴無明の黑闇に迷ふて。後世も菩提もわきまへしらなんだ者が今は御勸化が耳に屆て。往生一定と。未來の一大事を安堵し。何時でも御緣次第。參らせて下さるゝことの難有やと。後の世を見ひらく智惠をゐさ

○不斷光
○難思光
○無稱光
○超日月光
○照塵刹の

せて下さるゝは。即ち智惠光の御利益。一念歸命の當體に。攝取の御光りにおさめ取らせられ。晝夜不斷。御てらしにあづかるゆへ。易やすひ凡夫の心に。往生治定の領解ばかりは相かはらず。此の一念が臨終の時まで。うれしや。ありかたやと。信心の色のさめぬは。不斷光の御利益。さて此の光明の御めぐみに由て若る罪業重き惡人女人が。此度佛になる。其不思議さは心も言も及はぬ。心の及はぬ方から難思光と名け。言にのべられぬ方から。無稱光と申し奉つる。日輪は晝を照せとも夜を照さず。月は夜は照せとも晝を照さぬと云ふ。互に缺目があるか。彌陀の光明は晝夜の隔なく。殊に月日の光とは違ふて我等か心法胸の中の無明煩惱の闇を破して下さるゝ。此の如く日月の德に百千萬倍すくれ給ふゆへ。超日月光とは名けたてまつる。斯る不可思議の光明を以て。多生曠劫永々の間。我等を恤み下されたゆへ。强剛難化のいたづら者か今は御助け候へと掌を合せて御慈悲にすかるやうには成りた照塵刹と云ふは。塵刹は微塵刹土と云ふこと

○神書道の書物、古事記、日本紀等なり

微塵は細少なと云ふ比況てはなひ。數かきりもなひ夥しひことのたとへ。刹は刹摩。此に土田と云ふて國々のこと。其微塵刹のかすかきりも知れぬ夥しひ世界國土を。御照しなさるゝに由て「一切群生蒙二光照一」といきとし生るもの。其御光の御恩を蒙りついには宿善純熟して。信心を獲得し往生の本意を遂るやうになる。神書の說に依れは今日の日輪は。直に天照太神宮總身より光明を放ちて。世界國土を照し給ふとある。夫れゆへ天照太神と書きて。あまてらす神とよます。然に神代の時。天照太神大弟の素盞雄尊と御國あらそひのことが有て。天照太神事むつかしく思召され。岩戸の中へとぢ籠らせられたれは。日本國中が眞くらやみになりた。其時神々これを歎き給ひ。一千の神達。大和の國。香來山に庭燎をたき。石凝女命の鑄給ふ一面の鏡を。神木の枝につけて。音を引き柏子を調へ。神樂を奏し給へは。天照太神これに愛させ給ひあら面白やとて。天の巖戸をはそめに開かせ給ひ。御顏をさし出し給へは。忽ち日本國黑闇の夜かあけて神々

○面白と云ふ起因

○無明云云諸經讃の文なり

の喜びかぎりなく。今に至て士農工商の四民拳公つとめも出來れは耕作もする。商もする何ともみな天照太神。毎日〳〵世界を照し下さるゝ御蔭ぢやと神道の說ぢやが。佛法から視は。月日の本は觀音勢至。天照太神は直に阿彌陀如來の御垂迹。天の岩戸を開て。國土の闇を照し給ふくらゐは磯なこと「無明の大夜をあはれみて。法身の光輪きはもなく。無碍光佛としめしてゞ。安養界に影現する。」在座の面々は本。無明大夜の常闇に迷ふて。從冥入冥くらきより冥にうつりて多百千刼佛法の日の目をかがまぬ我他が爲めに。十刼正覺の曉に。南無阿彌陀佛の日輪。十方法界に耀かせられたれは。此時我等が迷の闇は一同にはれたれとも。朝寐して夜があけても起るすべを知らす。午時まても寐てゐるものは。日輪に照されながら。其ものゝ爲めには子丑も同前。あまりの朝寐。他にゆすりをこされて目を開て見れはもう追付正午これはと云ふて目をさます如く。彼尊の方には證の白晝なれとも。我等は無明の闇の夜に。煩惱の夢を見てゐる處を。聖人

○朝寐の喩

善知識の御勸化にゆすりをこされ。始めて御助け候へと目をあひたれば。一念の處に往生治定の畫のたゝなか。讎もうれしや難レ有やと。信心の性根が付て。極樂參りを安堵する身になりたは。偏へに光明の御利益にてある

○若行等御本書信卷の文

本願名號正定業。　至心信樂願爲レ因。

斯の二句は第十七願の行。第十八願の信。この信行を他力から御同向なし下され此度我等に眞實報土の往生を遂させ下さるゝ。佛智不思議のたふとひ謂を御示なされたる。祇今の御ことばにてある。「若行若信。無レ有二一事非一。阿彌陀如來清淨願心之所二同向成就一。非二無因而他因有一也」とゝ。御開山ねんごろに御釋なされて種なひ品玉は取れぬと。商すれは財産がなければならず。百姓すれは田地をもたねはならぬ。況んや世々生々の迷を離れて。界外無漏の報土に往生をとげ。剎へ凡夫の身を轉じて。紫磨黃金の佛體。ひかりかゝやく覺の姿になるほどの大事。種なくては叶はぬはつ。然るに我身は曾無一善。倒にして振ても。善もなければ功德もなし。但澤

山なものは煩惱惡業それは否なに惡道の業因。淨土參りの因らしひもの。我方には芥子はかりもなし。處にありかたひ其無善造惡の我曹が。今度の報土往生の業は。阿彌陀如來我等に代せられ。五劫永劫の御苦勞から。御成就圓滿あそはされた南無阿彌陀佛が極樂參りの正定業。惡人凡夫を是非とも佛になさふぞと思召しつめられた眞實の御慈悲が。我他が胸の中にのりうつらせられて。御助け一定の信心とは顯はれて下された。是れを往相回向の信行と名けて。他力から下された。極樂參りのたねぢや。「爾時にて」の正定業に卽て。能修の行相につくと。所修の法體につくとの異があて。善導の御釋に。「一心專二念彌陀名號一。行住座臥不レ問二時節久近一。念々不レ捨者。是名二正定之業一。順二彼佛願一故」と仰せられたは。もろ〳〵の雜行をすてゝ。一心に阿彌陀如來一佛を賴み參らせ。立ても居ても臥ても起ても余のことをせずに。但南無阿彌陀佛〳〵と。聲にあらはして稱ゑるはかり。それが正定業と云ふ極樂參りの極札の付た身のうへぢや何せ極札がつゝぞ

○正定業の辨

○一心等散善義の文なり

去れは如來の本願に叶ふゆへぢやと御意なされた。善導大師。此御釋は能修の行相に付て。正定業の名を斷せられたもので。極樂參りが望みなれは露ちりほども雜行雜修をまぜてはならぬ。一心專念うちかたふひて。御恩を喜へと云ふことを。正に御すゝめ成るゝ思召しぢや。又祖師上人今の偈文は。所修の法體に付て。正定業と云ふことを御示なされて。我等が方に精出して稱名たに由て。初めて正定業となるではなひ。惡人凡夫が往生の業を。頂て彼尊の方に南無阿彌陀佛と定め置きて下されたを。正定業と名けさせられた。併し愛を名ては聞きまどふて。自力になりたがるに由て。聖人の御意に。「正定業たる稱名念佛を以て。往生淨土の生因と計ひつのるすら。凡夫自力の企なるがゆへに。報土往生叶ふべからず。南無阿彌陀佛を極樂參りの正定業とあるを聞て。さては念佛申して數をつみ。これを業として參ることぢやと心得て。自力の功を頼むものは。眞實報土の往生は叶はぬ」と御示なされた。然らは何と心得るぞ。去れは「我れすでに本願

○聖人の御意改邪鈔の文なり

の名號を持念す。往生の業成辨することを悅ふへし」と。覺如上人の御示しなされた通り。頼むものが佛にならずは。我は正覺は取らぬ。南無阿彌陀佛とは名のらぬと御誓ひなされた。法藏菩薩已に號を易られて。南無阿彌陀佛となられ。本願の名號を御成就あて。今其名號を銘々口に唱ひあらはすからは。「衆生稱念必得往生」何の疑ひはなひ。愛を遮如上人は「不可思議の願力として。佛の方より往生は治定せしめ給ふ」と。手みぢかに御勸化なされた。興喩は寡居のものが。自身に食物こしらへせふと思へは。米を炊たり味噌を摺たり。水を汲たり。火を焚たり。大底のことではなひ。其くせ陸なことは出來ぬ。然る處餘所へ召て去は迷なものぢや。座敷へ居てゐるうち。いつの間にやら拵が出來て。追付膳かでる。内てとは違ふて。種々の獻立。これは御馳走御加減でと云ふて。挨拶するはかりぢや。準へて聽聞あらふ。極樂まいりに凡夫自力の企をするは。自分に食ものでしらへするやうなもの。「急走急作如救頭燃」あたまの髮に火の

○衆生云云禮讚の文なり

○不可思議云々五帖十通の文なり

○寡居の喩

○攻善幾に

曰く若作如レ此安心起行ト者、縱令苦二厥身心一日夜十二時急走急作如レ炙二頭然一者衆名二雜毒之善一、

○至心信樂願の釋

つひたを拂ひおとすほど。驕たてゝも。凡夫自力の企は『總名二雜毒之善一』骨をおるばかりて。所詮陸なことは出來ぬ。然るに本願招喚の御召に應し兎も角もと自力をすて。大悲の御家へ招れてゆけは。直に本願名號の御膳がすはりて。五刼永刼かゝらせられての御料理獻立。不可稱不可說不可思議の功德の御馳走に飽せて下さるほどに。行者の方には何の苦勞造作も入らず。さてもありがたや南無阿彌陀佛と。挨拶申して。但御助けの御恩を喜ふはかりにてある。此道理を御示なされんが爲に。次の文に『至心信樂願爲レ因』と仰せられた。『至心信樂願』とは。第十八願のこと。七字一句の偈文ゆへに。三信の中。初め二つを擧て。後の欲生我國を畧なされた。各々我等他力の御慈悲に催されて。枯木に花の咲たやうに。眞實に如來を賴む。一念の信心のきざしあらはれたを至心と云ふ。其疑なき至心のまことから。且暮御慈悲を念じ御恩を喜ぶは信樂。この領解に成りて。昨日や今日と。淨土參りの近寄るを待ちうけ樂しむ心になりたを。欲生心と名け

○願爲因の釋

られた。開けは三信なれとも。つゝめては他力の一心。この一心を我等に得させて。極樂へ參らさふと御ちかひなされたを。至心信樂の願と云ふ。『願爲レ因』とは。因は因種と云ふてたねのことぢや。然らは我等が淨土へ參るには。名號のたねと信心のたねと。二つあることかといへは。左右ではなひ。如來の我等が胸の內へ蒔つけて下された業は。本願名號。南無阿彌陀佛。それが光明の緣にめぐまれて。初めて御助け候へと。信心の苗代だねと萌あらはれた。然れば信心と名號とは別な物ではなひ。本より一體の南無阿彌陀佛ぢや。然れとも名號を稱ふる力で極樂へは參らぬ。賴む一念の信心で參る。種は種なれとも一つぶの粟粒では米はなられぬ。是を大地へおろし。苗代種と萌出た處て。極めて秋の米を得る。念佛も但となへてはたすからさるなり。此の念佛のいはれを能くしりたる人こそ佛にはなるべけれ。

○旃檀香木の喩

『旃檀香木』と云ふ勝れたたき物も。消炭にして販は二束三文。あつたら寶の香木が消炭の直段に成りた。南無阿彌陀佛の名號は。牛頭旃檀

の如く。難有い寶にてましませども。疑心自力の企てから。是れを稱へて因にせふと思ひつのるは。牛頭旃檀を燒て消炭にすると同しこと。聖人善知識の御勸化を聽聞し。自力雜行の心をすてゝ。但不思議の願力ぞと。他力の御慈悲を一念に賴み奉れは。牛頭旃檀を寶とし。燒て一間をくゆらす如く。やがて南無阿彌陀佛の香が身に顯はれては。參り下向禮拜恭敬の營が出來る。口にあらはれては南無阿彌陀佛。心の底には御助一定あらたふとやと。名號の香ひ句ひが胸の中にみちくゝ給ひたが。やがて至心信樂の姿。この一念發起の處で。極樂參りは定るぞと御しらせ下されて。「至心信樂願爲レ因」と顯はされた

成等覺證大涅槃。必至滅度願成就。

此の御文の意を窺ふに。在座の面々が。御助け一定と疑ひはれた一念の信心は。第十八の願から喜はせて下さるゝ。佛恩を思ひつゝけて。口に南無阿彌陀佛と稱ふるは。第十七の本願から稱はさせて下さるゝ。夫れは上の

文に聞へて。今は正しく我等か淨土に往生して。彌陀同體の覺を開く身の上と成た仕合は。第十一の本願御成就の御薩であるぞと。御しらせ下さるゝ。祇今の御教化にてある。實さて成等覺とは。凡そ菩薩の初發心より。佛果を極め給ふまで。三大阿僧祇と云ふ。永ひ間の御修行。先づ十信の初心から。十回向滿し給ふ迄に。一大阿僧祇劫の年月を送らせられ。夫より十地の初地。歡喜地不退の位にのぼり給ひ。第七地の滿ずるまでに。又一大阿僧祇劫を經給ひ。さて第八地より。五十一位等覺の位までに。又一大阿僧祇劫を經させられて。ちやうど三大僧祇の御修行が相すむ。其うへに百大劫の年月を送りて。此間に相好の因を植させられ。終に五十二位妙覺圓滿の覺を究め給ふとあることぢや。其五十一段目が。等覺補處の位。即ち彌勒菩薩の御果報。今は兜卒天の內院に御座なされ。四千歲の御壽命が盡さると。此の人間に下生し給ひ。支頭摩城婆羅門家に生れさせられ。梵摩跋提。須梵摩を父母として。生れ出て給ふ處が。人間の壽命八萬歲の時

○成等覺の釋
○阿僧祇或は阿僧企那と云ふ茲に無央數と翻す

○三會初會二會三會なり
○四生胎卵濕化なり

年に合せて御身の長が三十二丈。前佛の釋迦牟尼如來と同しやうに。十九出家。三十成道。龍華樹と云ふ樹木の下に於て。抄覺圓滿の佛とならせられ。三會の說法を開ひて。遍く四生六道の衆生を御濟度なさるゝ。前佛の釋迦牟尼如來御入滅より。此の彌勒菩薩の御出世まで。兜率の四千歲の御壽命を。此の人間の年につもりた處が。五十六億七千萬年。彌勒菩薩は兜率の四千年の一生を限りとなされ。當來指づめ佛にならせらるゝ。信をに た同行の身は娑婆の一生五十年か六十年を迷のをさめとして此度佛果の覺に到る。是れを御經には「次如彌勒」と說せられ。釋には「便同彌勒」と仰せられた。そこを御和讚に「五十六億七千萬。彌勒菩薩はとしをへんっまこと との信心うるひとは。このたひさとりをひらくへし」と御意なされた。彌勒菩薩も決定必定成佛を御掌の中に握らせられ。我等も亦他力の御蔭で。此たび指つめ佛になる。そこは双方も同しことぢやはどに。この位を正定聚とも名づけ。亦は等覺を成するとも御示しなされた 裏「證二大涅槃一必至

○涅槃の釋

滅度願成就」とは。涅槃は天竺ことば。具にいへは摩訶般涅槃那。此に大滅度と云ふ即ち平生聽聞の彌陀同體のさとりと云ふかこの果報のことぢや 娑婆にゐるうちは三大阿僧祇をへて漸く得給ふ彌勒菩薩等覺の位を。一念歸命の時。我等が身にゐさせ下され臨終の夕には彌勒菩薩に先立て無上佛果のさとりを開かせ下さるゝ。裏「雖二溪邊千尺松一。不レ若二嶺上一寸草一。」溪合から生立た大木の松と。一夜の間に嶺の上にはゐた一寸はどの草と。何れが高といへは。千年もかゝりて立ちのびた松よりは。一寸はどの草が遙上に立てあるのは。高い山の頂に生た德。今日の迷の凡夫が。恐れながら彌勒菩薩に先立て。此度さとりをひらくは阿彌陀如來の御慈悲の頂に。育てあげて下された御蔭ぢや。そこを「成等覺證大涅槃」と仰せられたが。若る我等如き白地底下の凡夫が。大般涅槃彌陀同體の果報をうると云ふはあまりといへは理會のゆかぬと。其を疑ふ人も有ふが。聖人御本書の證卷に。「然阿彌陀如來。從レ如來生。示二現報應化種々身一」と仰せられた。如

○千尺の松と一寸の草の喩

○白地底下何も知らぬ下根下劣の凡夫なり

と云ふは一如のこと。眞如のこと。佛性のこと。是が大般涅槃の覺を得る因ぢや。夫れで涅槃經には。「佛性卽涅槃」と御說なされた。然るに阿彌陀如來は。其佛性をさとらせられて。無上涅槃の上もなひ御果報。爾時に其佛性一如とは何たる物ぞといへは。卽ち十方衆生我々までが。本來本有と身にそなへて。佛になるべき因ぢや。其たふとひ佛性を具へながら。本の寶の持くさりで珠かけながら迷ふてゐるものを。法藏菩薩これを哀み思召し。十方衆生の佛性を。衆生になり代りて證りあらはされたが。拜み奉る阿彌陀如來。處にありがたひ謂がある。十方衆生の佛性を御さとりは下されたれとも。其御證りを衆生の機に受取らさねは彌陀同體のさとりが開けぬと思召して衆生の賴む機と。如來の助け給ふ法とを結び合せて機法一體の南無阿彌陀佛を御成就なされた。爾機法一體とは。南無は彼尊を賴む機の方。阿彌陀佛は賴むものを助け給ふ法の方。我身の上の一大事と知らは賴むはせめて此方の力てありさふなものなれとも。そこか凡夫後世を大事

○佛性一如の事

○機法一體と云ふ事、寶章に曰く南無の二字は衆生の彌陀をたのむ機のかたなりまた阿彌陀佛の四字はたのむ衆生をたすけ給ふ方の法なるか故に之れ卽ち機法一體の南無阿彌陀佛とまうす意なり

と眞實に如來を賴むすべを知らぬ。身しらすの我等か爲めに。賴むわけ迄も彼尊の方に御成就なし下されたを機法一體の南無阿彌陀佛と云ふ。設へは南無觀世音菩薩といひ。南無藥師瑠璃光如來と云ふやうなは法は佛のものなれとも。南無か行者のものぢやに由て。機と法とが一體でなひ。夫ゆへ大底功をつまねは其願が叶はぬちやうと弓を射に年月をかゝりて修錬せねは的へ中らぬやうなものぢや。今機法一體と云ふは夫とは違ふて。阿彌陀佛の法に南無を添て御成就なされて。賴む機も。助け給ふ法も。彼尊のものぢやに由て。何時ても自力をすてゝ背後むきさへすれは。其まゝ御助けにあづかる。爾ちやうと竹田か人形に揚弓を射さすに。百發百中。十かが十ながら中る。是れはどうなれは。本其人形に持せた弓矢も。向に掛け置いた的も。勿論其人形も。皆竹田か一人の細工ぢやに由て。是非とも中るやうに。預て仕かけて置た。今がそれぢや。一體の中に能念所念をわかつものなりと御意なされて。難有いは阿彌陀如來五刼思惟の御工から。南無

○人形揚弓の喩

阿彌陀佛の機關を御成就なされ。一念南無と賴めは。是非阿彌陀佛の的に中るやうに御仕かけなされて置れた。勿論人形のことなれは。弓いる心はなひ。それが弓射れは。やはり竹田が射さすのぢや。御座の我等は人形同前。如來を賴む信はなひものぢや。其眞實のなひ我等が。御助け候へと如來を賴むは。彼尊から賴ませて下された。「賴ませて賴まれ給ふ彌陀なれは賴む心も我とおこらじ。」賴むも他力。助け給ふも固より他力の不思議なれは。十即十生。百即百生。雜行すて〻彌陀を賴めは。一人も取りのこしなく。皆大般涅槃の證りに至らせて下さる〻爰を聖人の御歌に。「われ賴む心をすて〻彌陀の名に。助けてあるを賴めみな人」と詠じ給ひ。蓮如上人の御ことばには。「南無阿彌陀佛と賴む心は。我も同し〻南無阿彌陀佛にならんと思ふ心なり」と御意なされた。「蜂の中に似我蜂と云ふは。螟蛉の子を取りて我巣に入れ。似我々〻。我に似よ。我に似よ。我に似よといへは。いつともなふ皆似我蜂の形になるとある。今も其の如く。阿彌陀如來無緣平等の御

○似我蜂の喩

慈悲から。第十一願必至滅度の御願ひの巣の中に我等を旦暮やしなはせられ。十七十八の本願の眞實を以て。我に似よ〻。南無阿彌陀佛〻と呼かけて下された彼尊の御信心から。いつの間にやら御助け一定の覺悟に成りて。此度はありがたや。眞實報土の華の都で。無上涅槃彌陀同體。阿彌陀如來と寸分かはらぬ。たふとひ果報の身となるは。必至滅度の本願御成就の大庇にてある。

如來所以興出世。唯說彌陀本願海。

むかし釋尊靈鷲山にまし〻て。大經御演說の時。「如來以無蓋大悲。矜哀三界。所以出興於世。光闡道教。欲極群萌。惠以眞實之利」と說せられて。我この娑婆世界に出現して。一代八萬四千の法を說けとも。根本出世の本意と云ふは彌陀の本願。南無阿彌陀佛を說ふが爲ぢやと仰せられた。其經說を受け給ひて。只今の偈頌に連ねさせられた。初めに如來とあるは。通じては三世の諸佛如來のこと。今別していへは釋迦牟

○靈鷲山 梵に耆闍崛山と云ふ山頂鷲に似たり故に名く

○如來の釋

○出興世の釋

○行河云云　方丈記に曰く行く河の流れは絶えずして而ももとの水にあらず

○しかつへらしふ　眞面目らしく なり

○阿育王の因緣、阿輸柯とは阿育王の事なるに別人の如くせるは未審し

尼如來。興出世とは。世とは世間のこと。世は遷流の義で。せんぐりくにうつりかはり流れゆく世の中の分野。人の身の無常なることは。行河の流れて又もとの水にあらぬが如く。只何事もみな偽の世に。年よると死ぬるとの二ばかりはまことにして。貴き人も賤き者も是を免るゝこと叶はず今茲の姿は去年の形に似ず。今日の命は昔者に還らす。出入息の間にも。傾くは身の齡。縮るは人の命。延命と祈るうちにも減壽命と。神前に蹲りて。しかつへらしふ柏手うちて。息災延命諸願成就と祈る間にも。ちくちくと命が減て。後は遠なり先は近なる。そこを思へは油斷はならぬ。[illegible]昔し天竺阿育大王の大弟に。阿輸柯王と云ふがあて。大兄の阿育大王を亡し我代りて國王とならんと云ふ。謀反をたくまれたが。阿育王の御耳に入り大きに御逆鱗あて早速捕卒をつかはされ。阿輸柯王を搦とり大王の御前にひきすゑた。其時大王目を瞋し。言葉あらけて叱り給ふやうは。汝我骨肉の弟てありながら。兄を弑して天下を奪ひ取んと謀反をたくむ狀。言語道

斷の事なり。緣て今日からめ取た。今其方を手にかけ。存分にするは易けれとも。併しなから其方も切角思たち。我に代りて王位に登んと云ふ望を興したものなれは。兄弟のよしみ。我憐愍を以て。是より七日の間。其方に位をゆづりて國王の寶位に昇し。萬乘の主としてゐさすへし。しかし七日を限り。八日目には急と其方か命をとるほどに。其覺悟をせよ。七日の間は位をゆづるなり。其内に榮耀榮花心の望に任すべしとて。自ら御隱居なされ。八萬の婇女。百官群臣。こと〳〵く阿輸柯王へ御讓りなされたれは。今日より一天の君と。何れも冊き敬ひ奉り。御膳のそなへ衣服のかさり。管絃歌舞に至るまで。善つくし美つくしての事なれは實に帝釋喜見城の樂。人間には亦と雙なき榮花を極めらるゝことなれとも氣味のわるひは暮方になると。穢多旃陀羅が鈴をふりて。御殿のまはりを叫まはるには。今日も暮たり殘りて六日なり。七日目には空しくなり給ふべし。又次の日になれは。今日も暮れたり。殘りて五日あり。六日の後には命終らせ給ふ

べし。あら御笑止の事やと。毎夜々々叫まはれは。阿輸柯大王これを聞給ふごとに。其聲が胸にこたへて。國王の御位も。歌舞伎樂の樂事も。御心にそまぬこそたゝ茫然として。案じ煩ふて御座りたが。思の外七日すぎたれは。阿育大王其科と免し給ひ。剩へ無常苦空の道理を說て佛道に導き給ひたと云ふことが大論に見へた。いかさま七日たつと殺さるゝと云ふことならば。阿輸柯大王。御心の樂まなんだは斷りぢやが。今日の我等も七日たつと死ぬる。十日目には命終ると先立て夫がしれたらは。漿水も喉を通るまひ。五欲の樂みどころではあるまひけれとも。悲ひことは凡夫。宿命智がなひに由て。後も知らす前も知らす。但いつまでも長生あることの樣に思ひ。去年より今年が大事。昨日よりは今日が大事と。後世菩提のことは棚へ揚て。夢の世のかりごとに憂身をやつして未來地獄を知らすに居るが『怖心起時如履湯火』。さあ今死ぬると云ふ段に成りて。やれ怖や悲しや後生願へは好かりたものをと其時。百曼陀羅後悔しても取りかへしは

○五欲色聲香味觸の欲なり

なひ。若る人間の墓なら分野を哀ませられ。『大悲隱二西化一驚入二火宅門一。』無勝莊嚴の淨土の敎主。釋迦牟尼如來。二千余回の其ひかし。此世にあらはれ給ひ。無常を知ぬ者に無常を敎へ。地獄を知らぬものに地獄をおしへ極樂を知らぬものに極樂の道を敎へ下された。そこを如來世に出興し給ふと仰せられた。出は出現。興は興起。わさ〳〵此世にあらはれ給ふと云ふこと。所以とは其謂のこと。魚を取ふと思へは海川へ臨み。薪を採ふと思へは山林に入る。佛地上の菩薩を濟度せふと思召せは。他受用報土に影現給ふはず。聲聞辟支佛の二乘を濟はふと思召せは。方便有余土に出現なさるゝはず。夫が此五濁惡世の娑婆世界に出給ふは。惡人凡夫を濟はふと思召すからぢや。『爲柴薪刈』と思ふ者は。鎌や斧を持てかゝる。魚を取ふと思ふ者は。必す網を持てゆく。惡人女人を助けふと思召すには。外の敎ではゆかゆ。彌陀の本願南無阿彌陀佛の大網をおろし給はねは。我等は助けられぬ。然れは釋迦牟尼如來この娑婆に應現給ふ所以は。外の御用では

○大悲云云觀經玄義分の文なり

○樵夫漁師の喩

○節季借錢の喩

なひ。阿彌陀如來の本願を說きて。惡人女人を御濟度なされふ爲めに。わさ〳〵この世に御出現あらせられた。實「世の中の人にしたがふならひとて。思へといはず思はねといふ。」喩へは身上不勝手なものが。是はどの財がなければ。當節季が越へられぬと思ふて。夫から平生心易ふする分限者の處へ。銀をかりにゆく。さて此銀の無心と云ふものが。何ばふ懇意な處でもいひ出しにくひもので。案じ〳〵て往た處が。折節主が留主で空しふ戻りた。又重ねて如ところ。今度は內に居合せた。是れ幸ひ。何でも無心をいひ出さふと思ふたれとも。數から棒のやうにいひ出しもならす。前をきに余のことを一ついひ二ついひ。卒話が長ふ成て。先にも退屈の體なれは。先つ今日も見合さふと。肝心の用をいはずに戻りた。此やうに度々足を運んで。思はぬ事をいひ。追從まじりの話をして。竟にやう〳〵無心をいひかけた時。「案じたより產の易さよ」と。先の受か好て。何にも貸て進せやうと。請合てくれたれば。其時やれうれしやと安堵する。ちやうど其

○五德
住奇持法、
住佛所住、
住道師行、
住最勝道、
行如來德

樣なもので。釋迦牟尼如來。往來娑婆八千遍と。此の娑婆界に來らせられたが。凡そ八千度。それが何の御用なれは。余のことではなひ。彌陀の本願。南無阿彌陀佛を說き給はんが爲めなれとも。衆生の機緣が至らねは。說きて聞せても受けがれるし。受けがわるふては說きても所詮がなひと思召して。のら〳〵時機を鑑み給ふ間は。いろ〳〵御心にそまぬ聖道自力の法を御說なされたが。時こそ至れ。大經御演說の會座に於て。「爾時世尊諸根悅豫」と。釋迦牟尼如來の御悅が。擧身に顯はれ給ひ。猶其上五つの德相が現じさせられ。常にかはりて殊にたふと〳〵拜まれ給ひたゆへ。阿難尊者これを見とがめて。今日如來の御姿。常にかはりて拜まれ給ふは何なることにて候ぞとあれは。爾時如來の御こたへに。汝快く問ふた。何にも不審尤ぢや。是れまで我出世の本懷を說ふ〳〵と思ふたれとも。未だ時機純熟せなんだゆへ。今まで說きゆらはさなんだが。今日こそ時節到來して。始めて彌陀の本願を說き。凡夫往生の道が闢た。實に靈瑞華の花盛に

○月見の喩

値た仕合ごとそと御よろこび成れた興然れは釋尊一代八萬四千の教を說て御勸めなされたは。月まつはどの手づさみの風情なるへし。月待ち日待ちをするに。待つ間が退屈なに由て。いろ〳〵の慰みことをすれとも。其慰みことが本意てはなひ。今も夫れて衆生の根機を調へ給ふ間には。八萬四千の教を開き給ひたれとも。夫が世尊の御本意ではなひ。眞實の御本意は南無阿彌陀佛の月の出汐を拜ふ爲ぢや。そこを「唯說彌陀本願海」と御意なされた。是れは大經のこゝろ。阿彌陀經には「行二此難事一得二阿耨多羅三藐三菩提一爲二一切世間一說二此難信之法一」と御說きなされて。いろ〳〵勸めにくひ苦勞なこと共をつとめ。釋迦牟尼如來と名のり出たは。極難信の法南無阿彌陀佛を說ふが爲めぢや。是ばかりに永々骨を折たぞと御演說なし置れた。然れは各々喜ばねはならぬ。「難レ値難レ見難レ得難レ聞。」あひかたく得がたく聞がたひとある。如來出世の御本意。安樂一大事因緣の法にあひ奉り。極難信とある得がたひ信をゑて。往生を安堵し。御恩を喜ふ身になりたは。偏へに往相還相他力回向の御手まはしの御恩にてある。

○唯說彌陀本願海の釋

○難値云云經に曰く如來興世難レ値難レ見、諸佛經道難レ得難レ聞云云

五濁惡時群生海。應信如來如實言。

○五濁惡時の釋

這の二句の偈文は。如來の本願。正所被の機を顯はされて。智者聖人は格別。末の世の惡人女人は。わき目をふらず。我身に引き受けて。他力本願の御慈悲をたふとへと。誘め給ふ御意の趣ぢや。興五濁惡時とあるは。五濁は刼濁。見濁。煩惱濁。衆生濁。命濁。これを五濁と云ふ。刼濁とは人間の壽命八萬四千歲より。下りて二萬歲に至り。此時から初めて刼濁にうつりた。刼濁と云ふは。但何となく時節が惡ふなりたと云ふこと。見濁と云ふは見は分別に名つくると云ふて。衆生がいろ〳〵邪見を興し。惡分別を出すこと。煩惱濁と云ふは欲が深ふなり。瞋恚がつよふ成りて。段々煩惱に枝葉がさいて來と云ふこと。衆生濁と云ふは。見濁といひ。煩惱濁といひ。さま〴〵惡ひこと揃を。身に具た我等ぢやに由て。これを衆生濁と云ふ。命濁と云ふはかの煩惱濁の欲が深く成りて物の命をとり。亦は瞋恚

に由て物の命を殘ひ。殺生業の報がつもるゆへ。臥て吐唾身にかゝると。我身の壽命がちゝまりてくる。是を命濁と云ふ。

○濁の字の釋

■濁は淬穢の義と云ふて物のをりかすのこと。喩へは醬油油の類でも。上澄の處は好。段々減て淬穢になりてはつかへぬ。人間も夫で。好すぐれた處はみな上代の人間。末代の淬穢に成りたが今の世のありさまぢや。夫で五濁惡時と云ふ。これも五濁の惡時と云ふことで。五濁のにごりは昔し佛在世にも有たれとも。其みぎり五濁とはいひながら。猶世も好し人も善かりた。今は五濁の中でも取りわけてわるひ時節。それで五濁惡時と云ふ。

○群生海の釋

■群生海とあるは。即ち今日の我等がこと。海の字はうみと云ふ字で。迷の衆生のおびたゝしひことを海に御たとへなされた。其衆多しひ衆生の生れ時はといへは五濁惡世其身を問へは濁惡邪見。時もわるし機もわるし。一生涯思ひのまゝに惡をつくり。蠱が繭をつくりて。自ら身を苦しめるが如く。惡業の繭に身を縛はれ。ゆく先き三惡道の苦患。頸ぬけの成らぬ我等を。枯木に花を咲せて

下さるゝが彌陀の本誓。それを敎ゑ給ふが釋迦牟尼如來の金言。佛語に虛安なひはとに。氣づかひなしに本願に縋り奉つれ■仍て次の文に應信如來如實言と仰せられた。■應信とは御開山御門下の我他へ御下知の言。五濁惡世の只今。濁惡邪見のいたつらものは。彌陀の本願を信せすしては。ふつと助かる道はなひぞ。側目をふらず彼尊を賴めとある。御意を頂ひたからは。御流れを汲む面々。雜行すてゝ御慈悲に本づき。御助け一定南無阿彌陀佛と御返答申さねはならぬ。■如實言とは金剛經に。「佛是如語者。實語者無誑語者」と御說きなされて。佛の御言は苟且に仰やることでも。兎の毛の芒はども違はぬ。去るはとに阿難尊者は廿歲になるものゝ子に。八十になる翁があると仰せらるゝとも。佛の御意ならは疑はぬと仰せられた

○應信の釋

■彌陀の本願云云寶章に曰く一切の男女たらん身は彌陀の本願を信せすしてはふつと助かるといふ事あるへからす

○如實言の釋

■名醫三浦道三の因緣

■寶先年關東に三浦道三と云ふ名醫があた。其時分四五人寄りて話の序に。道三療治のことをいひ出し。さて〳〵天晴の名醫哉。あの人の療治にかゝれは。何たる病ても治らぬと云ふことはなひと云ふて美たれは。其中に一

○律儀正直なること

人律義な男があて。私は生れ付て無病息災。どこのわるひことも御座らぬが。兎角この貧病に困ますと云ふたれは。座中の人が聞て。道三老は貧病をなをすことが。殊に名人ぢやはどに。急て療治にあつかられよと云ふたは是れは座興に申したことなれとも。律義な男なれは。夫をまことゝ思ひ。歸ると直に道三の處へしかけ。脉を見てもらふた。道三脈をみ腹をなでゝ何も病氣は見ねぬが。どこがわるひのぞといはれた。此の男申すには。私外に申分は御座らぬが。兎解貧病にこまります程に。何とぞ御療治を頼みまするとと云ふたれは。道三笑ひ〳〵。いかにも拙者體の疾は療治すれとも貧病ばかりは手柄に及ばぬとありたれは。右の男か否彼方の貧病御療治なさるゝことは。たしかに承りました。何とぞ御憐愍を以て頼み上まする と。一向に申す。道三片腹いたく思ひながら心ゆかせと思ひ。つか〳〵と立て奥の間に入り。壁土を一摘取て紙に包み。段々の懇望なれば此の藥をつかはす。飲汁には深山の冷水。奥山溯の奇麗な水を抔て。一度に是をの

めと云ふて呉られたれば。夫は難有いと云ふて。押しいたゞひて歸り。夫よりかの冷水を求めに。山深く尋ね入りたれば。幸そこに谷川の奇麗な水が有たゆへ。其水を抔ふて夫藥をのみたが。能ふ見れは其川の砂がきらきらと光りて。金色に見ねるに由て。試みに砂をつかむで見たれは。皆金の砂ぢや。時に此男痴人なやうでも不癡。是ばどうでも金山から流れ出る水さては此の奥に金山があるに極りたと。夫れから家に歸りて人を誘ひ。此の趣を公義へ訴へたれは。早速見分仰せ付られた處が。紛もなひ金山で有たはどに。最初見付けた者なれは。夫律義な男を頭取に仰せ付られ。段々金をほり出したれは。其御蔭で二三年の間に。大分限者に成りた。全く道三の御蔭ぢやと云ふて。わさ〳〵禮に參り。先達ては結構な御藥を下されたゆへ。夫を喰まして。御蔭で程なふ貧病が愈りました。今日は右の御禮に伺候仕りましたと。藥禮音物いろ〳〵目通へ並へたれば。道三不思議に思ひ。先年壁土つまむた處を見られたれば。ありあかりて其處に青蜥が塗

りこめて有たもしらず。それぐち摘むてやりたを。藥ぢやと思ふてこれを飲み。剩へ貧病が治たとは。洵に毒藥變して藥となるは此事ぢやと云ふて道三も横手をうたれたと云ふ事がある。「鰯の頭も信心から」と云ふは此やうな類ぢや。最初道三が貧病をなをすと人の云ふたも。道三の壁土つかむて與ふたも。實のことではなかりたれとも。律儀な男はそれを一心にまことゝ思ふて信仰したれば。果して金山をほり出して。貧病がなをりた。信心の德はたふとひものぢや。凡夫の云ふ虚を信じてさへ。其効が有た。況んや今は三大阿僧祇の修行に由て。口業の過をはなれ玉ふ。釋迦牟尼如來の金言。「我見二是利一故說二此言一。」疑ふなあやふむな。末の世の惡人女人。彌陀を賴めは助かるに毛頭疑ひはなひほとに。雜行すて〻大悲に縋れと。釋尊一佛の御請合ひで事は足てあれとも。衆生に信を取さふ爲めに。十方諸佛一同に。我等が往生を御請合なされて下された。夫に何の疑ひがあるぞ。「貪瞋も深く。愚痴もさかんならんに付ても。佛語に虚妄なければ。い

○我見云云阿彌陀の經文なり

よ〻必定と思ふへし」と。口傳抄に顯はされて。根性がわるひ生れつひて愚痴なと。足もとに氣をつけて欺くな。釋迦の發遣。諸佛の證誠。ゆめ〻疑ひはなひほとに。罪業の思はれ煩惱のおこるに付ては。斯るものを御助けあることの難レ有やと。余所見をせずに。但廣大の御恩を喜べとて。「惡信如來如實言」と御勸めなされた。

能發一念喜愛心。不斷煩惱得涅槃。

此の二句の中上の一句は無量壽如來會に。「能發二一念淨信一歡喜愛樂」とある經文に依せられて。秖今の偈頌を御つらねなされた。爰易に「眇能視跛能履」とあるを程子が傳に。「能視者不二善視一也。能履者不二善履一也」と書かれた。この意は眇と云ふは一眼のこと。物を見るに眇目では不自由なものて有ふに。眇のものは一目でも能よう見ると云ふことて。「眇能視」といひ。足のなへた跛辭なれは。人並にあるくことは叶はねとも。左支右吾いさりまはりて。一日に五町十町の道をゆくは。蹇人にしては能よう歩と云

○無量壽如來會大無量壽經の異譯五存經の隨一なり

○眇と跛の喩

○能發の釋

○一念の釋

○善知識

ふことで。「跋能履」と云ふ。四歳五歳の幼兒に茶などをはこばせて。さても出かした能ふ持て來たと云ふて親が賞る如く。我等は愚痴無智のもの聖者の御目からは東西不辨の子共同前。其頑是なしのおろかものが。御助け一定あらたうとやと。一念喜愛の信を發せは。那愚痴なおろかものが。能ようあの領解には成りたことよ。さても出かしをつたと。釋迦彌陀二尊慈悲の父母の御喜ひなされて下さるゝ。そこを能發と仰せられた。一念と云ふは大經の本願成就の御文には。「乃至一念」と御說きなされた。さて此一念が御宗旨に於て肝要なことぢや。夫ゆへ御本書信卷には。「言二一念一者彰二信樂開發時節極促一」と御意なされて。極促と云ふは至極つゝまりつゝまりた時尅と云ふこと。喩へは一年中の仕舞の月を極月と云ふ。去はこの一念は。我等が久遠劫から今日まで永々しふ迷ふて來か。やう〳〵宿善開發して。一念如來を賴む處が其永々しひ生死流轉の迷の仕舞ぢやと云ふことて極促と云ふ。それで善知識は「皈命の一念發得しぬれは此時を以て娑

覺如宗主を指す執持鈔の文なり

婆の終り臨終と思ふへし」と御意なされた。然れは此度の生に此の本願にあひ奉りたは。いかひ仕合せことぢや。誰も爰を喜ばねはならぬぞ。法然聖人は「天にをとり地にをとりても喜ふべし。このたび本願にあへることを」と御意なされた。さて促の字は。せまると云ふ字で唐人の詩に「人間年月促」と云ふたも。一年中の仕舞の月が極月ぢやが。其極月もまた三十日と云ふ日數かある。それか二日たち三日たち。大晦日と云ふに成りて一日の間取りやりをして。夜に入りてやれ仕舞たと云ふて枕をかたふける。子丑の終まては。やはり今年の冬。寅時の時計を一つうち出すか相圖。其時からか元日の春。今一念もそれで。我等が生々世々のさはかしひ迷の冬が仕舞に成つて。後生御助け候へと。たつた一念如來に向ひ奉た時か。往生の元日。極樂翌りの春を迎へたるにてある。そこを一念と仰せられた○喜愛心の釋

○喜愛心とは。喜は歡喜よろこひのこと「つらかりし泪に袖はくちはてぬ。このうれしさを何につゝまん。」往生を安堵せぬ昔は。行に迷ひ信に迷ふて

○古歌　讃

人不知
○狂句

○發業潤生唯識論に出づ

我機の上の不足を算へたてゝ歎てはかり居たものが。今は御助け一定と。往生の方角をわきまへ知せて下されたれは。忝なや「よしあしをすてゝ。をきやかり小ぼし哉。」さて〳〵是迄の歎きは由なひことにむだ骨を折りましたと向來のあやまりを知て。さてもたふとや難レ有やと。御恩喜ぶはかりに成りたが。喜愛心の喜の字のをゝろ。愛は愛執。愛著とつゝひて。事々にひつゝひて離れぬこゝろぢや。月を愛し花を愛し。妻を愛し子を愛するなと。皆これか愛執愛著と云ふもの。愛は「發業潤生」の煩惱と名けて。有るか中にも惡ひものぢや。妻にまとはれ子を愛するは有情對のことなれは猶も道理ぢやが。情なひ月花にめてゝ入興がるまてが。迷の媒となる。「桃李綻二春風一翫レ之成二輪回五趣因一」と惠心僧都は御いましめなされて佛法修行の人は。月にうかれな花にも愛な。月花も心をとむれは迷の業となるぞと仰せられた。一念可愛と思ふ愛著が。かりそめなから五百生の迷の業。○疾ても癌ても愛著すれば。無量永劫の迷を引くとある。夫ゆへ皆

○六波羅幸仙が事
○大江佐國が事
○養範が事
○教梅上人が事

○鐵丸鐵鉢の喩

し六法羅の幸仙は。橘を愛して死して蛇となり。大江の佐國は花を愛して蝶になりた例もある。由斷のならぬことちや。仍て養範は菴室の前に咲た紅梅の樹を伐てしまひ。教梅上人は座禪の床を起て。黄金の水瓶を破て棄られたも。夫の愛著を恐るゝからぢや。其はと飾ろしひ愛著を。阿彌陀如來の御本願には御ゆるしなされて至心信樂喜愛の心を發せ。妻を愛したり子を愛したりする。持料の愛著の煩惱て。直に如來の御慈悲を愛著せよ。鐵丸は沈み鉄鉢は浮ふの道理。鉄の鐵を水に投れは立處に沈む。若しそれを打ひらめて。鉢盂に造りたれは水に浮んて向の岸までも達く。鉄は同し鉄なれとも。物は仕樣によることちや。去れは我等が持ちかためた愛著煩惱の鉄丸。「愛不レ重不レ住二生死一」とて。永々の間。生死大海の水底に沈ひで居たものを。五切思惟の御本願。兆載永劫の御細工で打ちひらめさせられ。至心信樂の鉢に造りて與へ下されたれは難レ有や。今は生死の海にもかるゝと浮ひあかりて。やがて淨土の寶の渚。無上涅槃の彼岸へ到る

○不斷煩惱得涅槃の釋

身の上とはなりゐた。偏へに阿彌陀如來本願大悲の御手柄にてある。次に『不レ斷二煩惱一得二涅槃一』とは此の一句は當流の御安心。本願圓頓一乘の御こととはりを顯はし給ふ御言。即ち大經に『信心歡喜乃至一念。至心回向願レ生二彼國一卽得二往生一住二不退轉一』と御說きなされたか此文のこゝろ。御言つかひは維摩經に。『不レ斷二煩惱一而得二菩提一。不レ動二生死一而至二涅槃一』とある經文を依どころとして。曇鸞大師の論註に『不レ斷二煩惱一而得二涅槃分一焉可二思議一』と御釋しなされた文に依りて今の偈文を御つらねなされた。

○煩惱の釋

○煩惱と云ふは煩は喧煩。惱は逼亂。何にもせよ胸の中をさはがし。身の內を苦しめるものぢや。先つ三毒の煩惱と云ふか。貪欲。瞋恚愚痴。其貪欲は第一が男女の色欲。御經に『座起不安』と御說きなされて色欲を念ずる者は。起ても座ても心がおちつかず。身を削り心を苦しめる諸苦所因貪欲爲本。一切苦みの根本ぢやと。佛の金言に違はなひ。加之財欲と云ふは何がはしひ菌がはしひと物をはしがる。夫につひては錢財がな

○御經に曰く常懷二邪惡一、但念二嬈妖一煩滿二胸中一愛欲交亂、坐起不レ安、貪意守惜、但欲二唐得一恒二瞇細色一邪態外逸、

○經に曰く各懷二貪欲瞋恚愚痴一、欲二自厚一已欲二貪多有一尋身上下心俱同然、

ふては叶はぬに由て。何につけても財のはしさよと云ふは下の句。上の句は何にといへは上下共に同じことて。公家も大名も。下駄も燒味噌も。おしなへて欲がるは金銀財寶。『秋の田を刈たるあとの稻雀。求めある身はさはがしき哉。』追從輕薄。さま〳〵人に諂らひ。思はぬことを云ふも。皆錢財はしがる貪欲から起りて。身と心を苦しめるのぢや。夫に限らす瞋恚の煩惱もそれで。一念瞋恚がをこれは。胸をもやし腹がにへかへると云ふ。此やうに身や心をせめなやますものぢやに由て煩惱と云ふ。それが身を苦しめ心を惱すばかりではなひ。惑業苦の三道と名けて。其煩惱から事をこり。身にも口にも惡業をかさね。其業に案內せられて。地獄。餓鬼。畜生の苦ひ報を受けて。多百千刼の間業をはたかれはならぬが。止なん〳〵とすれとも止められざるをいかゝいせん。止れとも驗なく。いましむれとも其甲斐なし。跡からは起り。あとからは起りて。一生涯死ぬる終期。末期の水まで。煩惱妄念のたる間のなひが。罪業おもき我他が身のうへ『山影

○影法師の

喩

入門押不出月夜に道をあるけは。我身に付てまはる影坊子。否ぢやと思ふても打ちけすことも取て除ることもならぬ。「煩惱如二隨レ身影一」と先德は示し置れて。我等が身に具へた貪瞋煩惱が。ちやうど夫影坊子の如く。何はう否がりても。暫くも我身を離れぬ。興時に聖道門自力修行の上では手間隙かゝりて此煩惱を斷じ盡さるゝことぢやが。除伏斷の三つがあて。

○除伏斷の事

除はのぞくと訓せて。取りのけて置て對にならぬこさ。夫戒行を持ち觀念に心を澄す人は。ひたもの煩惱を取りのけ〳〵修行せらるゝを煩惱を除と云ふ。箇樣に段々煩惱を除ものにしおはせて後。夫れから伏の位にうつる伏すると云ふは。喩へは春夏の間に繁茂る草が。急にたやされぬに由て。上へから土をかけたり石瓦を置て抑へて。滋蔓ぬやうにしてをく。左右して草の勢が弱りて立ちのびぬ處を。鋤鍬などを持ちて。さつはりと根をたやし。再ひ萌出さぬやうにした處が斷の字のこゝろぢや。自力の修行で。

○習氣本

煩惱を斷せらるゝが。ちやうど此やうなもので。除は習氣にかゝり。伏は

識に熏した る時なり

現行にかゝりて。八万四千無量の煩惱の草のはゑ出る處を。戒定惠の三學の。石や瓦の鎮せを置きて。煩惱の勢力を折ひてよはらすやうに工夫をして。修行せらるゝことぢやが。永々かゝりて煩惱の勢の弱る時節を見すまして。智惠の鋤鍬を持ちて。煩惱の草の根をさつはり穿たやして仕舞ことぢや。其上は設ひ人が土足で頭の上を踏でも。一念も憎ひと思ふ心の起らぬほどに成つた處が。煩惱の既に成た驗ぢや。此のやうに修行の功をつむて。苟且ながら三大僧祇の永ひ年月を送り。五十二位の階級を經ねは。佛果の覺には至られぬことを。同し聖道門でも。華嚴天台等の宗旨には。何れも速疾成佛のはやわざを傳へらるゝ勝れた敎ぢやに由て。煩惱菩提は本一體。生死涅槃は昨夜の夢と。一念に證りを開く高上な敎の方なれとも。理は頓に證れとも事は漸に除くへし。道理をのみこむことは好けれとも。修行にはやはり手間の入ることぢや。それゆへ法然上人は。一口に「斷惑證理」と仰せられて。何れも難行道ぢや興「何ことに水や氷

○斷惑證理云云選擇集の語なり

○氷と水の喩

とへたつらん。とゝれは同し谷川の水。」水が結んで氷となりたれは。氷が即ち水ぢやと證ても。杓で氷は酌ぬ。煩惱菩提一體と。道理は心に理會でも。惠日と云ふて磨き出したる智惠の日輪に照されて。解でしまはねは。煩惱が菩提の水とはならぬ。所詮凡夫惡人の手柄に及ふことではなひ。然るに今はありがたひ。在家止住の我等が。造惡不善のありのまゝて。如來を頼み奉る一念の當體に。過去未來現在「三世の業障一時に罪きへて」と御意なさるゝ程に。娑婆に居る內は昔しにかはらず。腹もたち欲もおこれとも。根を切りたいけ花の。花は咲ても實を結はぬ如く。利劍卽是の御利益で。一念歸命の端的に。惡業の根切りをして下されたれは。浮世逗留の間に。とれはと煩惱が起りても。まう未來三惡道の怖畏を離れさせて下された。若した迅速ことで。外に並てはなひ。偏に本願一乘。佗力不思議の御利益にてまします。凡夫と云ふは無明煩惱我等か身にみちゝ。欲も深くいかり。はらたつ。心も嫉妬の心もおはく際なくして。臨終の一念に至る

○御意蓮如上人の寶章の御言葉なり

○利劍卽是善導大師曰く利劍卽是彌陀號一聲稱念罪皆除

までたへずやまずと。水火二河の喩にあらはれたりと御意なされて。南に火の河。北に水の河。「水火相交常無二休息一」とは。貪欲がやめは瞋恚がおこり。瞋恚がやめは貪欲が起りて。須臾も煩惱のおこりやむ暇なく。信心の白道を或は焦し或はうるをして。貪瞋煩惱。晝夜不斷たへ間のなひが凡夫の性得。我等が本色ちや。然るにそれを其まゝに繕はず飾らす。眞實報土へ頼むばかりて迎とらせられ。無上佛果の覺をゑさせ下さるゝを。「不斷煩惱得涅槃」と仰せられた。「愚註下卷の語愚を遇に作れり

○愚哉論

哉後學者聞二佗力可二乘當生二信心一勿二自局分一」と。曇鸞大師の御意なされて。煩惱具足の凡夫のまゝで參らせて下さるゝほどに。疑ふなあやぶむな。「自ら局分するな」とある。局分とは我身を省みて。兎や角と計ひをおこすこと。何より角より其計が大きな往生の障になるほどに。「自ら局分するな」との御教化ぢや。「さへられぬ光もあるをおしなへて。隔かはなる朝霞かな」と。元祖上人の詠じ給ふ如く御前に跪ひて御勸化を聽聞し。又は同行會合して。法義物語をして居るう

○法然上人の歌

ちは。おのづから稱名もうかへども。我家に在りて。世事に紛れてゐる時は。腹をたてたり心氣をわかしたり。一日立つても一返の稱名もうかはぬ樣なこともある。適氣が付て。さても悲しや。今朝から今まで御恩をわすれて。せめて一返の稱名さへうかはず何にしても懈怠なことぢや。此やうなことでは。今度の極樂參り。何とも心元なひなどゝ思ふのは。やがて此の方から如來の御慈悲を阻てると云ふものぢや。「さへられぬ光り」とあれは。阿彌陀如來は盡十方無碍光如來。どのやうなことにも碍られ給はぬ。御恩を忘れ御慈悲を思ひ出さず。うかゝと一日をたてるは。彼の貪愼煩惱が胸の中に横たはり。腹を立たり。欲をおこしたり。さまゝに心の中を狂すゆへに。彼尊の御恩もそれに取り紛れて遣れて暮す。それはみな煩惱の仕わざ。左右した煩惱具足の者を。御へだてなふ御助け下さるゝが。本願力の不思議ぞと聽聞したれは。長わすれした程にとて。往生不定とは思ふな。一日の間世用に取りまぎれ。御恩どころでもなかりたが。能日の

暮れになりたれは。御禮申すことを思ひ出して。御前へ出て。一日御無沙汰の御ことはり。さてゝ御はづかしふこそは存じますれ。夢の世の戯てとにのみ貪著仕りまして。大悲の御恩を日がな一日忘却おりました。箇樣に忘れましても。極樂參りは一日近よりましたものをと思ひなをせは。忘れさす煩惱が又思ひ出す御緣と成りて。往生治定南無阿彌陀佛。

凡聖逆謗齊回入。　如衆水入海一味。

此の偈文のこゝろは。上に「不斷煩惱得涅槃」と有りて。造惡不善の凡夫か。彩はずさはらず山出のまゝで。如來を賴む一念に。不可思議の果報を得させ下さるゝことを御示しなされたゆへ。今其意を受け給ひて。但し若いへばとて。彌陀の本願が。凡夫ばかりに限るではなひ。「本爲凡夫」の御誓ひなれは。凡夫か正機てはあれとも。「兼爲聖人」とあれは。證ある聖人迄も。他力に縋り給へは。皆眞實報土の往生を遂らるゝぞと。本願の御手廣さことを顯はされたる祇今の御文にてある。初めに凡聖とあるは。凡は

○凡聖の釋

○内凡外凡　十信以内と以外となり
○三學無分　戒定慧を知らぬ者
○愚異生　凡夫を云ふ
○入眞見道　有漏を離れて初めて無漏に入りた る時也
○三道　來向不還向阿羅漢向なり
○四果　須陀洹斯陀含阿那含阿羅漢
○三賢十住十行十廻向也

凡夫。内凡外凡。具縛不具縛のかはりが有りて。凡夫と云ふにも段々のあることぢや。其中で我等如きは具縛の凡夫。三學無分の愚異生。わるひことが好で善ことが嫌ひ。覺の明き方を逃けまはりて。三惡道の黑闇へ投りたがる兒物。如來は此ものゝ爲めに分て御苦勞遊ばされたことぢや。聖と云ふは聖人。さとりある衆中のこと。小乘でなれは入眞見道已還。三道四果のさとりを極められた辟聞等。大乘では外凡内凡三賢位を越て。初地不退の位に昇せられた巳上を聖人と云ふ。斯の如き大小乘の聖人たちも。みな彌陀を賴ひて極樂往生を遂け給ふ。其ことは大經下卷に說かせられて。十四佛國の諸大菩薩。我も〳〵と極樂の往生を遂け給ひた。『挑李不レ言下自成レ蹊。』春の時分花が見ごとに咲たれは。いでや觀花に行ふと。大勢見物に集りて。路なひ處にも蹊がつく。此花さかりを見て貰ひたひと。花の方から辟はかけねとも。花が壯觀なれは。我れ一と人があつまる。辟なふして人を喚の道理。況んや阿彌陀如來の本願招喚。極樂淨土の七寶珠

○三會彌勒の三會說法なり
○逆謗の釋
○和讚に曰

林。寶の樹の花盛り。是れを我等におがませたふ思召して。『四十八願慇懃喚。』十方衆生姿れ來れと。御ねんごろに御喚びなされて下された。去るはとに此の土の菩薩。文殊普賢を初め奉り。極樂を願ふて衆生に往生を御勸めなされ。當來の彌勒菩薩は。釋尊の御ゆづりを受け給ひて。彌陀の本願を三會の曉に弘めさせられ。其後馬鳴龍樹天親等の歷々の菩薩方。みな心を西に傾け給ひて。彌陀を願ひて極樂を願はせられた。『兼爲聖人』の歷々が。衆聖も御油斷なされぬからは。『本爲凡夫』の我等。御慈悲の眞正面に中りた面々は。指しいそひで彼尊の御袖にすがらねはならぬ。逆謗と云ふは五逆謗法。五逆とは恩田に背き。福田に違し。大恩を被た父母を弑し。佛法僧の三寶に敵對する大惡人。謗法と云ふは佛法を口にかけて謗ることを手にかけて親を弑し。佛の御身より血を出すは。恐しひ罪なれとも。是れは物の道理を知ぬから造る罪僧で。いはゝ頑是なし兒輩のわるさする樣なもので猶わさとひ處があるか。誹謗正法の罪科は。悉に青表紙でも取扱ひ

○本願毀滅のともからは生盲闡提となづけたり大地微塵劫をへてなかく三塗にしづむなり

四角な字でも讀めるものが。因果撥無の邪見を發し。地獄もなし極樂もなしと。垣やぶり云ふに由て。夫を聽くものが。那人の申さるゝことなればと。太分それに加黨徒が出來て。大切の佛法をいひ冷す。其過が我身一分ですます。一盲衆盲を引て。大勢の人を地獄へ墮すに由て。親ころしより佛の御身より血を出すより。其罪か遥に重ひ。是等は永く無間地獄に入りて。大地微塵劫を經ても浮ひ出る期のなひものちやとある。夫れかこの本願不思議に値奉れは。「五逆之與十惡罪滅得レ生。謗法闡提回心皆往」。一念改悔懺悔して。我身は若る大罪人。この者ながら未來後生を助けさせ給へと。如來を頼み奉る處で。五逆も謗法も一味平等。かたおちなしに攬こひて御助けなさるゝが。阿彌陀如來本願不思議の御利益にてある。そこを「凡聖逆謗齊回入」と仰せられた。齊はひとしと訓。この齊の字にありかたひ意味が有て。若しこれを齊上の義と見る時は。上にひとしひと云ふことと上にひとしひとは。夫文殊普賢の大菩薩方。并ひに一生補處の彌勒菩薩。

○五逆云云法事讃の文なり

○齊廻入の釋

○齊上の義

さては大經十四佛國の諸大菩薩。及ひ此土の龍樹菩薩。天親菩薩などの御歴々方が。本願頼むて極樂參りをなさるゝに。在座の面々我他がやうな。在家止住の惡人凡夫。つゐに戒行持て身の行儀を一日たしなむた事もなく觀念工夫して。さはぎたつ妄念を一つ取りとゝめた覺もなく。朝は寢たひはと朝寐をし。食たひ物は飽までくひ。一生涯氣隨意氣まゝで。覺にころりと斃てしまふやうな。淺猿ひならずものが。難有いは娑婆にゐるうちは聖人凡夫雪と墨との異なれとも。淨土へ參れは一味平等の大般涅槃。かの御歴々の菩薩方と。同し覺をゐさせ下さるゝ。御恩のほとを知らせて。齊しくと御意なされた。若しこれを齊下の義と見るときは下にひとしひと云ふことて。能く〳〵聽聞して見れは。ありがたひことぢや。「淨土を莊嚴する本意。造惡不善を引導し。破戒淺智の出離。期なからんをあはれまんが爲めなり」と。元祖上人は御示なされた。阿彌陀如來の極樂世界御建立も聖人の爲ではなひぞ。造惡不善の我等を待ち受けに御成就なされた。然れ

○齊下の義

は極樂參りの正客と云ふは。罪つくりの我等なれとも。大慈が平等にましますゆへ。聖人智者も自力をすてゝ他力に縋り給へは。それを御見すてはなけれとも。正しく御慈悲の正面に當りたものは。在家止住の惡人凡夫なれは。縱令大菩薩聖人方でも。彌陀を賴むて極樂を願ひ給ふ時は。我等が領解にならはせられ。愚痴無智の者と同しやうに。我身はわろき徒らものと思ひつめて本願に縋り。凡夫女人ともろとも。肩を比へて極樂參りなさるゝを。「齊同入」と仰せられた興むかし九郎判官義經。賴朝の勘氣を受けて奥州へ落らるゝ時。主從十二人。笈を負て山伏姿にやつし。頭巾。鈴掛金剛杖をつひて。關所々々を通られたが富樫左衛門が守た。安宅の關所で見とがめられ。後に隱ふ小男の山伏。あれこそ御尋ねの判官殿なれと。殆にあやうかりし處を。武藏坊辨慶。金剛杖をふりあげて。夫の小男の山伏をさん〳〵打擲して。何國の關所でも。其方が頑がまへが判官殿に方弗とて。動ては取りとめられ。勘進修行の坊をすることの憎さよとて。したゝ

○九郎義經の因緣

○勘進修行

か打擲した。そこで關守疑ひをはらし。あれが義經ならば。大切の御主人を。家來の身として。あの如く打ちたゝきはせまひ。さて〳〵世には似た者もあるもの哉と。一杯殿て。無難に通したとある。準へて聽聞有ふ。大經の會座に於ては。「汝及十方諸天人民。一切之衆。永刼已來。展轉五道。憂畏勤苦。不可具言」と。彌勒菩薩を引かこして。凡夫の仲間へ御入れなされ。觀經の會座では。夫の韋提希夫人聖迹でこそ女なれ。本地は歴々の大菩薩。去るに由て餘の御經では。韋提大士と稱して。格別御あしらひか違てあるに。觀經の上では。「如是凡夫心想羸劣」性根くさりの五障の女人と。首くだしに御いましめなされた。彼の辨慶が主人と知りつゝ。義經を打擲した心と同し道理。金剛杖で打ちたゝき辱しめたれはこそ。安宅の關は通られた。證ある聖人たちでも。彌陀を賴むで極樂參りの時は打てをとし。凡夫仲間へつきこみにして一味平等。我身はわろき徒ものと自力をすて。若るものを御助けと。本願不思議にすがらせて。聖人凡夫もろ

東大寺の勘進なりと詐れる也、勘進とは伽藍を建つる時寄附を募るなり

○法然上人建暦二年二月廿三日弟子に與へ給ひし盟書なり

ともに。眞實報土の往生を遂けしめ給ふ。それゆへ元祖の一枚起請に。「念佛を信せん人は。たとひ一代の法をよ〳〵學すとも。一文不知の愚鈍の身になして。無智の尼入道に同じふして。御念佛候へし」と御示しなされた。祖師御開山は本地阿彌陀如來の御化身なれとも。智惠才覺を隱し給ひ愚痴無智の凡夫女人に肩をならべさせられ。愚なるこそ本願の正機なれとて。自ら愚禿親鸞と名のり給ひ。凡夫往生の御先達とならせられた。いかな歴々の菩薩聖人でも。極樂を願ひ給ふ日には。皆御身を謙遜りて。悪人凡夫と脊くらべして。本願に縋り給ふほどに。そこを「齊回入」と御意なされた。

○如衆水入海一味の釋

「如衆水入海一味」とは。百川衆流河々の水が。大海へ流れこめは。みな一味の鹹となるが如く。娑婆では上人凡夫。善人悪人。男子女人とかはりてあれとも。何れも一味の信を得たれは。淨土に於てはおしなへて。一種眞抄のたゝとひ覺を開かせて下さるゝ。

攝取心光常照護。

○攝取の釋

這の一句は凡聖逆謗ひとしく回入して。選擇の願海に歸し。信決定の身となれは。我は知らねとも。一念の時より如來の御光りの中に攝めとられ。是れ迄は阿彌陀如來とは他人ひき。疎〳〵しひ間で有たものが。信をゑた今日は。阿彌陀如來の自眷屬。一つ家内の父子兄弟の如く。常に御したしみなさるゝとある。御利益を顯はし給ふ。只今の御言にてある。攝取の攝の字はをさめると訓む。字書に「追捕也」と註して。設へは科あるものを公義から捕卒が來て。搦取れて。つれ反るこゝろがある。御開山の攝取と云ふは。にぐるものを追へて捕る意なりと御意なされたが。能くこの字註に契ふた。何なれは今日の我等はとうしてなりとも。如來の御手を離れて逃たがるものを。夫れを逃さじと光明の中に取りこめさせられ。是非々々淨土へつれて歸らせらるゝが攝の字の意。取の字はとると云ふ文字で。向にあるものを此のものにしたこゝろ。今我等凡夫を頼ひ一念の時。極樂の人衆になして下されて。如來の御手に入た處が取の字のこゝろぢや。心光と

○心光の釋

○善導大師云々 觀經疏の文なり

○常照護の釋

○江戸の町の事

云ふは心の光りと云ふこと。色光と云ふが御身の光。如來に色光心光の差別はなけれとも。照さるゝ對の衆生が。雜行雜善を修するなれば。但如來の色光の御光にのみに照らされて。心光の御利益は蒙らぬ。然るに念佛信者ばかり。此の心光の御利益にあづかる。そこを善導大師の。「衆生憶念佛佛憶念衆生」と仰せられて。阿彌陀如來は且ても暮ても。念佛行者のことを忘れ給はす。常に我等を御心に念じ下さるゝ。其御心にかけられ不斷念じ下さるゝを。攝取心光と云ふ。常照護とは。常はつねと云ふ字。つねと云ふは。雨ても晴てもかはらぬと云ふこと。「江戸にてれふれ町と云ふか有りて。片側は下駄屋。片側は草履屋。草履を賣ふ家は。天氣の好を願ひ。下駄うる家は雨天を喜ふ。とりふりに付て。向ひづから心がかはりてある。これは商賣がちがふに由てさこへたが。又世上でよう心がはりのする者を。那的はでりふりのある人ちやと云ふ。おほ方がそれで。「翻レ手爲レ雨 覆レ手雨」飛鳥川の淵瀬。秋の夜のとら。かはりやすひは人こゝろ。

○擁護の義

根から拔ことにはならぬ。しかし夫れはまことなき人間の魂ひ。今阿彌陀如來は是れに異ならせられて。一念彼尊を頼みました時。一たび御助け下されてからは。とのやうな事が有ても。御心かはりなされず。且ても暮ても晴雨なく。我等か淨土に往生して。孤行のするまで。少之も御目をはなされず。御心をそゝられ。護そたてゝ下さるゝをは。「攝取心光常照護」と仰せられた。「擁護の字は擁護とつゝひて。往生禮讃に。「稱二念禮一觀阿彌陀佛一。現世有二何功能利益一」と問て。十往生經を引せられた。其文に「若有二衆生一。念二阿彌陀佛一。願二往生一者。彼佛卽遣二廿五菩薩一擁護行者上。若行若坐。若住若臥。若晝若夜。一切時。一切處不レ令二惡鬼神得二其便一也」とある。是れはありがたひ事ぢや。念佛の行者は。阿彌陀如來二十五の菩薩をつかはされ。晝夜不斷。行者を守らせ給ふゆへ。何なる惡魔波旬も。とうも取りつきやうがなひとあることぢや。又安樂集に觀佛三昧經を引きて。翳身藥の喩を擧させられた。翳身藥とは藥の名で。此の藥を身に塗は。我體が

○波旬 或は波卑夜と云ふ魔王の名にして極惡と翻す

人の目に見へぬとある。俗に云ふ隠蓑に隠笠と同しことぢや。何なれは念佛の行者は悪魔波旬の目には見へぬ。目に見へぬは障をなすことはならぬ

○洞山和尚の故事

▽昔しもろこしの洞山和尚と云ふ。大徳の出家が有たが。一時参堂せられたれは。廊下に米が覆して有た。和尚それを見て。勿體なひ佛物を麁末にしをりてと云ふて。瞋恚をおこし。弟子を叱れたれは。目前へ何方から参りたやら。異形の物が來て和尚を三拜する。和尚心得す。何ものぞと尤められたれは。異形の者申すには。私しは土神。地中にすむ神にて候が。多年和尚の御姿を拜いたしたふ存しれとも。少の隙間もなくましますゆへ是迄本意を遂ませなんだが。只今米のこぼれたを御覽あて。一念腹立やと瞋恚をおこし給ひたゆへ。其隙間に御姿を拜みましたと云ふかと思ふと。かき消如く亡たとある。▽又書寫の性空上人。ある時旅をし給ふに。嵯峨野の邊に行きくれ給ひ。衢堂に宿なされたが。上人より先に投宿の人あり

○性空上人の因縁

と見えて。後堂にて四五人物語する音がきこへる。其中で一人の申すには

汝曹書寫の性空上人を拜ひたことがあるか。我は不思議のことで。上人の姿を拜ひた。一日河州平野三間卒都婆の邊で。雨あがりに。上人手に持ち給ふ數珠を取りおとされたが。下まで墜ぬうち。早速中に拾ひあげて。さても出かしたりと思はれた時。始めて姿を拜むだと物語したは。粉れもなひ天狗の出合で有たと見えた。此の衆中は何れも大徳の上人達。夫れでさへ折節は煩惱が起りて。其間から天魔が付入た。況んや在座の我等は。貪瞋痴慢疑の煩惱。時として間斷なく。常住不斷胸の中におこりつめなれとも。難有いは擬取心光のかくれ蓑にかくれ笠を。身に衣て下されたゆへ。何なる悪鬼悪神も。苟と一目見ることも叶はす。附託すき間はなひほどに頸に守りはかけねとも。表に札は貼ねとも。いさゝか怖氣のなひは。信心決定の身の上ぢや。▽若この護の字を覆護の義と云ふ時は。おはひ守ると云ふことて。阿母が幼兒を懐て道をゆくに。遽に時雨などに遇て。我身の濡ることはかまはす。其兒をぬらさぬやうに。袖をおはふてつれて還る。

○覆護の義

攝取の光明の懐に。如來の我等を抱せられ。淨土へつれて反らせらるゝ道すがらも。煩惱惡業の雨風がつよければ。濕さじものをと大悲の袂でおはせられて。淨土の我家へつれ反らせらるゝ。わるさする子を。目をはなさず守しても。たまゝは怪我あやまちの出來るは。さすが凡夫でゆき屆かぬ。阿彌陀如來の我等を守して下さるゝは。必らず衆生を誤らす。淨土參りに怪我あやまちの出來る氣つかひはなひ程に。ゆるりと安堵して。彼尊の御恩を喜べとて。「攝取心光常照護」とはあらはされた。

已能雖破無明闇。貪愛瞋憎之雲霧。
常覆眞實信心天。譬如日光覆雲霧。

期の文の意は念佛の行者宿善開發して。一念發起の信心を得れは。其座を去らす直に心光照護の御利益にあつかり。一期の間は。此の光明の中を住處として下さるゝ。其一念歸命の處が。世々生々の迷のわかれ。却後五年十年の餘命を持ちて長談あらふとも。夫れは極樂參りの旅道中。息のされるを相圖として。無上涅槃の果報をうる身になりゐた。そこを「已能」と仰せられた。已にと云ふ字は物こと濟てしまふたことで。聖人の御言に。「金剛心の定ると申すも。攝取不捨のゆへに申すなり」と御意なされ。又「無碍難思の日輪。恚瞋の半腹に行度する時。無明やうやく闇はれて。信心たちまちにあきらかなり」と。善知識の御勸化なされて。阿彌陀如來の參らせたひ。佛にしたひと思召す御念力の御光が。我等が無明煩惱の黑闇のやうな胸の中へさし入らせられれは。世々生々の無明の闇がさらりと晴れて。後生御助け候への一念歸命の信心があらはれた。此一念歸命の信心發起の時。已我等が無明の迷の夜は明てしまふた。生死の迷は事すむた身の上。そこを已と云ふ。能くとあるは。堪能とつゝひて。「藝由レ道賢」と何でもそれ〳〵の事を盤梅好。上手にするを能くと云ふ。餅は餅屋と。同し鋸鉋をつかへとも大工が指物屋の眞似もならす。指物屋が大工の眞似

○已能の釋
○聖人未燈鈔に曰く信心の定まると申すは攝取に預る時にて候なり

○能合云云 行卷等に出づ

○難の字の釋

もならす。夫れ〳〵の道々で。何はう黙ふても素人わさに及ばぬことがある。去れは極悪深重の凡夫女人は。三世十方の諸佛の御手にかけても。御助けは絶て叶はぬことを。阿彌陀如來は「能合二瓦礫一變成レ金。」芥堆にすてゝある石瓦を。忽ち變じて黄金となす如く。瓦礫荊棘の凡夫。瓦の片てさかな礫のやうな。三悪道の芥堆に捨らるゝ我等凡夫を。唯一念に光かゝやく佛となして下さるゝことは。偏に阿彌陀如來の願力の不思議ぢやはどに。其御利益を顯はされて。「巳能」と仰せられた。さて難は未盡の辭で。左右は左右なれともと云ふこと。喩へは日が出れは。露霜は消うちなれとも。日輪が出給ひても。直には消す。風がやめは涙はしつまりうちなれとも。風の止だあとにも涙はたつ。旭日はかゝやきながらも。猶露霜は殘りてある。なれともいかな夥しひ露霜ても。日に照されたれは是非とも消ゆる。いかに涙だつ海上も。風がおさまりたれば卒には涙もおさまる。土用があひて立秋。秋の氣になりたれとも。殘暑と云ふて結句土用の中より熱ひこともあれとも。永ふはこたへぬ。程なく冷なる。雜行すてゝ我等か後生助けさせ給へと。頼み奉る一念を相圖。御助け一定と無明の闇ははれたからは。其後煩惱妄念は起りそむなひものなれとも。土用はあひても殘暑の猶は酷ひ如く。一念の處に無明の夜は旦たれとも。穢身のあるうちは。妄念煩惱絶ずやまぬ。しかし蚊の觜さへ拔は何はう蚊行てもまふ咬れる氣遣のなひ如く。一念發起の處て。無明の毒の觜はぬけたれとも。やはり煩惱妄念の足手は動きやまず。相もかはらぬ淺間しひ凡夫なれとも。肝心無明の毒の觜かぬけたれは。往生に導りあるべからす。此儘なから目をふさぐと極樂へ參らせて下さるゝ興さて無明と云ふは。大小乘の異說があて。一概にはいはれぬが。今淨土門祖師上人の思召しを窺へは。正しく不了佛智の疑惑心。如來の本願不思議を疑ふを。無明と仰せられた。「生死家以レ疑爲二所止一」と。元祖上人も御示なされて。我等が生々世々の迷は。瞋恚の煩惱が強ひに由て夫で迷ふたとも仰

○無明の辨

○生死云云 選擇集三心章の文なり

せられず。何にしても欲が深ひに由て。夫ゆへ流轉したと御尤もなし。餘の罪障はどれほど有りても。五逆十惡謗法闡提も。同心すれは皆往とあれは。いかな罪業も阿彌陀如來の本願力を妨げるものはなひに由て。餘の罪障が邪魔に成て。生死に迷ふたとは仰せられぬが。唯一つの佛智の不思議若るいたづらものを御助けと。決定安堵の思ひなく。是ではいかい有ふぞと。我機の方に拘りて。本願の御助けを疑ふた。夫ばかりが邪魔に成りて今迄往生は滯りたが。此度宿善開發して。攝取心光の日輪。我等が胸の中にさし入らせられた時。始めて迷の夜が明けて。御助け一定あら辱やの領解に做て下されたが。已に能く無明の闇を破すと云ふもいぢや。秋の夜の長きも。やう〳〵夜あけて晝とはなりたれとも。雨天なれは雲霧が立ちおはふて。日輪の光を隱すに由て。夜且けて晝でありながら。朦々として鬱陶しひ。其を「貪愛瞋憎之雲霧」と仰せられて。貪愛といへは貪欲愛欲みな順境に依ておこる煩惱で。目に見。耳に聞くに付けて。吾氣に好たこ

○貪愛の釋

とには。必す貪欲。必す愛欲。さて此欲には目が瞑むで。物の道理が別らぬものぢや。動ていろ〳〵の仕損をする。「諸苦所因貪欲爲本」と。法華經に御說きなされて。もろ〳〵の苦みの根になるものは此の欲ぢや。現在法場に引れて。梟首の磔の火刑のと。聞くも慄しひ大阨にあふも。多くは欲から仕出すことぢや。瞋憎と云ふは是れは違境にあふて起る煩惱で。我氣に入らぬことを。見たり聞たりすると。やかてむら〳〵と腹が立て。憎や嫉しやと。首に角も生す。身に鱗は紆ねとも。心はいつしか毒蛇惡龍となる。此瞋恚の腹立から。百万の障門生ずと。さま〳〵の障りを仕出すことぢや。實時にこの貪欲瞋恚を雲霧に御たとへなされたは。夏の時分朝起きて山の根を見れは。わづか一塊の雲が。次第々々に大きふ成りて。後には一天にみち彌るやうになる。貪欲がそれぢや。最初ちよつと興る一念の欲心は纔なやうなれとも。夫が次第々々に大きふ成りて。後には止ともなひ大欲心となる。ちやうど雲のはびこる如くぢやに由て。貪欲を雲に

○瞋憎の釋

○雲霧の事

たとへ給ひた。道理こそ雲はをこるといひ。欲もをこると云ふ。且又瞋恚を霧に御たとへなされた。「霧たちのはる秋の夕暮」とよむで。霧はたつと云ふ。瞋恚の起るも腹がたつと云ふ。縁て瞋恚を霧にたとへさせられた。畫に成つても雨氣なれは。霧立ちのはり雲みちふさがりて。日輪の光りを覆ひかくせとも。「雲霧之下明無闇。」雲霧が中段に横たはりても。流石畫なれは燭は入らぬ。攝取の光明の御ひかりは。我等が胸の中。心の底までを間斷なく常に御照しなさるれとも。娑婆逗留の間は。やはり生死の雨氣の中ぢやに由て。貪瞋煩惱の雲霧が。信心の天をおはひ隔てゝ。攝取の光明の日光は。おがまねとも。往生に障はなひ。淨土參りの妨にはならぬ。何ぱう雨氣でも畫の德には燭は入らぬ。一念歸命の夜あけて後も。凡夫の雨氣が晴ぬに由て。煩惱妄念の雲霧は。胸の中に充ふさがれとも。さて〳〵若るいたづらものを御助け下さるゝ。御慈悲のはどこそ難レ有けれと。御恩喜ふ手本の闇からぬ領解になりたを。「雲霧之下明　無レ闇」と御勸化なされた。

獲レ信見敬大慶喜。

此の御文は大經下卷。東方の偈に。「聞レ法能不レ忘。見敬得大慶。即我善親友」とある。文の意を取りつゝめさせられ。我等へ御勸化なし下された。

○獲信の釋

「獲レ信」とは。經の偈頌では「聞レ法能不レ忘」とある一句を。獲信の二字に御つゝめなされた。青年時分は相應に記憶も有るが。年よりて只今は。手に持た物さへ忘れるやうな性根なしに成りた。法義の御座へ出てゐる間は。難レ有ふ思ふて聽聞して居れとも。眞の籠耳で。聞ているうちばかり。座を起とさらりと忘れて仕舞ふ。論の中にこれを膝惠の補特伽羅と名け給ひて。飯くふ時膝の上に椀を置たやうなもの何ぞ急く用があて座を起つと汁も飯もみな覆てしまふ。今が其の如く。法座に在りて聽聞のうちは。耳に持ちてあるやうなれとも。座を起つとみな忘れて仕舞ふ。夫れに「聞レ法能不レ忘」と仰せらるゝ御經文は。此の方の胸には合ぬが。法を聞て能く忘

○補特伽羅此に數取趣と云ふ有情の事なり

○如來云云正像末和讃の文なり

れこそすれ。「能不レ忘」とはいはれぬが。是れはいかゝと云ふに。其を御開山の御はときなされたが今の文で。「聞レ法能不レ忘」とは。強ち耳だもちの好ことを仰せらるゝではなひ。文々句々のことはりは。何を聽聞しても筒ぬかしで。皆わすれて仕舞ともも。そこに御かまひはないが。「如來二種の回向を。深く信するひとはみな。等正覺にいたるゆへ。憶念の心はたえぬなり。」斯る取り得のなひものを。やがて參らせて下さるゝことの難レ有やと思ふ一念は。降ても光ても相かはらす。歴緣對境。うれしひこと。悲しひこと。苦るしひこと。樂なこと。向ふ境界はいろ〳〵かはれとも。何なりとも手がゝりにして。御助けの御恩を思ひ出して。佛恩報謝の稱名相續。いかな性根なしでも。是ばかりは忘れぬやうになし下されたを。御經には「聞レ法能不レ忘」と說かせられ。祖師上人は「忘れぬとはたゝ信心決定のこと」と御示下された。眞見敬とは見てうやまふ。是れに目に見ると心に見ることの異が有りて。先つ目に見て敬ふ方をいへは。陳師道が思亭記に「凡

○見敬の釋

○兼好吉田の兼好として隱遁の僧なり徒然草を著はす

目之所レ視而思從レ之。視二千才一則思レ慕。視二刀鋸一思レ懼。視二第家一則思レ安。」と書いた。鎗長刀の白刃を見れはやがて切りあひのことを思ひ出す。鑿や鉞などが旁午てあれは。足を切ふか怪我をせふかと氣つかひに思ひ。奇麗な家づくりを見れは。此家に栖したらは好からふと羨む心がをこる。是は目に其物を見るから思ひが隨ふて出てくる。手次の寺へ用事有りて。門の梱を踰れは。まう稱名が浮んてくる。況んや先つ御禮申さふと御堂へ參り。如來聖人の御面貌に向ひ奉れは。さて〳〵私を御助け下された。御苦勞の御姿か難レ有やと。目に尊容を拜むに就けては。いとゝ御敬ひの心がをこりうちゝゝや。夫れを「見敬」と御意なされた。是れは目に見ての敬ひ。次に心に見ると云ふは。先德の「得二法滋味一歡」と示され。兼好がつれ〴〵に。「月花はさのみ目にて見るものかは。雨に向ふて月を戀たれこめて春のゆくへを知らぬも。猶あはれに情ふかし」と云ふたなどは心の内に想像て見ることぢや。即令彼尊の御姿には向はすとも。衣著蒲團

ひつ被ひて臥なからも御慈悲のありかたさを思ひ出して。さても〳〵五劫思惟の御苦勞も。兆載永劫の御修行も。この下根放逸の私を御助け下されふ爲でありしものをと。如來の御恩が思ひしられて。難ㇾ有や。たふとやと御敬ひ申す。是は心に見て敬ふと云ふものぢや。そこを兼て「獲ㇾ信見敬」と御意なされた。■「大慶喜」とあるは。信を得たれはおのづから慶喜のよろこびは顯はれうちゝや。併し大に喜ぶと御意なさるゝに付て。仕官奉公の身が立身出世の時喜んだり。商する身が。思ひ入れが合ふて。大利をした時の嬉ひはとには念もなひ。其百分一も喜べぬが。是は何ぞと。孰も喜はれぬことを歎きて有ふが。■喩へは箸の捨りた大病人が。國手な醫者にかゝりて。一服の藥をのむが相圖。一時か半時の間に。湯づけをくはうといひ出して。末の盞三杯。さら〳〵と喰た。家内は喜んで七日も十日も絶食の病人が。藥の即効で。今の食は一廉のことぢや。大きな食ぢやと。取りはやして嬉しがるで有ふ。平生無事な時は。夫はとは綫な食。點心にも足ねとも。病人にしては大きな食ぢや。在座の面々我等か身は無始より以來無明業障の大病にやみ疲れて。菩提心の箸のすたりた者が。うす〳〵ながらも御助け一定。南無阿彌陀佛と。喜びの一念が胸の内にきさしたは煩惱業障の大病人にしては。さりとては大きな喜ひぢやと。彼尊には深く御滿足なされて下さるゝ。「若人於ㇾ此慈心歡喜我代ニ此人一歡」と異譯の御經にも說ひて。我等が往生を安堵して喜ふ機に成つたを。如來は我等に代らせられ。大悲の眉を開き給ひ。百千万倍喜んて下さるゝとある。若る廣大の御寵愛にあづかるは。信心決定の身のうへ。

即横超絶五惡趣。

斯の一句の偈頌は。大經の下卷に。「必得ニ超絶去一往ニ生安養國一横截ニ五惡趣一々々自然閉」と御說きなされた。經文の意を所據として。御結ひなされた只今の偈文にてある。御經には。必ず超絶し去るとあり。此偈頌には。「即横に」と仰せられて。御經の必すと云ふ文字を。すなはちと云ふ即の

○大慶喜の釋

○病人の食事の喩

○大阿陀經に曰く可得超絶去往生阿陀佛國横截五惡道於自然閉塞

○即横の釋

字に易て。ます〳〵易行他力の迅速道理を御示なされた。必と云ふ字を。「金剛心成就貌」と聖人御釋なされたれは。造悪不善の取得もなひ我等凡夫が。願力不思議で。御助けは一定ぞと。胸をすゑた處が必すと云ふもの。此の一念の信を決定した當體に。其座を去らず。そこに居ながら極樂參りの定ると云ふが。「即横超絶」の即の字。すなはちと云ふ字の意ぢや。「掬レ水月在レ手。」水を掬ふて月に向へは。遥か天上の月が我手の中の水に宿る後生御助け候へと。一念の信心の水を以て向ふたれは。極樂參りの月影はいつの間にか我身の德に成つた。そこを即ちと仰せられた。されば必すと云ふも。即ちと云ふも。どちらも他力不思議の手ばしかひ御はたらきを御しらせ下さるゝ御言ぢや。夫れて聖人又の御意に。「即ちと云ふは念を隔てず。時をへたてす。日を隔てさる義なり」と仰せられて。往生の一段を今日頼みこひて。明日埒があくの。朝頼まして暮に極めて下さるゝと云ふ樣な。手のびのすることではなひ。頼むてから助りたやら。助りてから頼ひ

○聖人一多證文に曰く即はすなはちといふ時をへたてず日をへたてす云云

だやら。間に髪を入れす。我後生助け給への一念が。初めて胸にさすす處か。即ち御助けにあつかる場處。其はやわさを知らせ給ふが。此の即の字の心。横の字はよこさまと訓せて。竪に對すること。總して物には縱横が有るか。生死の迷を離れて成佛するにも。縱と横とがある。其縱の成佛と云ふは。聖道門八万四千の教。固より漸頓權實の差別はあれとも。是れみな斷惑證理の内を出ことはならぬ。去るに由て凡夫の初心からふみ出して佛果の極位に至る迄が。大底のことではなひ。然るに今は一念の信心ばかりで。横さまに生死の迷を飛こゑ。三界の流轉は今生かぎり。次の生は直に無上涅槃の難レ有いさとりの身となし下さるゝが他力の不思議。これを御經に横にと御説きなされた。朱子が孟子の註に。「横者不レ順レ理也」と書て算盤の桁をはつれ。道理の前にちがふたことを横と云ふ。されば今我等が身は。どこへ出しても。ゆくさきは三悪道。臨終屬纊の時は。牛頭馬頭阿防羅刹の異類異形の獄卒に取りまかれ。火の車の迎を受けて。熱やかなし

○銘文に曰く横は竪に對する言葉なり超は迂に對する言葉なり竪と迂とは自力聖道の意なり横と超とは他力眞宗の本意なり

○阿防羅刹

此に惡鬼と云ふ

や怖畏やと。狂ひ死に死んで仕舞ふて。多百千劫永々の責苦を受ねはならぬ。地獄は一定栖家ぞかしと。直うちの定りた身が。ありかたひは此度宿善開發して。如來の御慈悲に縋るばかりで。無漏清淨の眞實報土に往生して。彌陀同體の果報をうるとは。道理つめでは理會がゆかす。一代佛敎の算盤の表をはづれ。善惡因果の癈立。理屈だてはさらりと片づけて置いて箇樣の惡人に未來極樂參りを安堵させて下さるゝと云ふは。外に双て例のあることではない。心も言も及はれぬ。彌陀超世の御本願。若る不思議の神力を。

○超絶の釋

横に五惡趣を超絶するとは御勸化なされた。超の字はこゐると云ふ文字。三大阿僧祇の永の年月かゝりて修行することを。才た南無の一念に飛こゐさせて下された。そこが超の字のこゝろ。絶はきりたつと云ふこと。我等が三界流涙の迷の根も蔓も。賴む一念にさつはりと切りて下された。其が絶の字のこゝろ。五惡趣とあるは。地獄。餓鬼。畜生。修羅。人間。天上。これで六趣になれとも。其中修羅は通力威德のある方からは天にをさめ。鬪諍の苦みのある方からは地獄に攝める。夫ゆへ開いた時は六趣なれとも。合せた時は五惡趣で。此の内に修羅道はこもりてある。人間や天上は果報が勝れたに由て。惡趣とはいはれまひがと云ふに。極樂淨土の覺の目からながむれは。人間天上ともに惡趣には極りた。全體が夢幻泡影。夢の如く幻の如く。水の上の泡の如く。鏡にうつる影の如く。人間一生須臾の間に。怖ひ事にもあひ。悲ひ目にもあひ。さま〳〵に心を痛め身を苦めて。つゐ一生はつら〳〵と立てしまふ。「世の中は何にたとへしあさはらけ。漕ゆく舟のあとの白波。」好事も。わるひことも。濟てしまへは皆一床の夢と消ゆく。頼みすくなひ世の分野。なか〳〵善趣とはいはれぬ地獄餓鬼畜生と同し迷の仲間なれは。人間天上迄をひつくるめて五惡趣と云ふ。然るにありがたひは。此の一念の信を得れは。三界廿五有の迷の口々は。他力の不思議で自然と閉ふさひで下され。通達善趣門と。極樂淨土の東門開けて待ち受け下さるゝはとに。當來たのもしひは信心喜ふ同行の

身のうへ。

一切善惡凡夫人。聞信如來弘誓願。
佛言廣大勝解者。是人名分陀梨華。

○一切の釋

初の一句は善導大師觀經の疏に。「一切善惡凡夫得生者」とある釋文の語勢に本づかせられた。一切と云ふは。竪には三世。横には十方。彌陀の本願は對機かまはす處きらはず。廣く十方衆生と御誓ひなされた。其十方衆生の中には。證ある聖人もあり。迷深ひ凡夫もあり。一人も殘るものはなひ併なから「本爲凡夫」。兼爲聖人」。本が凡夫の爲めとおこし給ふ御本願ぢやに由て。聖人は否と取りのけはなされねとも。正ふ御慈悲の正面にあたるものは迷の凡夫ぢやっ其凡夫の中にも。善凡夫あり惡凡夫あり。同し凡夫とはいひなから。天性が正直で。或は出家修道の知識高僧もあり。首も剃ず身に袈裟もかけす。やはり在家てありなからも。惡を愼み善根を好ものもある。是等は同し凡夫てもも。善凡夫と云ふものぢや。さて在座の面

○善惡凡夫人

○八難
生在地獄、
生在餓鬼、
生在畜生、
生北鬱單越、
生長壽天、
聾盲瘖瘂、
世智辨聰、
佛前佛後、

々。其善惡の二つの中では。善凡夫か惡凡夫かと尋ねた時。どうも我等を善凡夫とはいはれまひ。念々歩々に思ひと思ふこと。三途八難の業。寐ても寤ても案じと案ずることは。六趣四生の繫業。元朝から歳除まで。一年三百六十日の間。心に思ふこと口に云ふこと身になすわさ。何から箇からみな三惡道の業因を。且暮の事業にして居るが銘々の身の上。すれは凡夫の中で惡凡夫と云ふは我人がことぢや。然るに今彌陀の御本願には其善凡夫惡凡夫を押くるめて。願力不思議を以て。眞實報土へ參らせて下さるゝはどに。證ある聖人方は格別。一切善惡の凡夫女人は。打ちかたふひて如來弘誓願を聞信せよと御勸めなされた願弘誓願を聞信するとは。我身は何に罪深く。五逆十惡。五障三從。取るところもなひ大惡人なれとも。聞さうるに付て歡喜の一念治定すと。如來の御本願を聽聞して。さては若る淺間しひ私的の御苦勞てありしものを難有やと。やがて大悲の御袖にすがり。助け給へと一念無疑になりた處が。弘誓願を聞信したる姿ぢや。願次

○聞信如來弘誓願の釋

○一多證文

に曰くといふは本願をきゝて疑ふ心なきを聞といふなり

○佛言廣大勝解者の釋

○證眞法印か事

の御言に『佛言廣大勝解者』とは。是れは奥譯の大阿彌陀經に說けてある念佛の信者を廣大勝解の者ぢやと。如來の御はめなされた。勝解と云ふはすくれたものしりと云ふこと。彼尊の御慈悲を信する對杭を見れは。但安愚痴の尼入道。讀す書すの青兒同前のものを。如來の金口から。廣大な識者ぢやと。嘉譽なされて下さるゝは。身に取りて大慶といはふか。此上もなひ難有い仕合せぢや。爾在昔。叡山の證眞法印と云ふは。古今に珍しひ大學匠で有りた。串柿を持ちて叡山四明の洞の中へ入り。串柿を食物として學問をせられたが。『作二三大部私記一廿餘年更不レ知二源平戰一』其時分源氏と平家との合戰で。天下大亂に及んたれとも。證眞法印は一人かの洞穴に隱れて。三大部の私記をつくり。世の亂れたことを夢にも知らすに御座りた。夫はと上根な人で有たはどに。日本將來の五千三百四十八卷の御經を。くりかへし〳〵十六遍まで見られた。つね〳〵心に思はるゝは。我か天台宗の開山智者大師は一切經を十五遍繰せられたに。我は十六遍に及んだれは。大師にまさることと一遍と。心の中に慢心をおこされたが。或夜机に向ひ學問して御座る處へ。何方ともなく一の殊勝な老僧現はれ來らせられ。證眞法印に向ふての給ふは。我はもろこし天台の智者大師なり。汝一切經を十六遍讀んて。開山に一遍まさりたと。心の中に自慢すれとも。向後其慢心を止よ。汝が十六返は。我一返の力にも及はぬと仰せられた。其時證眞肝をつぶし恐れ入て。さて〳〵誤りはてましたと。頭をさげて懺悔いたされたが。其間にかの老僧は。かき消すごとく失給ひた。今に至りて叡山の華王院に。天台影向の間と云ふが其舊跡ぢや。學文の智惠も段々のあることぢや。證眞法印の十六遍は。天台大師の一遍の智惠には及はぬとある。時に其天台大師は。凡夫で有たか菩薩で有たか。位は何にと尋ねてみれは。觀行五品の位と云ふて。菩薩どころではなひ。猶凡夫の土氣が離れぬ。夫てさへ智者大師の御目からは。證眞法印を小僧あしらひに成れた斯見た時は修行功つもり。次第々々に位を登り給ふはど。菩薩の御智惠は

勝れ給ふことゝ見えた。天台の弘決に。「初地不レ知二地擧足下足一」とありて。初地の菩薩が二地の菩薩を望み給ふ時。纔か一地のちがひで。二地の境界一向計しり給ふことがならぬとある。然れは五十二位の階級を昇らせられ。妙覺の證りを開き給ひた佛は一切種智を御成就なされて。夫の地上の大菩薩も。佛の御目からは小僧あしらひ。矧て未た菩薩の位をふまぬ天台大師の御智恵學問も。如來の御眸にかけては乞子に一杯の智恵とも思召すまひ。共三世了達。四智圓妙の佛が。愚痴無智の尼入道の御助けの御恩うれしやの信心喜ふ心底を御覽なされて。さても廣大な智者ぢやと。御はめ言を下さるゝは。何んと難レ有い仕合ではなひか。猶其うへに。「是人名二分陀梨華一」と御意なされた。「分陀梨華」と云ふは。大日經の疏に。「此翻二白蓮華一」と有りて。蓮華の中でも白蓮の花と聞えたが。夫もつい尋常の白蓮華のことではなひ。天竺でも甚た希大切な花ぢやに出て。唐では猶大切な。善導大師の「此花相傳名二蔡花一是」と御意なされて。昔しもろこし蔡

○芬陀梨華の釋

と云ふ國に。この花が一度咲たといひ傳へた。それほど希大切な白蓮華。しかるに祖師上人の御勸化を聽聞して。御助けは一定の覺悟に本づき。且暮御恩を喜ぶ身は。唐にも希大切な。白蓮の花に喩へて下された此美稱を我身にえたと思ふたらは。譬は譏のもとひ。人にはめらるゝは術なひ。如來の御はめ言をえたからは。今迄は何と有ふとも。せめては御冥見に慚入りて。惡い根性も御慈悲から氣を付けて慎むがよし。身持ち心持ちせめては如來聖人への御奉公と心得て。隨分成るたけは慎むて。一期の間は無瑾に御恩を喜はるゝが肝要。

彌陀佛本願念佛。　邪見憍慢惡衆生。
信樂受持甚爲難。　難中之難無過斯。

這の御文は大無量壽經下卷の偈頌と。同しく流通分の文とを取り合せての御示しぢや。凡そ祖師上人御一代の御化導を約めて見れは勸誡の二つより外はなひ。勸はすゝめ誡はいましめ。親の子を育てるにも。誘たり叱たり

○偈頌東方の偈なり

いろ〳〵する如く。今祖師上人御門下の面々を。骨肉の子の如く思召れてさま〳〵に手をかへて御養育なし下されたれはこそ。昔しは邪見憍慢の悪衆生と名がつひて。三悪道の下づみになるへき身が。今は善男子善女人と呼で下さるゝ樣になりたは。實に無根の栴檀樹。枯木に花の咲た心地。その上は「遠慶ニ宿縁一。」世々生々御手まはしのほどを思ふて。難レ有くよろこばねばならぬ。喩へは世間で父が子を折檻するとて。豚兒憎ひ奴の勘當するぞ。此家には置ぬぞと。嚴ふ叱るも。實は跡をつがせたひ慈悲のあまり。祖師上人今この御勸化もそれと同し思召して。正信念佛偈。上來大經の意に依りて。本願の頼母しさ。御慈悲のありかたひ底をつくして。御勸化遊はされ。結の處になりて。邪見憍慢のわる根性をなをせとて。「難中之難無過斯難。」その性根を改めねは信はなられぬ。此信心を取りはつすと。無間地獄に墮在するそとの御叱ぢや。「彌陀佛本願念佛」とは。「各別發願各化ニ衆生一」と。諸佛各々本願を立て給ふ中にも。十住論の易行品十佛章に

○御本書に曰く　弘誓強縁多生難値、眞實淨信億劫難獲　遇獲ニ行信一遠慶ニ宿縁一

○彌陀佛本願念佛の釋

一切衆生。其の佛の名號を稱ひて。不退位に至ることを御說きなされたれとも。諸佛の御本願は。多くは現世の厄難を救ふて。其人を安穩ならしめてやらふと。後生のことは次にして。指當りて素人好のする此の世のことを誓ひ給ふに由て。邪見憍慢等のものも口好よひほどに。信じもする稱ひもするが。彌陀佛の本願念佛は。夫とは異せられ。現世はたかで夢幻の境界。善ても惡ふても。是非一度は捐て去ねはならぬ。「妻子珍寶及王位。臨命終時不隨者。」「されは死出の山路のすひ。三途の大河をは我れひとりてそゆきなんずれ。」此の世をすてゝ後の世こそ一大事なれと。法藏菩薩四十八の大願の中に。一句一字も現世のことを誓ひ給はす。極悪深重の凡夫女人を。一念に成佛させて。未來永劫大安樂の身としてやりたひと。五劫に思惟し永劫に修行して。南無阿彌陀佛の本願を御成就なされた。しかしなから此本願の念佛は。邪見や憍慢の悪衆生は。御尤と御受申して。己れを忘れて信ずることは。去りとては成にくひぞとあるこゝろぢや。時に其

○妻子云云大集經の文なり

○されは云云寶章一帖十一通の文なり

○邪見の釋

邪見と云ふは。撥無因果の人と云ふて。過去もなければ未來の猶のこと。すれは罪を造りて地獄へおちるの。念佛申して極樂へ生るゝなど云ふことは皆虛ぢや。畢竟この身は今生ぎりで。死ねは體は土となり。魂は天に歸して。青天白日。一生切りで。さらりと算用は濟てしまふなどゝ。邪師。邪教。邪思惟。わるひ師匠に教ゆこまれたり。亦は猾狡ひ自己の料簡で思ひ定めて。其心底が凝かたまりたを邪見と云ふ。是が天竺に限らす。漢土にも日本にも卓山にある。支那では三武一韓と云ふて。代々の帝にも佛法きらひがあり。

○韓退之が事

又韓退之と云ふは。聞ゆる學者で有りたれとも。甚た佛法を謗り貶た。其現罰にや。潮州と云ふ處へ謫にあふて。大きに難儀をしたが。併し謗法のものは。法を識た罪に由りて。一旦無間地獄に墮在すれとも。逆緣なから佛法を耳にも觸れ。口にかけ〻ぶ御緣に成りて。死んて一旦地獄にをち。一刧の責苦を受けて。其業を果してしまへは。後に人間に生れ。佛法に立ち入りて遂には成佛する時節があると。善住意天子經

にも御演說なされたが。いかさま此韓退之も其左遷に遇たか。結句御緣に成りて。配處に於て大顛和尙と云ふ。禪宗の大德にあふて。後にはありがたひ人になられた。いづれ未來はなひ地獄極樂もみな虛と合點した邪見の惡衆生は。指あたりて信心は得られぬ筈ぢや。

○橋慢の釋

次に橋慢と云ふは。是れ亦十煩惱の一つで。凡夫の身は我も人も。この橋慢が有りて。兎角我を善ものと理會し。何につけても己が〳〵と云ふ癖が止ぬ。是れからして親子の間にも申し分が出來たり。兄弟は他人の初めと同し親の血を分て生れなから。他人に劣るやうになり。夫婦の間は本か他人ぢやに由て。いさゝかのいひ分から事破れて。わかれて仕舞ふもあり。互に橋慢心が止ぬから。一軒の家も治らぬ。家ばかりでなひ。大きふいへは天下國家の騷動も。多くはこの橋慢心が本になる。時に橋の字は自ら我をよひと自慢する方。慢の字は人を下目に見をろす方ぢや。若云ふたらは。私は我をよひとも存せす。固より無調法ものなれは。他を啤睨など云ふことは。曾て御座らぬと

○十煩惱
貪瞋痴慢疑の五鈍と身見邊見邪見見取見戒禁取見の五利なり

○二種信心
二種深心散善義の文なり

云ふ人も有ふが。慢にもさま〳〵あて油斷ならぬ。何にも已と云ふものが先立つは。みな憍慢ぢや。此の憍慢の衆生は信が得にくひと御意なされたが御尤なことぢや。他力を信する行者は。苟且とでも己を先たてゝはならぬ。夫ゆへ「一度他力信心のことはりを承りしより以來。全く私しなし」と仰せられ。又は「信する心も念する心も。みな阿彌陀如來の御方便よりおこさしむるものなりと思ふへし」と。御文の御勸化なれは。此度往生の一段に付ては。皆他力の御回向で。露ちりはども此方の物はなひ。殊に經には「謙敬聞奉行」と說かせられ。釋には二種の信心を敬ひて。我身を「無有出離之緣」のいたづらものと。見かぎりつめよと。平生の御すゝめ。道理こそあれ。晩食肉に當つ何のかのと菜好するは。はつこり飢ふなひから一日二日も物くはずに居たらは。菜がなくと飛つくやうに有ふ。冬の時分湯に入るも夫れぢや。火燵にでもあたり。體が温とまりて有ては。湯に入りても快ふ思はぬ。寒切りた體で入れば。今日の寒をわすれたと云ふて快

○印度西天の釋
○論家の釋

然。如來を賴むも同しことと。內に憍慢の心が有て。我身を人らしふ思ふて居ては。如來の御恩が夫れほど難レ有ふなひ。我身はわろき徒ものと思ひしりたれは。斯る惡人を御見すてなふ助け下さるゝ。御慈悲のほどこそたふとけれと。身にしみわたりて廣大の御恩がありがたふなる。

印度西天之論家。中夏日域之高僧。
顯大聖興世正意。明如來本誓應機。

上來は大經に依らせられて。彌陀の因位。法藏菩薩のその昔しより。衆生の爲めに御辛勞ありて。南無阿彌陀佛の本願を御成就なされ。罪業深重の徒ものを漏さす助け給ふありかたひ謂を御のべなされ。是よりしては。彌陀の本願を說き給ふが。釋尊出世の御本意たるひね。三朝世々の高僧等御相承あつて。末の世の我等へ他力の御安心を御すゝめ下されたる趣を知らせ給ふ。印度西天とは共に天竺のこと。論家とは論をつくり給ふ御家。龍樹。天親二菩薩のこと。中夏日域とは。中夏はもろこし。日域は日本。曇

○中夏日域の釋

○大經天親曇鸞等の釋論

○觀經善導等の釋論也

○大聖の釋

○興世正意の釋

鸞。道綽。善導の三師は。もろこしへの御出世。源信僧都。法然上人は。我朝にあらはれ給ふ。そこを御傳文に。「忝くかの三國の祖師。各々この一宗を興行す」と。祖師上人平太郎へ御示しなされて。七高僧列祖も。時機を鑒み給ひて。大經から御すゝめなさるゝもあり。觀經から誘ひ給ふもありて。入口は違ふやうなれとも。詮ずるところか一向專念無量壽佛。雜行すてゝ彌陀を賴めとある。唯一線路の御安心を御傳へなされたを。「顯二大聖興世正意一。明二如來本誓應一レ機」と御意なされた。大聖は釋迦牟尼如來のこと。興世の正意とは。釋尊この世に御出現なされた御本意のこと。世尊は何を本意とし給ふぞといへは。凡そ一代大小權實。漸頓半滿。いろ〳〵さま〳〵に法を說きひらき給ひたれとも。夫は且ら〳〵機緣の至るを待ち給ふ間。默ても居られすと。聖道權假の方便。種々の法を說かせられたが。其自力難行かす〳〵の敎は。全く世尊の御本意てはなひ。如來の御本意と云ふは。「光二闡道敎一欲下拯二群萌一惠以中眞實之利上。」彌陀の本願。南無阿彌

○行此難事阿彌陀經の文なり

○愚禿云云御傳鈔の文なり

○如來本誓の釋

陀佛を說きて。十方衆生殘るものなく。殊に在家止住の惡人凡夫を。阿彌陀如來の御手にわたしたひと思召す御念願。そればかりに「行二此難事一。」いろ〳〵の御苦勞をきはめられ。釋迦牟尼如來と名のりて。此世に御出現なされたことぢや。處で三朝世々の七高僧。かはる〳〵あらはれ給ひ。如來出世の本意。凡夫往生の捷徑を。ねんころに御相承あられたを。當流御開山の受けつたへさせられ。「愚禿すゝむるところ更に私なし」と。少しも彼方の御わたくしを雜せ給はす。七高僧御相傳のありのまゝを。末の世の御門下。近くは御座の面々へ御勸化なし下された「顯二明二如來本誓應一レ機」とは。如來は阿彌陀如來。本誓とは本弘誓願。十方衆生と手ひろひ御ちかひのこと。此の廣い御ちかひのあるので。我等が往生は一定ぢや。欲か深ひとて往生をあやぶむな。欲の深ひも十方衆生の內。腹がたつとて往生に畏縮すな。腹の立つのも十方衆生の內。喩へは人千人と云ふ中て。一個缺たぐらゐは何てもなひやうなれとも。一個かけると跡が九百九十九人にな

りて。千人の名かなひ。如來の御本願も其如く。何なるものも御もらしなひ處て十方衆生。若し一人でも御助けにもれる者があれは。十方衆生の御言かたゝぬ然るにありかたひは。何なる罪業かゝき惡人女人も。後生御助けと頼みまするはかりで。必らず衆生を誤まらす一個も御もらしなふ御助け下さるゝので。十方衆生の本願は御成就なされた。十方衆生の本願が御成就ぢやに由て。南無阿彌陀佛とはならせられた。そこを思へは頼母しひ罪の深ひにつけ障の重ひにつけ。さても〳〵難ゝ有や。若るいたづらものも十方衆生の其中の一個。もし私がもれましたらは。彼尊は御成佛なされまひに。極惡最下の私しまでも御もらしなひ手廣ひ御本願ゆへに。南無阿彌陀佛とはならせられたものをと思へは。十方衆生の廣ひ御誓ひを聞くに付ても。いよ〳〵極樂參りに疑ひをはれねはならぬ。○應機とは機は所被の機如來の御助けを蒙る衆生のこと。『佛慈平等不ゝ益ニ無機一。』火は能く物を燒けとも。さはらねは燒けす。水は能く物をうるはせとも觸ねは濡れぬ。

○十方衆生の本願とは第十八願なり

○應機の釋

佛の御慈悲は平等なれとも。頼む氣のなひものは何な如來も御力及ひ給はぬ。そこを『無宿善の機は力及はす』と仰せられた。然るに宿善の機あて他力信心と云ふことを今すでに得たり。我等世々生々の間。三惡道の下づみになりて。苦しみに暇なく。何しに宿善ところではあるまひものを。如來の往相還相の回向を以て。恤み育てゝ下されたゆへ。思はす我身の宿善と成りて。今は本願にめぐりあひ。御助け候へと彼尊を頼む一念の信心の萌しあらはるゝやうになりたは。實に不可思議の御緣。そこを『本願應レ機』と仰せられた。應は相應。藥の病に相應する如くぢや。相應せぬ藥は何ほど服ても利目が見えぬ。若し病に的中する藥なれは。一服のめは忽ち本腹する。是れが相應ぢや。去れは我等は世々生々の間。無明業障の大病にとりあひ。三恒河沙の諸佛の出世のみもとに於て。濟度利生の御療治にもあづかりたれとも。難行自力の藥は我等か根機に相かなはすして。曠劫流轉の長の煩ひ明る目のなひ惡人凡夫が。不思議に此度聖人の御化導にめぐり

○和讃に曰く三恒河沙の諸佛の出世のみもとにありし

とき、大菩提心おこせども、自力かなはて流轉せり

○御文二帖五通なり

あひ。彼方の御勸めに依て。南無阿彌陀佛の御藥を頂かせて下されたれは忝なや。往生一定のかしら煎じて。忽ち無明淵源の病を本復させて下さるゝ夫に就て御文に『當時はさらに眞實信心を。うつくしくにたる人いたりて希なりと覺ゆるなり。それはいかんぞなれは。彌陀如來の本願の我等が爲めに相應したるたふとさのはとも。身にはおはへさるかゆへに。いつも信心の一とはりを我心得がはにて。何ことを聽聞するにも其ことゝはかり思ひて。耳へもしか〳〵とも入らす。たゞ人さねばかりの體たらく也と見にたり』と御意なされたは。坊主へ對しての御呵りなれとも。在家の衆は猶以てのことぢや。代々御宗旨の御ながれを汲で。相應に寺參りもする。同行出合せぬてもなけれとも。心の內はおはやう無沙汰。『習ひにて。かたることばゝ似たれとも。また夜ふかなる[illegible]なりけり』肝心。如來の御本願の我身に相應した難有いわけを知らす。法談勸化を聽聞するにも。本の馬の耳に風。ろ〳〵領解の出來ぬは。去りとては淺間しひゝと御嗟きなさ

れた。何を聞ても聽わけなひものを比へて。馬の耳に風ぢやといへとも。

○古に曰く胡馬嘶二北風一越鳥巢二南枝一

『胡馬嘶二北風一』と云ふて胡國と云ふ北の狄から渡た馬は北風の吹くことにいなゝき嘶とある。すれは馬ぢやと云ふて風が耳に入らぬでもなひ。剩へ故郷の風を知りて懷しがるとある。果報つたなひ畜生でさへ。夫ほどの奇特があるに。萬物の靈といはるゝ人間と生れ。殊には代々御開山の御流れをくむ御門下と生れなから。明暮聽聞させて下さるゝ御勸化が耳へ入らす極樂がなつかしからす。あつたら一生を空〳〵すごし復候珍しからぬ三惡道へ新參がへりせふならは。何と殘念至極ではあるまひ歟。

○釋迦如來楞伽山の釋

釋迦如來楞伽山。爲衆告命南天竺。
龍樹大士出於世。悉能確破有無見。

這の御文は七高僧の首。龍樹菩薩の御德を讚歎し給ふ。乃ち楞伽經の說に依せられて。夫の天竺國南海の中に。楞伽山と云ふ山が有りて。其高さと五百由旬とある。一由旬十六里にしても。其を五百合せたものなれは。

○爲衆告命南天竺の釋

言も仰山な高い山ぢや。而も其山が海中からまつすぐに立て。屏風をたてた如く。金銀等の衆寶合成して。日月と俱に光りかゝやく山なれとも。何分險阻して少も足がゝりがなし。其くせ羅刹夜叉さまゝ〳〵ふそろしひ者共が樓てゐる。去るはとに昔しより誰が一人其山へ登りたものはなひ。然る處大聖釋迦牟尼如來。大悪菩薩と云ふを初め。六通具足の御弟子等もろとも。鳥の飛ふごとく虚空を踏で。かの山の頂に集らせられ。其時如來の御說法なされたを楞伽經と申す。そこを今の文に「釋迦如來楞伽山」と仰せられた。𠮷「爲ゝ衆告命南天竺」とは。かの楞伽經に大悪菩薩一百八の義を御たづねなされた中に。佛御入滅なされて當來の世には。何なる人有りてか佛の正法を傳へて。佛法守護仕りませふやと御尋ねなされた。爾時世尊の御對に。我入滅の後南天竺國中に。龍樹菩薩と云ふ大德の出家があらはれて。外道の邪見を破斥し。佛法の大法幢をたて。其位は初歡喜地に住し。大乘無上の念佛三昧を說いて。一切衆生をすゝめ。阿彌陀如來の淨土安樂

○龍樹菩薩の因緣

○千裁庭園のこと也

世界へ往生するで有ふぞと。宿て佛の未來記をなされたが。果して其御意にたがはす。佛滅後七百年に當つて。龍樹菩薩南天竺に生れ出させられた𠮷何龍樹菩薩と申すなれは。此菩薩胎内に御座なさるゝ時。阿母千裁に遊ひ給ひ。樹の本て心易ふ御誕生なされたゆへ。御名に樹の字がつき。御出家の後。御德がすぐれ給ひたゆへ。龍王の請待に由て。龍宮界へ御出なされた。其時かの龍宮に於て。無生忍をさとり得給ふはとに。即ち龍の字をつけて。龍樹と稱し奉る。大士とは菩薩のこと。初歡喜地と云ふ御位にすゝませられ。百佛世界に分身作佛し給ふ。自由自在の御身のうへぢや。時に彼聖は凡夫からくみあけて。やう〳〵そこまてすゝませられたことかといへは。思ひの外本地をうかゝへは。妙雲相佛ともいひ。亦は遍覆初生如來とも申して。果上の佛にて在せとも。本師阿彌陀如來の還相回向の御役前にあたらせられ。龍樹菩薩と名のり給ひて易行他力の本願を說せられ。末の世の我等を彌陀の淨土へ御みち引下された𠮷「悉能摧破有無見」と

○悉能摧破

有無見の釋
○斷常心識は一生限りに滅すると思ふ者と我は常に存すると思ふ者
○俱生分別本來備へたる煩惱と計度する煩惱

は。有無は斷常の二見。これに俱生分別のかはりが有て。何も佛法の道理にそむけた外道の邪執。それがかの天竺に於て。各々宗旨をたて。邪見を骨張して大盤石の如く凝かたまりたを。龍樹大士あらはれ給ひ。玄能を以て石を破ことく。彼等が邪執をこつはひ微塵に打碎かせられ。佛道の妨をする外道共が。殘らす腮くひちがへ向後息の根のあがらぬやうになされた愉快御手柄のほどを。今の一句にあらはされた。外道といへは惡魔外道と心得て。何ぞや鬼か天魔のやうに思へとも。さうではなひ天竺に九十五種の外道と云ふがあて。其種類がいかひことある。多くは迦葉佛の遺跡にあて。其中には頭をそり袈裟をかけ。さても殊勝な御出家さまと。案内しらぬ目からは。生佛のやうに思ふやうなもあれとも。肝心佛道の正見を取りちかへてゐるから。外道と云ふ名がつく。すれは油斷がならぬ。何れも御開山の御流をくみ。某は代々淨土眞宗。彼方の御門徒ぢやと思ひなから。存しの外いつの間にやら彼の外道の仲間入りしてゐる者がある。『遮毫

○極樂云云寶章二帖二通の文なり

澄隔千里。』わづかの聞まとひでうろたへると外道の仲間。『極樂には往生ぜすして、無間地獄に墮在すべきものなり。』夫ゆへ『いくたびも〳〵人にたつねて。他力の安心を決定せよ。一往聽聞しては必すあやまりあるへきなり』と御氣を付られた。時にかの有の見。無の見の類が。天竺に限らす支那にも日本にもある。今時些はかり儒學などするものが。撥無因果の邪見を起し地獄もなし極樂もなし。死ねは魂は天に歸して大風に灰まいたやうなものぢやと垣破いふ。亦一方には常見の者がありて。麥を蒔は麥豆をまけは豆。幾たひ蒔ても豆か麥ともならす。麥か豆ともならぬ。幾たひ生れかはりても。犬はいつまても犬人間はいつまても人間。すれは何も未來ではがることはなひと。此のやうにすまして居ものもある。是等が皆有無の二見。かの外道の仲間ぢや。『海上人不レ知二木之大如一レ魚。山中人不レ知二魚之大如一レ木。』凡夫は目に見ぬたことでなけれは理會ぬ。過去生の事と未來のことは。眼に見ぬから起りて。さまく疑ひ出し究耳に

○海上云云莊子の語なり

盃はどな小智惠で。地獄もなし極樂もなしと云ふが。闘投の飛礫。盲のやみうちいや。『治二病於未病一妙手之所レ能。』お注方が病か發りて。此が痛ひかしこが不豫ひと云ふ段にならねば。常人は驚かぬ。又名人の醫者は。何氣もなく飯も善食ふ酒も能ふ飲むうちに見つけて療治する。かの天竺で耆婆支那で扁鵲と云ふ名醫がそれで有りた。三世の因果と云ふことは。凡夫の目には見ねぬことぢや。そこを知て教ゑて下さるゝが佛の法。『西國の海邊に網ひき共の魚をとるに。雜猴見魚見と云ふものが有りて。小だかひ山へあがり。海の上を見て。さあ今魚があつまりた網をおろせ雜猴が寄た網ひけと云ふ。網ひき共の目には魚のあつまりたは見ねねども。魚見の指麾にしたがふて。網をひけは必す魚かとれる。今もそれと同しこと。佛は三世了達の智惠の御眸で。覺の高みから。迷の衆生を見おろし給ひ。さあ阿彌陀如來を賴め。極樂へ參るぞと。御下知なされて下さるゝを。凡夫は極樂があるやら地獄があるやら知らねども。佛の金言に隨ふて。御意の通

○魚見の喩

を信し奉れは。決定往生に疑ひはなひ。それて昔しから歴々の大德智者聖人等が。みな如來の敎勅を信じて。法をたふとませられたことぢや。問近ふ法然聖人や御開山。智惠學文も勝させられて。今日の凡夫と一口にはいはれまひが。其御方々がみな佛の御言を信じて。極樂まいりをなされた。『目なしどち〳〵聲に付てましませ。』大勢の盲人を一人の目あきが手引する如く。目の見ねぬものは右へ去て好やら。左へゆくが好やら。一寸先は知らねども。目あきの案内に隨ふて去く如く。愚痴無智の凡夫。盲目同前の我々は。たゝ聖人善知識方の御あとを慕ひ。雜行すてゝ一心一向。御助け一定。往生治定。御恩たふとや南無阿彌陀佛と喜ふはかりて。我しらす未來三惡道の呵責をたすかりて。眞實報土の往生無上涅槃の上もなひさとりの身とはなし下さるゝ。御文に五重の義を立て給ふ中に。御法義に入るは第一が宿善ぢや。夫れゆへたゝ「宿善にかぎれり」と仰せられた。何れ佛法は宿善でなけれは立入られぬ。然るに在座の面々は。法を聽聞して御

○目なし云云　一體の目なし草に出ゞ古來の俗謠なり

○御文　二帖十一通なり曰く一には宿善二には善知識三

には光明四
には信心五
には名號

○大乘の釋
○御經大經下卷なり

尤と御受を申し。地獄と聞けはをそろしく。極樂と聞けはたふとく。如來の御慈悲を身に引き受けて。難レ有やと喜ぶ身になりたれは。いつしか斷常の二見は離た。しかし是れは我身の賢てはなひ。「蒙二光觸一者離二有無一。」光明の御めぐみを。飽まで戴かせて下されたればこそ。斯る領解にはなりたれと。いよ〳〵廣大の御恩を喜へ。

宣說大乘無上法。證二歡喜地一生二安樂一。

此の御文は釋尊滅後七百年に方りて。南天竺に龍樹菩薩あらはれ給ひ。御身は初歡喜地と云ふ菩薩の位。百佛世界へ分身作佛。御自由なる御身分でありながら。而も他力易行の道を說せられ。自行化他たゝ念佛三昧を御本意とあそはされ。つねに往生極樂の素懷を遂け給ひたゞとある事をことはり給ふ文のこゝろ。「大乘とは御經に『猶如二大乘一運二載群萌一出二生死一故』」と御說きなされて。彌陀の本願。南無阿彌陀佛を此の上なひ大きな乘ものに御たとへなされた。何さま大は小をかねる。物は大きひに過たことはな

○無上の釋

○世間の數孔孟の道のことも也

ひ。駒兒道ゆかず。細少ひものは間にわたらぬ。「鼎小覆二公餗一」と云ふも。器がちひさふては物がこはれると云ふことやや。去れは彌陀本願の御のりものには。苟且なから十方衆生。一個ものこる者はなひ。「齊有二五乘用一」と御意なされて羽蟲や犬猫などの。佛法に緣遠いものは且く舍て。聲聞。緣覺。菩薩。人間。天上。法を聞て能かみわけのあるほどの者は。殘らす御あひて。何時でも自力をすてゝ。御助け候へと縋り奉れは。みな御たすけにあつかる。彌陀の本願はさても廣大な乘もの哉と云ふこゝろで「大乘無上法」と名つけられた。「無上」とは此上なし。御經に「一念大利則是具二足無上功德一」と說き給ふ。大利とは利は身に德のつくこと。此の上なしの大まふけぢやと云ふこと。蓮如上人の「人の辛勞もせすして。德を取る。上品は彌陀を賴ひて極樂へ參るにすぎたることはなひ」と御意なされたが夫れぢや。併し世間の數に。「君子喩レ義。小人喩レ利」と云ふて。今日尋常の俗人は。たゝ利倍のことに喩て。貨殖のすぢといへは。子細に氣か

○貨悖云云大學の語なり

付てぬかるものではなひ。あまり氣がつきすぎて。「追レ鹿獵師不レ見レ山」と欲に目が瞑ひではせまじひことをして公義の御厄害になるやうなことを仕出す。其やうな類が世間にまゝある。是れは小人愚俗のこと。又君子と云ふて。道を守る人は。「見レ得思レ義」と。利德のことになると。前後に氣を付けて。是れはむまひことぢやが。人の難儀にはならぬか。非道なことではなひかと。篤と勘辨して。道ならぬことなれは。濕手で粟のつかみ取りするやうなことが有ても。いかな〳〵其方へ心はふらぬ。此か君子小人の分ぢや。能ふ思ふてみれは。設ひ人の物かちをとすやうにして。大まふけをしても。「貨悖而入者亦悖而出。」一度にぐはつと資けた財は持のなひものぢや。夫れに今一念大利と說き。辛勞もせすに德を取ると仰せられては凡夫の好むことではあれとも。それでは身に付ぬではあるまひかと云ふに物は一概にはいへぬ。易に「天之所レ祐吉無レ不レ利」とあて。世間の財寶も。他の物かちをとす樣にして資たは。永ふ身に付ぬが。天から下され

○漢高祖の事及び郭巨か事

たのはいつ迄も身につく。漢の高祖の天下を取られたを。韓信が言に「陛下天」といひ。郭巨がはり出した釜に。「官不レ能レ奪。人不レ能レ取。天與二孝子郭巨一」と彫つけて有たやうなは。此からはもがゝひでも。自然にこけこんだ。天の御あたへなれはこりや危げはなひ。去れは佛を第一義天と申し奉る。今この南無阿彌陀佛の名號は。阿彌陀如來の第一義天の御慈悲から。智者にやるのではなひ。聖人にやるのてはなひ。末代惡人凡夫に下さるゝのぢやと。五濁惡時惡世界。濁惡邪見の我等を御目あてに御同向なし下されたを。御助け一定と一たひ信心の手に受け取りたれは。ありかたや不可稱不可說不可思議の。功德は行者の身にみち給ひ。永く佛種と成て下されたれは。再ひ失ふ氣づかひなく。追付無上涅槃の寶位にのはせ下さるゝ。斯るたふとひ御利益を一念の處に滿足させて下さるゝ法。亦とならびなひに由て。大乘無上の法と仰せられた。龍樹菩薩一大阿僧祇の御修行で初歡喜地の位までは昇らせられれとも。末の世の我等が。自力修行のな

○和讃に曰く五濁惡世の有情の選擇本願信すれば不可稱不可說不可思議の功德は行者の身にみてり

○歡喜地の釋

りがたひを哀ませられ。他力易行の道を教へ給ひて。極樂參りの御先達となりて下された。〻時にこの歡喜地と云ふは。何なる御位ぞと云へは。即ち彼聖の十住論に。「菩薩得二初地一其心多二歡喜一。諸佛無量德。我亦當レ得」と顯はされて。三賢位の菩薩方は。末の成佛をたしかに決定がならぬに由て歡喜どころへはゆかぬ。然るに十地の初地に入り給へは。此位から不退轉まうどのやうなことが有ても。退墮なさるゝ氣づかひなし。是非とも佛果に至り給ふことを。諦に安堵なさるゝゆへ。やれうれしや終には無上佛果の覺をうるぞと。それのみ喜ひ給ふゆへ。歡喜地と名くるとある。夫に付て御開山化身土卷に。「念佛行者住二歡喜地一。心多二歡喜一故」と御意なされて信をゐて往生安堵の身は。やがて參らふ。うれしやと云ふ喜びがあるゆへ是れも亦歡喜地の菩薩と同じことぢやと仰せられたは。我等が身にとりてありかたひ。又の御釋に「歡喜と云ふは。歡は身をよろこはしむるなり。喜は心をよろこはしむるなり。うへきことをゐてんすと。兼てさきよりよ

○御釋一念多念證文なり

○大納言公任が歌の事

ろこふ心なり」と御意なされた。心に喜びがあれは自然と容貌にも其喜びがあらはれる。〻大納言公任の歌に。「うれしさをむかしは袖につゝみけり今宵は身にもあまりぬるかな」と讀れたは。この鄉の家がらは。中納言まてすゝむ家て。先祖以來つねに大納言に任せられたことはなかりた。然るに公任の代に。始めて大納言に任せられたはどに。喜ひのあまり此の歌を讀れた意は。昔し中納言になりた時も。先祖より格式をゝとさず。中納言に任せられて。先つありかたひと喜んたれとも。其時の喜ひは袖につゝむはどの事で有たが。思ひもよらす此度大納言に任せられた。外聞といひ實義といひ。先祖の家を興すといひ。此のうれしさは身にあまり夜の目も合ぬはどの悦びぢやと云ふ歌のこゝろ。夫れを蓮如上人御文に引せられて。昔しは雜行正行の分別もなく。口にたゝ念佛はかりを稱へたらは。極樂へ參ふやうに思ふた時も。易行易修の法なれは。袖につゝむはどの悦ひは有たれとも。左はと身にあまりては覺ゐなんだが。秖今雜行正行の分別をき

○御文一帖第一通

ゝわけ。一向一心の領解になり。往生を他力の不思議に任せ。御助け一定と安堵した今宵の悦ひは。うれしさが身にもあまりて。さても難有や南無阿彌陀佛。

顯示難行陸路苦。信樂易行水道樂。

○難行道易行道の事

十住毘婆沙論の易行品に。「佛法有二無量門一。菩薩道有レ難有レ易。陸路歩行則苦。如二水道乘船則樂一」とある論文に據て。この偈頌を御つらねなされた龍樹菩薩如來一代の教を。難行道。易行道と二やうに御分なされて。難行道とは勤めにくひことの極り。易行道とは勤めやすひことの至極。聖道門の教は。何其やうに六箇しひそと云ふに。先つ佛道修行といへは。戒定惠の三學。大論に「譬如二一切万物有形之類。皆依レ地而住一。戒亦如レ是。爲二一切善法住處一」と。即ち龍樹菩薩の論判なされて。設へは天地の間にあらゆる山林河海。山も林も海も河も。一切の森羅萬象何によらず。皆大地をおり處とする。佛法の戒行が其如くちや。いでや佛道修行と志せは。諸

善万行こと細かにつとめねはならぬが。其つとむる善法。みなこの戒行がより處ぢや。是れを地盤とせねは。佛道修行は成ぬそと教に給ひた。已に釋迦牟尼如來。入涅槃近つき給ふ時。阿難の御尋ねに。もし如來御入滅あそばされての後は。誰をか師匠と仕りませふぞと有りたれば。世尊の御こたへに。我滅度の後は。波羅提木叉を師匠とせよと仰せられた。波羅提木叉とは。戒行のことで。廣く大小乘に亘りて教に置れたことぢやが。小乘のは。儘形壽。命のあらんかぎり。大乘のは盡未來。世々生々ゆくすえ。いつ迄と云ふ限なし。是れを持つ日になりては。大底やおは形のことではなひ。此戒に依りて。身の行儀をなをし。心法を調へたれは身は。欲界散地に在りなから。心は上界の天人の如くおさまり切た處で。始めて無漏の智惠をうる。次第の如く。これを戒定惠の三學と云ふ。この三學を開けは六度萬行。其修行の間が苟且ながら。三大阿僧祇劫。其永ひ修行に依て。やう〳〵佛果の覺に到るとある。是れは聖道門難行道の教。易行道と云ふ

○散地心が散亂驕動の地なり

○阿彌陀佛云云易行品の文なり
○八難前に出づ

は其むつかしひ裏で。心やすひこと此上なし。「阿彌陀佛本願如」是。」雜行すて〻彼尊をたのめは。信佛の因緣わづかに頼みまするばかりで。五趣八難の迷ひの海を一飛にして。眞實報土の往生をとげさせ下さる〻。「故我常念。」若したとふとひ緣があるゆへ。我は常住不斷。阿彌陀如來の御慈悲を念し奉るぞと。龍樹菩薩御みづからの領解を御のべなされ。我を先として この通りぢやはどに。末の代の惡人凡夫は。猶さら彌陀の本願を頼め。固より聖道難行の教。法門こときものゝ企て及ふことではなひが。しかし難行ひことの比況ものがなくは。易行他力の心やすひ。ありがたさを知るまひと思召して。わざと難行易行の二道を双て御みせなされ。偉弱下劣の我等には。末代相應の要法これこそ好けれと。易行道他力の御安心を御すゝめ下された「佛法有二無量門一。菩薩道有レ難有レ易。」百千里もあるはるゝの道を。馬にも竹輿にものらず。但我れ一人徒て歩は。大底苦勞なことではなひ。然るにもし船にのり順風にまかせてゆく時は。いさゝか我身に苦

勞いらず。是れはと樂なことはなひ。去れは自力難行の教は。かの遠路を日の力を窮め。徒あるきして行ことゝ。甚た大腦ことぢや。淨土門他力の御おしへは。海路を船て渡る如く。行者の苦勞いらず。願力不思議でひとりでに涅槃のかの岸へ到る。

○御開山の因緣

○建仁三年恐くは建仁元年なるべし人皇八十三代土御門天皇辛酉の二月十日なり

既に御開山廿九歳の御年まで。叡山に御座なされ。自力難行の御つとめて有れとも。世が末代になりては。我も他も及はぬことゝ思召しきはめられ。建仁三年の春。天台宗の數珠を切りて法然聖人の御弟子とならせられた。そこを御傳鈔に「これすなはち世くたり人つたなくして。難行の小路まよひやすきに由て。易行の大道におもむかんとなり。」と何れもかねゝ聽聞の通りぢや。しかし遠方の旅行。かちあるき太儀とは云ふものゝ。其身も無事で。脚腰も達者に有ふならは。思ひたゝれまひものではなけれとも。腰ぬけ蹄人の類。又は年よりて行歩の不自由なものなどは。かつふく叶はぬ。智者上人の歴々。願行の脚腰の達者な御衆は。自力難行の歩行も。是非ならは勤まらふけれとも。指しあた

○彌陀云云 高僧和讃の文なり

○淨土云云 出據未考

りて願行の脚腰たゝぬ御座の我等。自力難行は思ひこと絶たところを難有や。「彌陀弘誓の船のみぞ。のてせかならす渡しける。」御助け候へと。一念御慈悲にすかり奉れは。何の苦勞造作もなく。願力の不思議として。眞實報土へ御むかへ下さるゝ。そこを大きな船に乘りて。海路を濟るに御たとへなされた。しかし「本願に乘するは。信心の深きによるへし」と。法然聖人の御意なされて。本願の御船にのると云ふは。信心一つにきはまる。若し本願を疑ふて。自力を先きだてると。眞實報土の往生は叶はぬ。「淨土非ニ難易一。各々在レ人。難者疑情。咫尺萬里。易者信心。萬里咫尺。」ひとゝはりでは聖道門が難行道。淨土門が易行道なれとも。今の文によれは。易行道の中に。亦難易の二つがわかれた。是は彼尊から難行易行の二道をつけ給ふではなひ。やはり災は下から。みな行者の方から仕だすことゝや。往生を彼尊にまかせて。御助けの御恩を喜んでおれは。淨土へは參りやすけれとも。無用な自力をまぜると。如來の御慈悲に遠ざかり。次第に極樂

○順風逆風の喩

の道か遠くなる。何んばうの迂同になふふもしれぬ。夫れで聖人の「大悲願船以ニ濟淨信心一爲ニ順風一」と御意なされた。船にのり帆をかけても。追手の風がなけれは思ふやうには行ぬ。然るに順風に帆をあけ。風にまかせて爲すは愉快ものぢや。達者にあるく者が。廿日。三十日もかゝりて。ひやつと行くはどのおは道を。わづか二日三日に思ふ湊につくは船の德ぢや。今が夫れと同じ意で。先德は「如レ遣ニ風帆於順水一」と喩へられて。彌陀を頼むて念佛申す身は。弘誓の船に乘りたなれとも。順風に帆をあげぬは櫓櫂の世話が止ぬ如く。弘誓の船に乘りても。順風の追手がなけれは。報土往生がならす。弘誓の船に追手の風とは。御助け一定の信心一つに窮る。罷去なから船も順風の時は心よひものなれとも。若し難風にあふた時はこはひものぢや。「武夫の矢橋のわたし近くとも。いそがはまはれ勢田の長橋。」船の上順風と見て乘り出した處が。思ひの外逆風になり。天地まつくろに成りて吹きたてる風に檣もをれ。船は何國ともなふ吹き流さるゝ時

○黒風　天地陰闇となりて吹き來る風なり

は。何ほど狼狽ても叶はぬ。併し乍ら吹きなかされて。汀に着た處が。唐ても天竺でも好ところへ茅船して。其處の介抱にあづかり。二年三年逗留してゐるうち。我故郷では乗り出した日を命日として。あとのとふらひしてゐる處に。先きの國より日和を見定めて船を出し。この日本の我在處へ送りといけて貰ふて。再ひ妻子に對面の出來るもあり。亦夫れぎりて破船して海の藻屑となるもある。法華經普門品に。「黒風吹二其船舫一漂二墮羅刹鬼國一」と説き給ふ如く。吹き流されて去ところが鬼すむ嶋。船の中ではやれうれしや。命は拾ふたぞと喜ふ處に。思ひの外濱邊に異形の鬼共が待うけて。一人も殘らす鬼一口の餌食に成りてしまふもあるゆへ。婆婆の船は油斷がならぬ。然るに其やうな氣づかひげのなひは弘誓のみふねぢやが。去りながら是も油斷のならぬことがある。「乗りにても心ゆるすな」と古人も申し置かれたこともあるに由りて。弘誓の船ぢやと云ふても。若し暴風に遇たらは。吹き流されまひとはいはれぬ。是は珍しひことを聞くと思は

○和讃　疑惑讃なり

れふか。極樂參りと志して。旦夕念佛申す人は。先つは弘誓の船に頼むなれども。其中に動てかの難風にあふ人がある。其難風とは何にと云ふに。彌陀を頼みなから雑行雑修自力疑心の止ぬが難風ぢや。この難風にあふとこへ吹き流されふもしれぬが。其うち猶も天幸せ好て。邊地。懈慢。疑城。胎宮の化土へ吹きながさるれは。五百年の間。不見三寶の咎を蒙むれとも。五百年すぎると。眞實報土の我郷親へ還るとあるが。しかし是れは期にならぬ。何なれは御和讃に「罪福ふかく信じつゝ。善本修習するひとは。疑心の善人なるゆへに。方便化土にとまるなり」とあるから視れは。化土へ生るゝほどの人は。みな歴々の善人ぢや。善人は善人なれとも。本願疑ふた過で。眞實報土の往生叶はす。化土に留らるゝとある。是れは善人の仕そこなひ。時に我等を善人とはいはれまひ。若し本願を疑ふたれはうちつけて疑心の悪人。其ゆき處はどこぞといへは。是れも和讃に。「衆生有碍のさとりにて。無碍の佛智をうたがへは。曇婆羅頻陀羅地獄にて。多

○和讃　諸經讃なり
○曇婆羅頻

陀羅地獄諸論釋の中に見ゆ唯大事因縁經のみ此目あり

刼衆苦にしつむなり。」かの觀音經にあるとをり。「黑風吹二船舫一漂二墮羅刹鬼國一」と。無間地獄の鬼が嶋へ吹ながされて有ふ。

憶念彌陀佛本願。自然即時入必定。

○彌陀佛本願の釋

龍樹菩薩。十住論易行品に。「阿彌陀佛本願如レ是。若人念我稱名自歸即入二必定一。得二阿耨多羅三藐三菩提一。是故常應二憶念一」とある文に據りて。今の偈頌を遊はされた。彌陀佛本願とは。念佛往生の御ちかひ。南無阿彌陀佛とたのませ給ひて。迎へんとちかひ給へるを。深く信してとなふるが目出度く候。我を頼め。頼ひものを迎ゐるぞと。誓ひ給ふ本願不思議の御こととはりを聽聞して。さてもありがたや。若る造惡のいたつらものを。やうもなく御助けあることのたふとやと。一念如來を頼み奉る姿を憶念彌陀佛本願と仰せられた。實時に憶念と云ふは。相續にかゝる方で。昨日や今日と御恩喜んでゐるが。即ち憶念の姿ぢや。然らは「前念命終後念即生」と最初一念の處に。往生の御約束が濟たではなひ與。それに今本願を憶念し

○憶念の釋

○前念云云二卷鈔に曰く信二受本願一前念命終、即得往生後念即生

○御文二帖一通なり

○如來云云一帖二通の文なり

て。往生が定まると仰せられては。何とやら手のびがするやうに思はるゝが何にと云ふに。これに緣があて。爰の憶念と云ふは。即ち最利彼尊を頼みました一念の信心のことぢや。併し頼みごとは頼みましても。其あとの續かす。「其儘うちすて候へは。信心もうせ候へし」と。御文にも御意なされて。一旦は信心に本づひたやうなれとも。其信心が若存若亡して。相續せぬのが間あることぢや。今は其やうな根の遂げぬのではなひ。「如來をたのむ心の。ねてもさめても憶念の心つねにしてわすれざるを。本願たのむ決定信をいふなり。」一念歸命の領解。いつまでも相かはらす。御恩をたふとひ。御慈悲を喜んて。つねに憶念の心のある人こそ。誠に最初の一念に。往生の濟た驗なれと。後の相續を見て。一念歸命の御約束を見定め給ふ聖人の思召しぢやに由て。今信心の別號を出して憶念と仰せられた。夫ゆへ信卷に。「願成就一念即是專心。々々是深心」と。段々他力信心の異稱を御あげなされて。最ちの仕舞に。「憶念即是眞實一心

也」と御意なされた。然れは今こゝの憶念とは。即ち信心のこと。雜行すてゝ如來を頼む一念の當體に。往生の定る迅速ことを御示しなされた。唯識論に。「於二習習境一令二心明記一。數憶二持習所受境一令レ不二忘失一」とある然れは何によらす。見たことを聞たことを諦におぼへて忘れぬが憶念。最初には躍あがるほどに。ありがたがりても。後に其信心が冷てしまふ樣なことでは。眞の信心でなし。眞の喜ひではなひ。信心定るしるしには慶喜の心おこるなり。最初歸命の一念なり。臨終の一刹那に至るまで。去年も今年も昨日も今日も。思ひ出す度ごとに往生治定。南無阿彌陀佛と喜ひの模樣のかはらぬが。即ち憶念の姿にてある。○自然即時入必定の釋「自然即時入二必定一」とは上の文は我等が往生を安堵した。御助け一定の信心。今は其信心に由りて。娑婆に居なから必定の位。聖衆莊嚴の仲間入りをさせて下さるゝ御利益を顯はされた。○自然云云佛敎は因緣所生を談す自然とは法爾自然。どうしたことで左右なるやら。其譯はしらねとも。天然と人の世話いらず成ゆくことは皆自然と云ふものぢや。凡そ天地の間にありとあらゆる草木國土森羅萬象。何から箇から皆自然。上くよく氣をつけて見れは。不思議なものぢや。烏は染さるに黑く。鷺は晒さいるに白し。火は燃て上へのぼり。水は流れて卑きに下る。柳は綠。花ば紅。詎ありて造作るものはなひに。任運に左右なりゆく。是か造物者の無盡藏。造化の自然と云ふものぢや。今は阿彌陀如來の本願力の自然。聖人の御ことばに。「自然と云ふは本よりしからしむと云ふてことばなり。彌陀佛の御ちかひの。本より行者のはからひに非ずして。南無阿彌陀佛とたのませ給ひて。迎ひんとはからはせ給ひたるに由て。行者のよからんともあしからんとも思はぬを。自然とは申すぞときゝて候。」凡夫の料簡はみな顚倒妄想。何事を思ひ付ても。そらごとたはこと。其さかさまな料簡で。若したらは御氣に入らふか。是れては御意に入るまひかと丈尺を以て。虛空を量りてみるやうに。及ばぬ猾狡て。佛智不思議を計らふは。大きな僻事行者の方から好とも不とも。計らひだては必す無用。たゝ不思議と御信し

○自然外道に墮する莫れ

○聖人和讃の奥書に出づ

候うへは。鬼角の計らひあるへからす。佛智の不思議で我しらす。若るいたつらものを助け給ふことのたふとさよと。うちあきれて。御助けの御恩を喜ふはかりにてある即時とは行卷に『即言由レ聞二願力一。光二明報土眞實ノ因一。決二定時尅之極促一也』と。祖師聖人御ねんごろに御釋なされて。今までは逃つ竄つ。彼尊に後を見せて逃まはりたものが。宿善に取まはされ。御慈悲に追つめられて。是非とも頼まねはならぬやうになりて。御助け候へと自力をすてゝ。大悲の御袖に縋り奉る一念の處を。時尅の極促と云ふ御文に「いくたびも他力よりさつけらるゝ處の佛智の不思議なりと心得て一念を以ては往生治定の時尅とさだめ。その時命のぶれは。自然と多念に及ふ道理なり」と御示なされたは爰ぢや。即に同時即。異時即の異かある今のは同時即。今年申し入れて來年御返答があるの。今日頼みまして明日御たすけぢやのと云ふやうな。のびゝなことではなひ。御助け候への一念。間に髮を入れず。其まゝ往生を定め下さるゝ。そこを自然即時と仰せ

○御文三帖三通なり

られた。入二必定一とは。現生正定聚。此に居ながら極樂の聖衆の數に入ると云ふことぢや。出かはりに新參の春いれをきて。下地の師走まだいにもせす。冬の間に節分があれは。師走の既にならぬうちから。まう春の氣になりたれとも。歳除をこへて元日にならねは。年の始の儀式はなひ。信決定の身は。一念歸命の立處より。はや往生の春は迎ひたれとも。五年三年娑婆逗留のうちは。また迷の冬が殘りてあるに由て。煩惱もおこり妄念もおこりて。心の内は忙しけれとも。殘りた冬も五日十日の間なれば。まう長がしれた。追付新玉の春になる。今も其の如く。五年三年この世にある間は。煩惱罪障に取りみだすとも。それは須臾の間。追付淨土に往生を遂げたらは。そこでこそ無上涅槃。末は永くゆるりと覺の春をたのしむ身のうへとなし下さる。

唯能常稱如來號。應報大悲弘誓恩。

易行品の中に。「阿彌陀佛本願如レ是。若人念レ我稱レ名自歸。即入二必定一得二

○戯場の讃言葉の喩

○他力云云聖德讃なり

○南無云云高僧和讃なり

阿耨多羅三藐三菩提」。是故常應三憶念」と顯はされたる論文に依りて。今の偈頌をつらね給ふ。「舞人のすぐるゝわざにことたへて。はむる言葉に名をぞ呼ける。」戯場狂言などの藝のはづひだ處て。其者の名をよぶ。名を呼が直に稱るのぢや。南無阿彌陀佛と云ふはほめたてまつることばなり。彼尊の嘉號を口にあらはして稱ゐるか。取りもなをさず本願不思議の功勳のほどを稱揚る道理ぢや。それぢやに依て。隨分となへて御恩を喜べ。否はめると云ふも大概ほどのありさふなこと。其やうに常住はめては。些くどひではなひかと云ふに。そこが「大悲傳普化。眞成報佛恩」のこゝろ。「他力の信をゐんひとは。御恩報せんためにとて。如來二種の回向を。十方にひとしくひろむへし」ともあり。「南無阿彌陀佛をとけるには。衆善海水のごとくなり。この清淨の善身にゐたり。ひとしく衆生に回向せん」と御意なされて。無慚無愧の我等が身。我は好かれ他はわるかれと思ふやうな身がちな根性で。衆生濟度の段へ手のとゝくことではなけれとも。一念歸命の時。往生の御約束をすませて下された難有さに。廣大の御恩を存じて。名號を唱ゐ喜べは。他力回向の御仕かけて。其念佛の功德法界に遍滿して佛法なき處に佛法がひろまり。信者のなひ處に信者が出來て。極樂參りの東道同行が多くなれは。おのづから大悲の御肩がやすまり。やれうれしやと御安堵をなされ。青蓮の眉を開かせられての御滿足ぢやはどに。一念にあまる稱名を。法界の衆生に回向すへしと候は。さるへきことにて候。如來大悲の御恩を思はゝ。必ず稱名念佛に油斷をするな。勿論余のませことかた〳〵無用ぢやとあることで。「唯能常」と仰せられた。「唯」の字は。揀勝の義。揀持の義で。もろ〳〵の雜行雜修をふりすてゝ。一心一向余念なく如來を頼み奉ること。能は任也。勝也と訓じて。あたふとよむ文字。我力でなることは力にあたふと云ふ。ならぬことなれは力にあたはぬと云ふ俚語ふいへはみことゝ云ふこと。設へは是はどの重荷をみこともつ。是はどの遠路をみごと歩くなと云ふ。其時のみごとが今の能の字。夫から起り

○唯能の釋

て。身におぼえた讀かき算盤。又は遊藝。舞。雜子のやうなことても。身に嗜むて何時ても硯に向へはもの書く。十露盤あてがへば算用する。時の興に由て舞も舞ふ。謠もうたふ。能其事を一いろでも間に合すおぼへのあるを。總て藝能と云ふ。根から藝のなひ者を。那奴は能なし猿ぢやと云ふ『任敖長食レ粟而已。』大食くふばかりて。何一つ取ゑのなひは。世のすたりものぢやが。今此御座へ參詣の面々。其能なし猿はあるまひ。相應によみ書算用舞はやし。何でもいける。しかし世間の事には藝もあり能もあり。天晴智惠もあれとも。佛法の御座鋪へ出しては。何れも能なし猿ぢや何なれば佛法の藝能と云ふは戒定惠の三學。これを習ひおはゑねはならぬ然るに我等は三學無分。戒の定のと云ふことは。吸ふて見ることもならぬ佛法の方ては無藝無能。實に三寶のすたりもの。根から取ゑはなひが。爰にありがたひは。易行易修の御本願。行住坐臥もゑらはす。時處諸緣を論せす。時をいはす處をさらはす。立てなりとも。居なりとも。臥てなりと

も。起てなりとも。思ひ出たさば南無阿彌陀佛。年寄て體が不自由に成り起居を詮度するやうな老人でも。腰ぬけの居計ひ。口は達者なものぢやが無益なこと云ふて。あだに居諸を送らふより。根機にかなふて。能つとまる稱ゑやすひ名號を稱ゑて。舌の根のまはるうちは。一日でも如來廣大の御恩を報し奉れとて。「唯能常稱二如來號一」と御催促あられた。

○常の字義

○不斷常の事

は是れに不斷相續の異が有りて。不斷常と云ふは。設へは人の體に脉のうつのや。亦は川の流れるなどは。氣をつけて見てゐる時も。亦見て居ぬ時も。夜ても晝ても。須臾のたへ間なく。脈ののびること晝夜は八百六十丈といひ。水の流れ逝こと夜晝に七十五里と云ふ。是等はつねにして刹那のたへ間もなひゆへ。名けて不斷常と云ふ。次に相續常と云ふは。たとへは醫者が藥のうはづゝみに煎じやう常の如くと書く。常の如くといへはとて年中藥のみつゝけるではなけれとも。天目に水一杯。之を一杯に煎じると云ふは。昔も今も同しこと。先立ちて煎じた時も。亦此度煎じるも。煎じ

○相續常の事